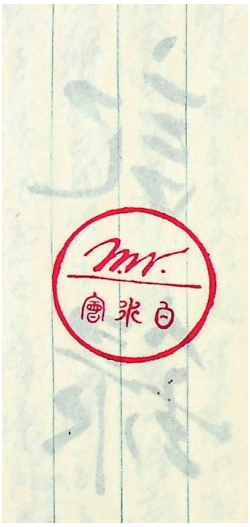
テキスト版＊

白水会 記録 会計

佐藤彌十郎



テキスト版発行にあたって

岩内町郷土館に白水会が作成した『記録会計』と題する古い資料があります。土香る会会員の一人が郷土館を訪れた際にたまたまその資料を目にする機会があったので読んでみたところ、有島武郎との繋がりを得た岩内の若者たちが、文化の真髄を汲み取ろうと奮闘する熱い魂の軌跡が描かれており、その活動の記録に圧倒されました。そこで多くの人に読んでほしいとの思いから全ページをデジタルスキャンし、さらに、その記述を全てテキストデータ化することを思いつき、郷土館に呼びかけました。それまでは研究者や関心のある人などが見ることはあっても一般の人には無縁の存在になっていたので、郷土館としてもこの提案を共有し、岩内町教育委員会の許可を得て、ここに有島農場無償解放百年・白水会結成百年を記念する事業として、デジタルバージョンで発行することになりました。

（岩内町郷土館／土香る会）

目次

テキスト版発行にあたって ―― 1
白水会の活動 ―― 3
有島武郎の農場解放と白水会 ―― 4
編集方針 ―― 4

白水会記録会計 ―― 5
記録 ―― 8
会計 ―― 114
白水会々員 ―― 136

参考資料 ―― 146
岩内白水会年表 ―― 147
郷土館お宝・珍品展part8【有島武郎と「白水会」の100年】 ―― 149

白水会「記録と会計」の著者　佐藤彌十郎について ―― 150

白水会の活動

岩内町郷土館

大正デモクラシーで育った当時の全国の青年の多くは、有島武郎の生き方や思想に共感して、あちこちに「有島研究会」的なサークルがあったようです。その中の一つが岩内にもあり、サークルの名前を「白水会（はくすいかい）」と呼びました。

この白水は有島武郎の個人雑誌「泉」の一字を上下半分に分けたことに由来し、１９２２（大正11）年に有島が岩内を訪れたことをきっかけにして誕生します。

この白水会は他のサークルとは一味違ったものでした。というのは、この中に有島の名作『生れ出づる悩み』の主人公（木本青年）のモデル、木田金次郎がいたことです。岩内での「泉」の購読者が63名もいたというのも、それを表しています。

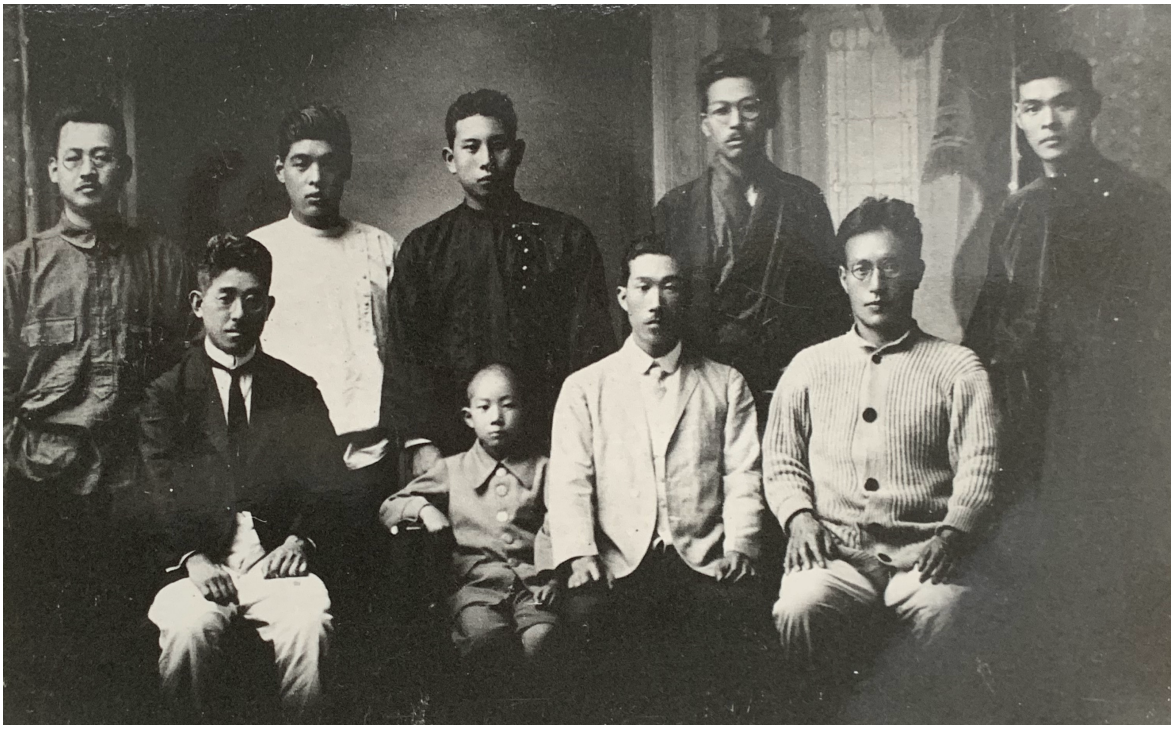
また、会の中心人物に佐藤彌十郎がいたことも会の性格・運動に大きな影響を与えます。当初11名で始まった会は、その後徐々に会員を増やしていき、有島の研究はもとより、芸術文化・政治・近代思想の啓蒙団体として、現代の岩内文化に大きな影響を与えます。

この影響の一つが、催しをしたら必ず入場料を頂く、という考えです。今では常識になっていますが、入場料の設定は人を集めるためにも有効な手段である、という考えは、当時の地方としては珍しいことであったと思っています。

岩内町は、漁業と水産加工で生きてきた「魚臭い」町ですが、一種独特な文化（美術館２館、郷土館１館、半世紀以上活動を続けているアマチュア演劇、そして混声・女声・高齢者と合唱団が３団体、江戸時代から続く俳句活動等があると思っています。

その礎を築いたのが、この白水会の活動でした。

（坂井弘治記）



【写真】
白水会の方々
（前列右から）
木田金次郎、
笹沼孝蔵、
笹沼浩平、
泉天郎
（後列右から）
佐々木信吉、
鎌田徳悦、
笹谷貫太郎、
佐々木三郎、
佐藤彌十郎

有島武郎の農場解放と白水会

土香る会（有島記念館と歩む会）

有島農場解放宣言の二日前１９２２年7月16日、有島武郎は木田金次郎に伴なわれて岩内町を訪れました。その日の夜大勢の聴衆を前に講演し、夜は熱心な青年たちと深夜まで語らっています。翌日、武郎は三十人程の人々と岩内老古美の安達牧場を訪れ、牧場主の歓待に感激したことが日記に記されています。この場に集まった人たちの間で「白水会」の結成が提起されました。（『緑人社の青春』亀井志乃著より）

「白水」とは、有島の個人雑誌『泉』の字にちなんだ命名です。

この当時、有島武郎の個人雑誌『泉』の購読者が岩内に63名いたということに驚きます。

彼らを中心に岩内の人たちがいかに熱狂的な歓迎を示したのか、有島武郎の日記にも記されています。

「八時頃から講話をして九時半に及んだろうか。それからつぎつぎに質問が連発されたが明快に答弁することができた。自分の気持ちが自分にすっかり落ちついたことが察せられる。宿に帰ると有志の人たちが押しかけて来て座敷で三十人程で十二時過ぎ一時頃まで又話し合った。実に一同の熱心なのには驚くほかなかった」（最後の日記／大正十一年七月十六日）

『記録会計白水会』は、その後の活動経過についても記載し、大正一一年一一月二十三日に有島武郎に馬鈴薯を送ったこと、翌大正十二年七月には「有島先生の死」を記録しています。

有島武郎の岩内訪問によって生まれた「白水会」が地域にもたらしたものは何だったのか。

佐藤弥十郎は、次のように述べています。

「この会はまったく自然発生ともいうべきもので、会則もなく、会員もなく、したがって役員もない、一見、エタイの知れないグループではあったが、それが、かえって不文律的に、強力に団結し、さかんな活動をつづけたことは、今から思えば快心事であった。当時、封建天国であったこの町に、天邪鬼のようにあらわれた白水会が、左翼、赤と睨まれ、平地に波瀾を巻き起こす“不逞の輩”あつかいにされたのは当然のことであった。」（「四十年前の黎明運動白水会」佐藤弥十郎）

まさに、白水会は、有島武郎が理想として掲げた「コモンズと相互扶助」に相通ずるコミュニティであったといえるでしょう。有島農場解放の二大理念が、狩太共生農団だけでなく、岩内の地で「白水会」にも体現されたと言って良いのではないでしょうか。

２０２２年は、もう一つの農場解放百年ともいうべき、白水会結成百年です。

○編集方針

１．全体を原本のページに合わせて分割したが、一部、文章の繋がりを優先した。

２．行変えは読みやすさを基本に編集した。

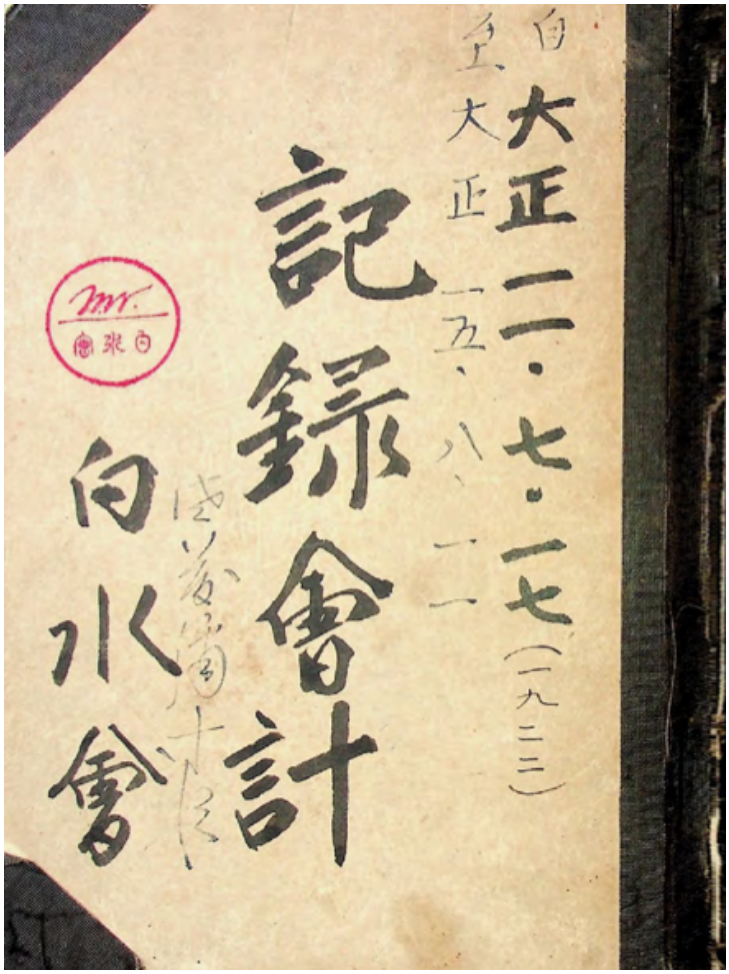
３．史料であることを考え、字体、仮名遣いは多くを原本通りとした。様(様)、観(觀)、楽(樂)のように新字体とよく似たものは新字体を使った。

４．句読点の使い方が現代と異なっているが原本通りとした。なお、句(読)点のない所が多く見られ、次の文が続く場合は可能な範囲で一字アキとした。

５．新聞記事の旧字体、旧仮名遣いは新字体、現代仮名遣いとした。漢字のルビは一部を除いて省略した。

６．明らかに間違いと判るものについても原本通りとした。時に（ママ）と追記したものもある。

（編集者）



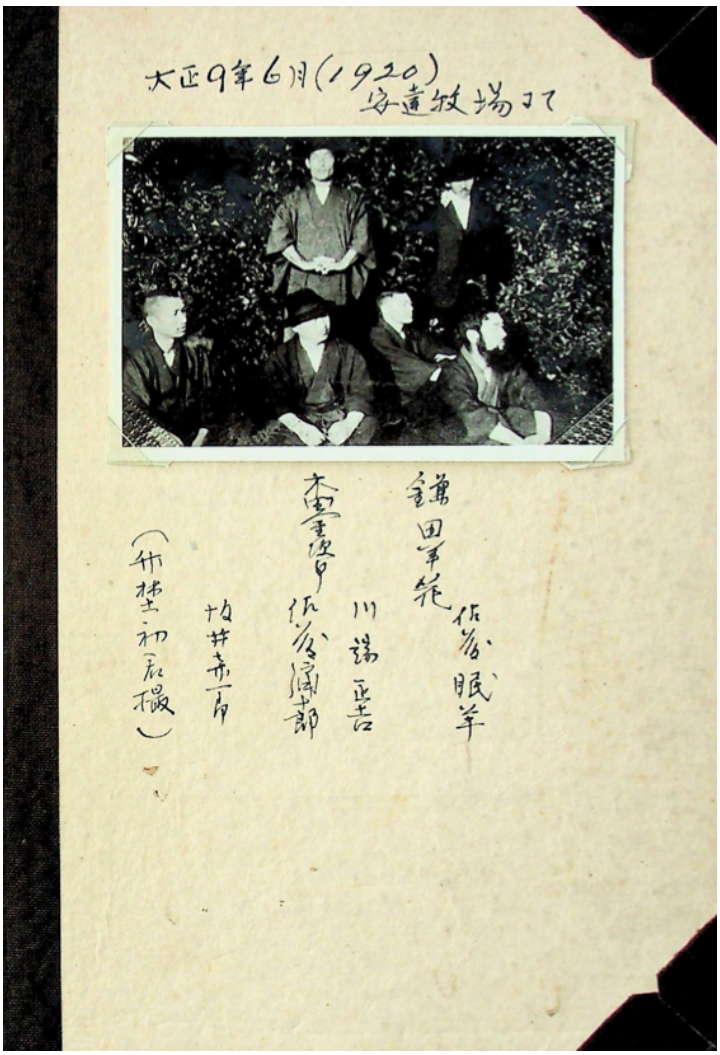
記録會計　白水会

自大正一一・七・一七（一九二二）

至大正一五・八・一一

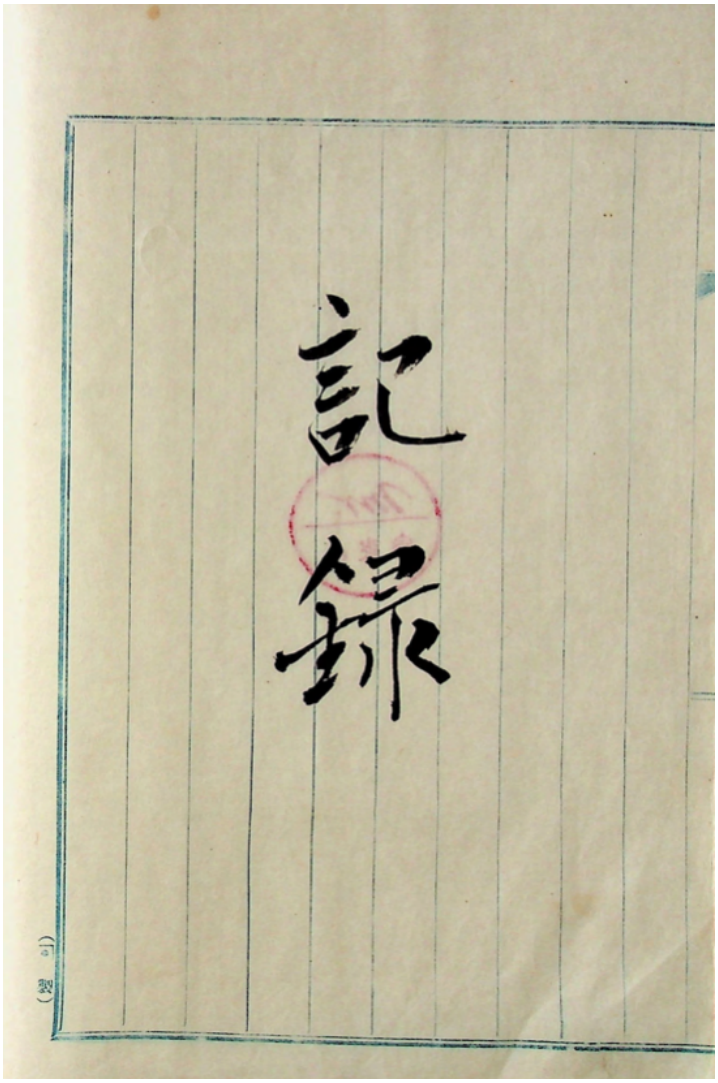
佐藤彌十郎

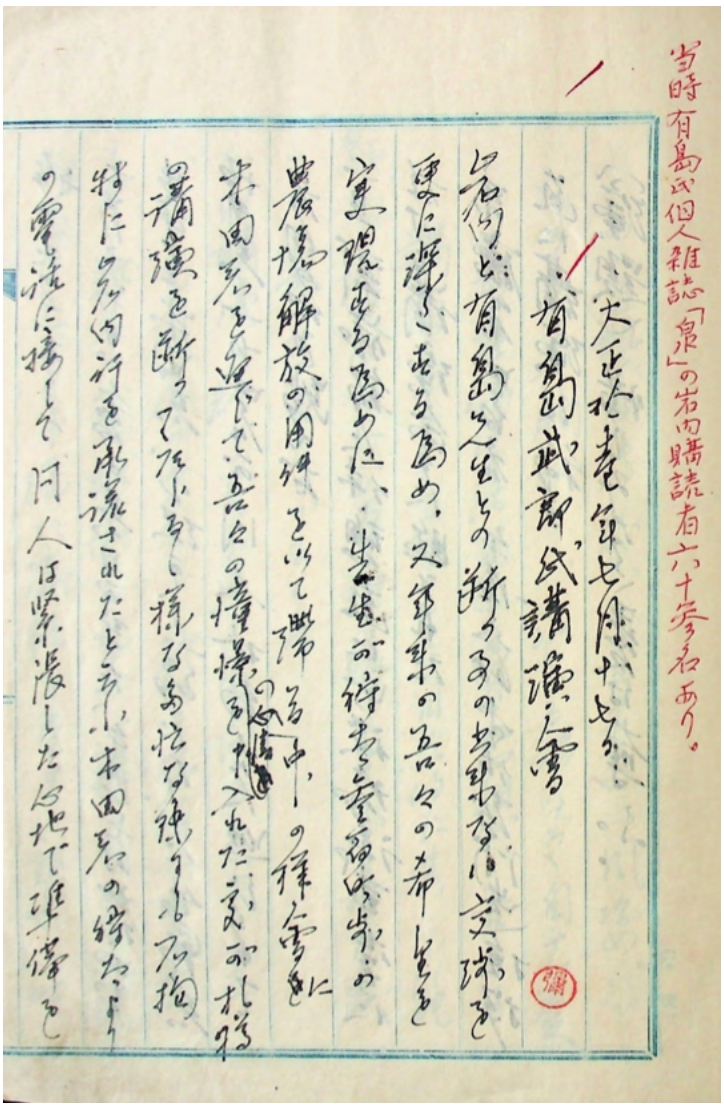
大正９年６月（１９２０）
安達牧場にて
［集合写真］
佐藤眠羊　（前右端）
鎌田羊花　（後右）
川端正吉　（前右から二人目）
木田金次郎（後左）
佐藤彌十郎（前左から二人目）
坂井喜一郎（前左端）
（竹埜初君撮）



一八七八年明治十一年生（東京小石川）
一九二三年大正十二年六月九日死亡（軽井沢）満45歳）
明治四十、十二月　札幌赴任
大正三、初冬　退任
大正五、夫人逝去
一九二二年（大正十一年七月十六日、十七日岩内来町
［写真］
安達牧場の有島先生、腰をおろしているのは泉天郎

記録



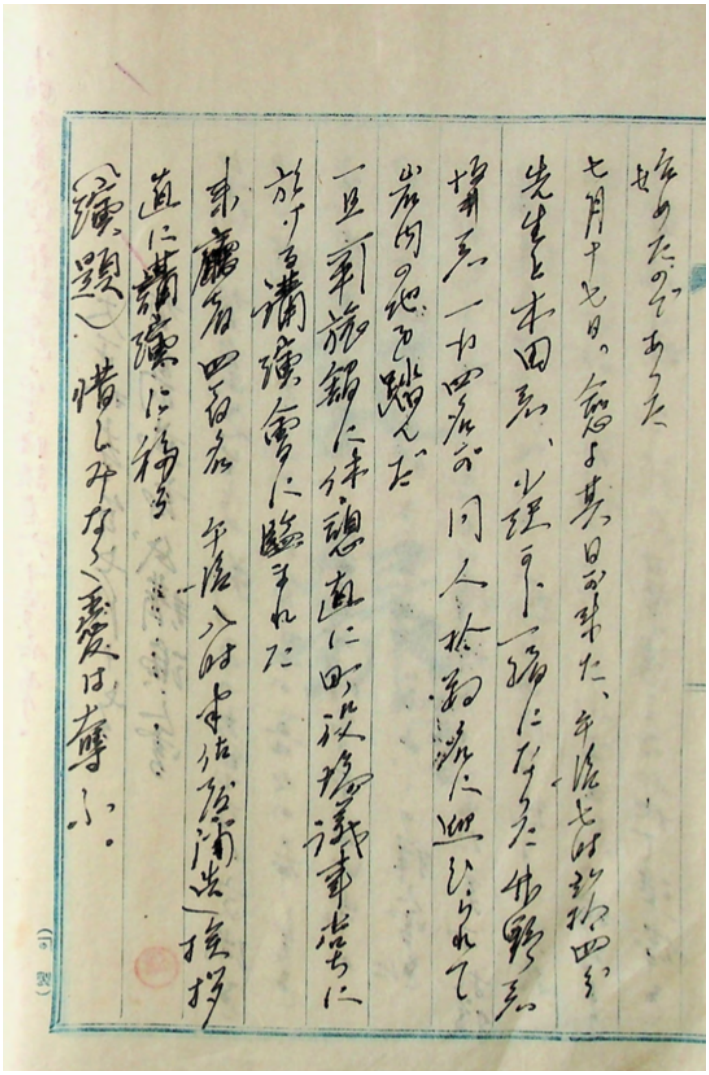


1―1　大正拾壱年七月十七日、有島武郎氏講演會

岩内と有島先生との断つ事の出来ない交渉を更に深くする為め、又年来の吾々の希望を実現する為めに、先生が狩太参百町歩の農場解放の用件を以て滞留中の機會に木田君を通じて吾々の憧憬の心情を申入れた處が札樽の講演を断って居らるる様な多忙な際にも不拘特に岩内行を承諾されたと云ふ木田君の狩太よりの電話に接して同人は緊張した心地で準備を始めたのであった。

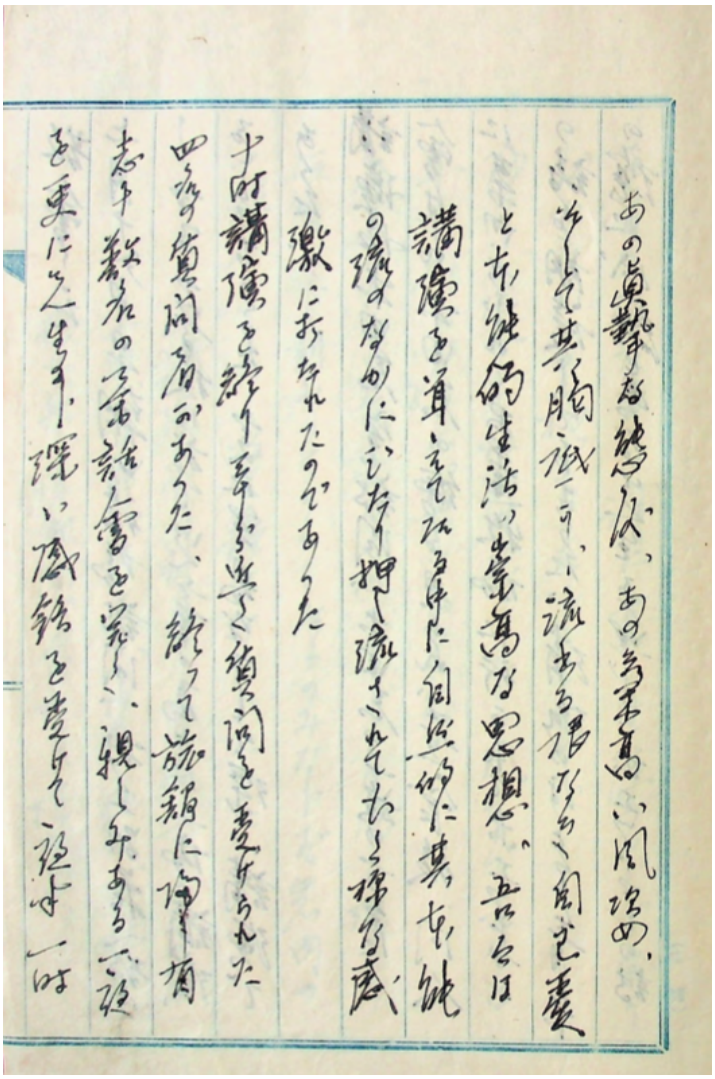
※本文冒頭欄外の注記：当時有島氏個人雑誌「泉」の岩内購読者六十参名あり※。

※１９２２（大正11）年発行の有島武郎個人雑誌『泉』創刊号の最終ページ、編集者足助素一による後記の中に、岩内白水会の記述がある。雑誌は地方の書店で取り扱いされなかったため、愛読者は取り寄せて購入していたが、岩内では木田金次郎を中心としたグループで購入、購読していた。（岩内町郷土館展示パネルから）



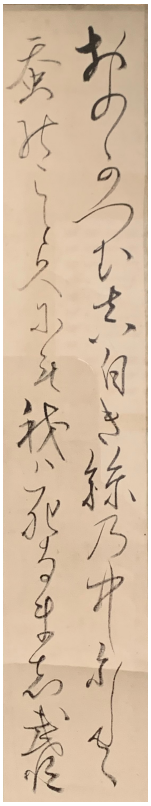
七月十七日※。愈よ其日が来た、午後七時弐拾四分　先生と木田君、小沢から一緒になった竹野君、坂井君一行四名が同人拾数名に迎えられて岩内の地を踏んだ
一旦丁平※旅館に休憩　直に町役場議事堂に於ける講演會に臨まれた
来廳者四百名、午後八時半佐藤彌造※挨拶　直に講演に移る
（演題）惜しみなく愛は奪ふ

※実際は十六日
※丁平（ちょうひら）は藤田旅館の屋号
※彌十郎襲名以前の名前。彌三あるいは彌蔵と書く場合もあった（以下同じ）

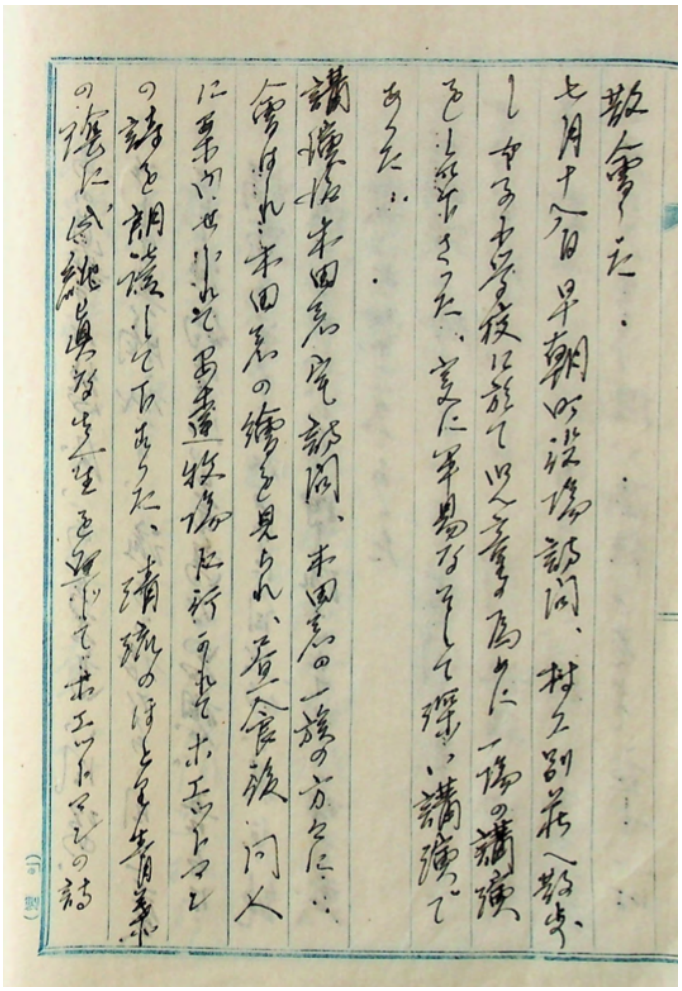


あの真摯な態度、あの氣高い風姿、そして其胸底から流出る限なき自己愛と本能的生活、崇高な思想、吾々は講演を聞いて居る中に自然的に其本能の流のなかにひたり　押し流されて行く様な感激に打たれたのであった
十時講演を終り三十分近く質問を受けられた　四名の質問者があった、終って旅舘に移り有志十数名の茶話會を開く　親しみある一夜を更に先生から深い感銘を受けて夜半一時散會した、

※



※この年に有島武郎が書いた短歌の色紙が、岩内町郷土館に収蔵されている。昭和46年佐藤彌十郎が館に寄贈したものである。
この歌は１９２２（大正11）年に武郎が岩内を訪れた同じ年の作である。
「おのが紡ぐ真白き
絲の中にして蚕のこ
とくに我は死なまし」
（岩内町郷土館のパ
ネルの表記より）
有島記念館にも収蔵されたものがあり、同じ有島武郎の筆であっても文字などが異なっている。
「おのが紡む真白き
いとの中にして蚕が
ごと久にも我は死な
ま志」（有島記念館発
行図録より）
岩内町郷土館と有島記念館にそれぞれ同じ歌が異なる字で描かれたその経緯については、その前後なども含め、推測するほかはない。



七月十八日※早朝町役場訪問、村上別荘へ散歩し女子小学校に於て児童の為めに一場の講演をして下さった　実に平易なそして深い講演であった
講演後木田君宅訪問、木田君の一族の方々に會はれ木田君の繪を見られ、昼食後同人に案内せられて安達牧場に行かれてホエットマンの詩を朗読して下すった、清流のほと里青葉の陰に此純眞な先生を通じてホエットマンの詩を聞き得た事は誠に吾々の生涯の中で余り度々ない幸福であったらうと思ふ

※実際は十六日

※北海タイムス後志版（昭37・6・27）より

岩内に有島武郎の遺墨

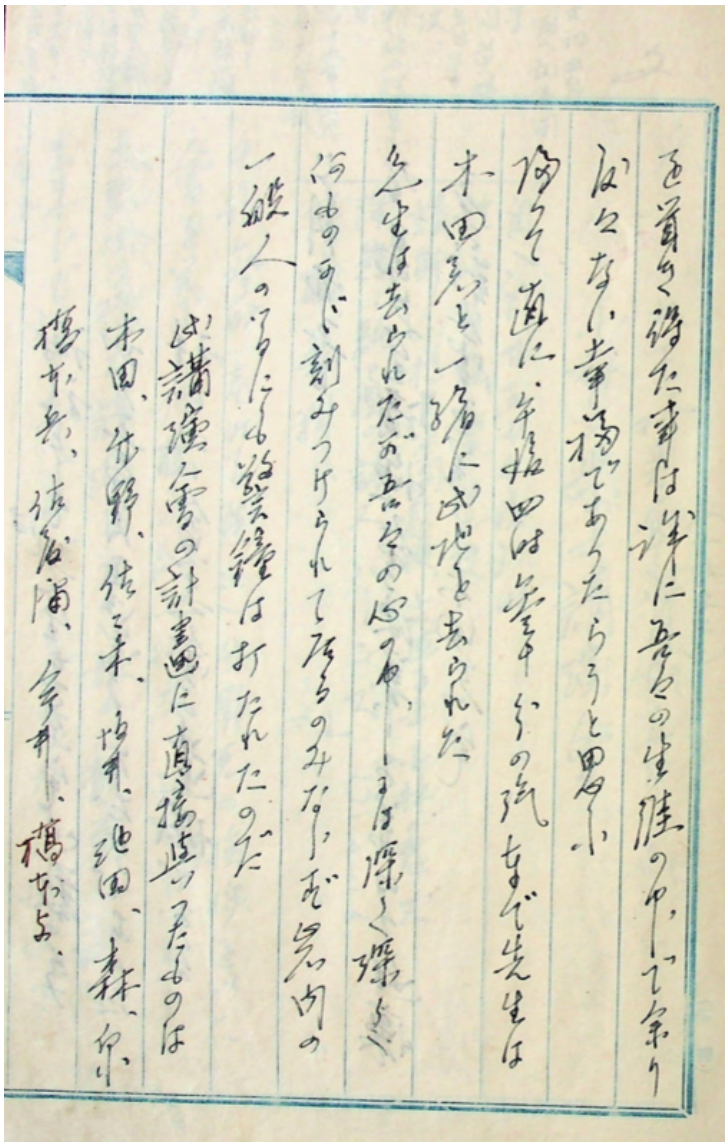
大正十一年夏ただ一度武郎が岩内町を訪れた際、ヒザを付き合わせて話し合った地元の青年たちに書き贈った歌や書が町内に大切に保存されている。

地元の青年に贈る

他の資料も大切に保存

これらの記念の書を保存しているのは安達清美さん、橋本なみおさん、佐藤弥十郎さん。安達さん宅のは真っ白な扇子に“志し志しと伏拝しけり病室の、窓より見たる六尺の春　武郎”と記され、また橋本さん宅のは“万里無寸草”と、また佐藤さんのは“照顧脚下”と武郎の達者な筆が書き込まれている。

これらはいずれも武郎が、大正十一年十六、十七日と岩内町に滞在したさい、当時の青年のつどいである岩内町白水



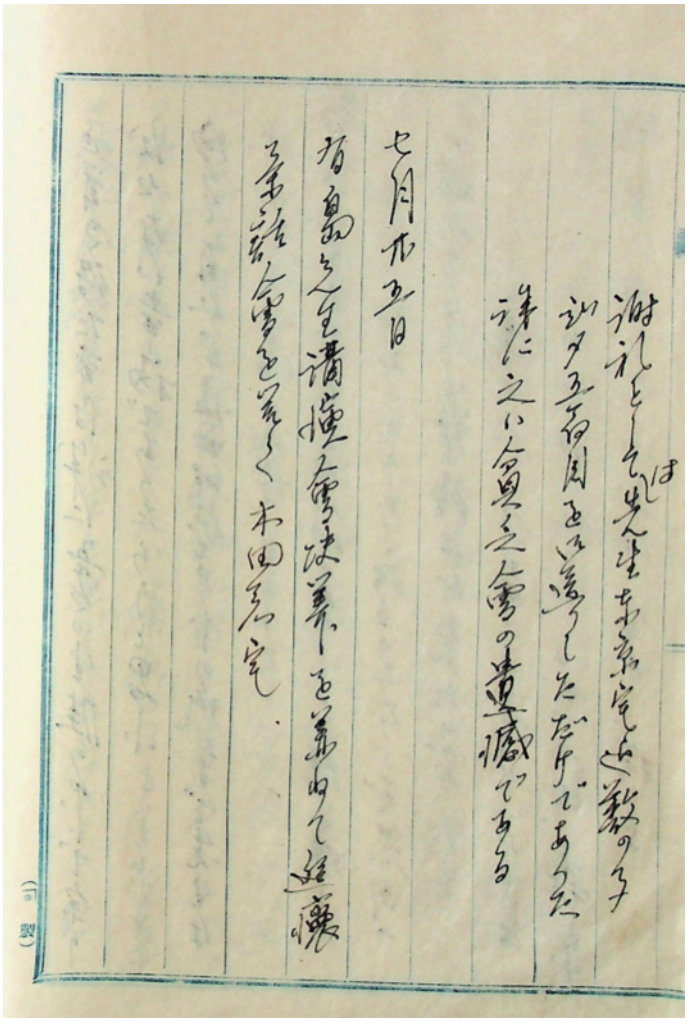
帰って直に、午後四時参十分の汽車で先生は木田君と一緒に此地を去られた
先生は去られたが吾々の心の中には深く深く何ものかが刻みつけられて居るのみならず、岩内の一般人の間にも警鐘は打たれたのだ

此講演會の計畫に直接與ったものは　木田、竹野、佐々木、坂井、池田、森、泉、橋本兵、佐藤彌、今井、橋本与、

会のメンバーと、木田金次郎画伯宅や当時の村上別荘、それに安達牧場で話し合い、その時記念に書き贈ったもの。

佐藤さんも、橋本さんの父親であるなき与太郎さんらはその時の白水会のメンバーであり、安達さんの場合は、なき先代の清吉さんが道内でも指折りの牧場を経営、しかも札幌の山田という親戚に、武郎が北大生の時下宿していたという因縁から、来町のさい安達家に立ち寄ったもの。

事実昭和三年三月発行の婦人倶楽部には、武郎の岩内町における日記が発表され、その中に“木田君の親友橋本君が仕事着のままやってくる。そして岩内町の製造家と船持ちと船夫との関係について述べる。”また安達牧場については“グミの実が赤く実り、西洋クルミの樹膚は青銅の如く、潤沢な牛乳と軽い菓子、時間の短いの



謝礼としては先生東京宅迄数の子弐〆五百目※を御送りしただけであった誠に之ハ貧乏會の遺憾である

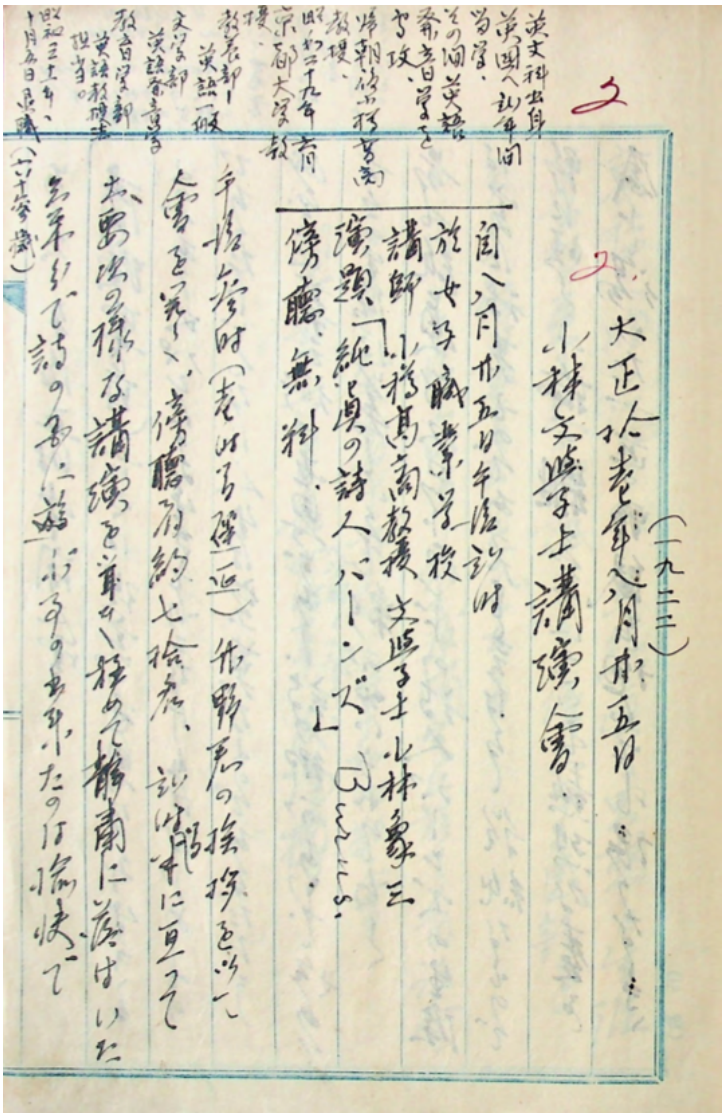
七月二十五日

有島先生講演會決算を兼ねて追懐茶話會を開く　木田君宅

が惜しまれた”と記されている。三軒ともこれらの品は今後も大切に保存していきたいとのことだが、佐藤さん宅にはこのほか武郎の個人雑誌『泉』や、木田画伯に寄せた書簡、武郎の母堂（幸子）の手紙など、多くの資料が保存され、佐藤さんは文学愛好者にはいつでもお見せしますと語っている。

（岩内町郷土館のパネルより・・・一部割愛）

※最後の会計では十二円五十銭の支出となっている。



2－2

大正拾壱年（一九二二）八月二十五日

小林文學士講演會

自八月二十五日午後弐時

於女子職業学校

講師　小樽高商教授文學士小林象三※

演題　「純眞の詩人バーンズ」Burns.

傍聴　無料

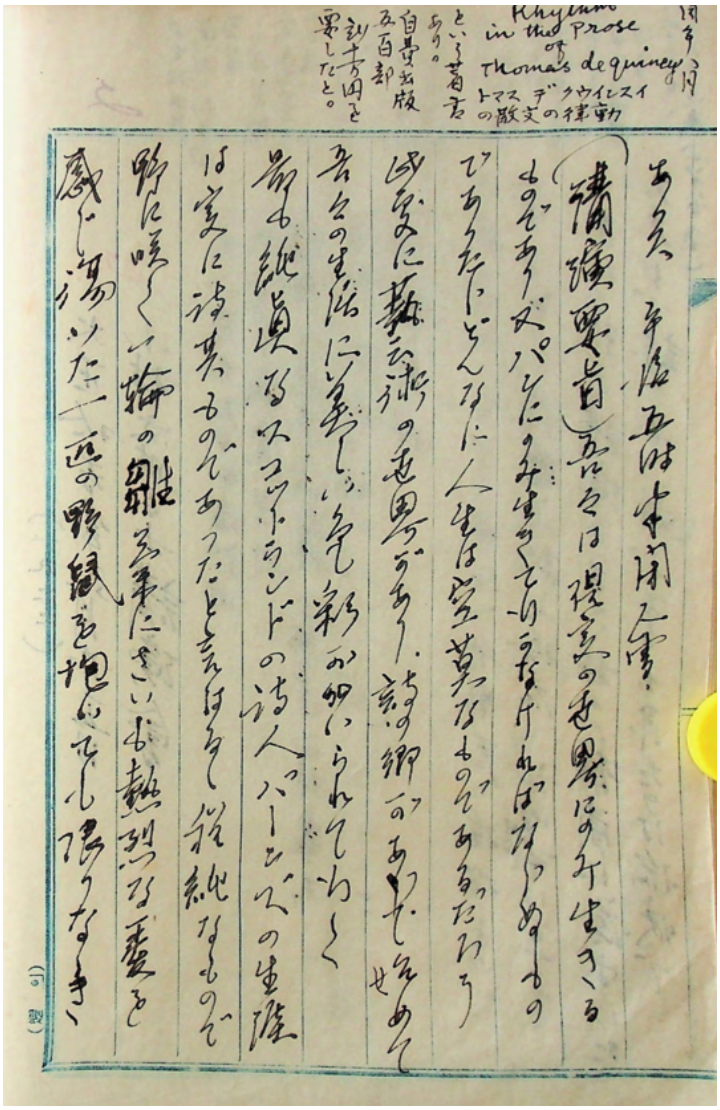
※小林象三は岩内出身。木田金次郎と岩内尋常小学校高等科の同期生。小樽高商教授として作家伊藤整に影響を与えたことで知られる。

午後参時（壱時間遅延）竹野君の挨拶を以て會を開く、傍聴者約七拾名、弐時間半に亘って大要次の様な講演を聞く　極めて静粛に落付いた氣分で詩の国に遊ぶ事の出来たのは愉快であった　午後５時半閉會

※次ページにかけて後代に追記された欄外の注記

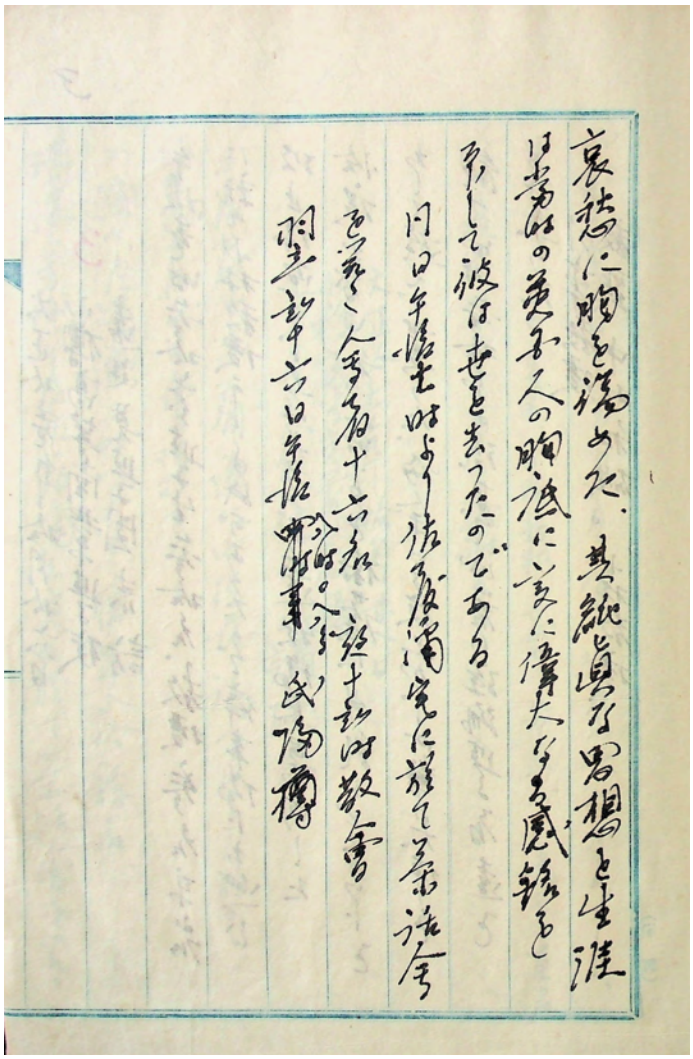
英文科出身
英國へ弐年間留学
その間英語発音学を専攻、
帰朝後小樽高商教授
昭和二十九年六月京都大学教授
教養部　英語一般
文学部　英語発音学
教育学部　英語教授法担当
昭和三十一年十月五日退職（六十参歳）
同年八月 Rhythm in the Prose of Thomas de quinsy※トマス　デ　クウインスイの散文の律動という著書あり。
自費出版五百部　弐十万円を要したと。

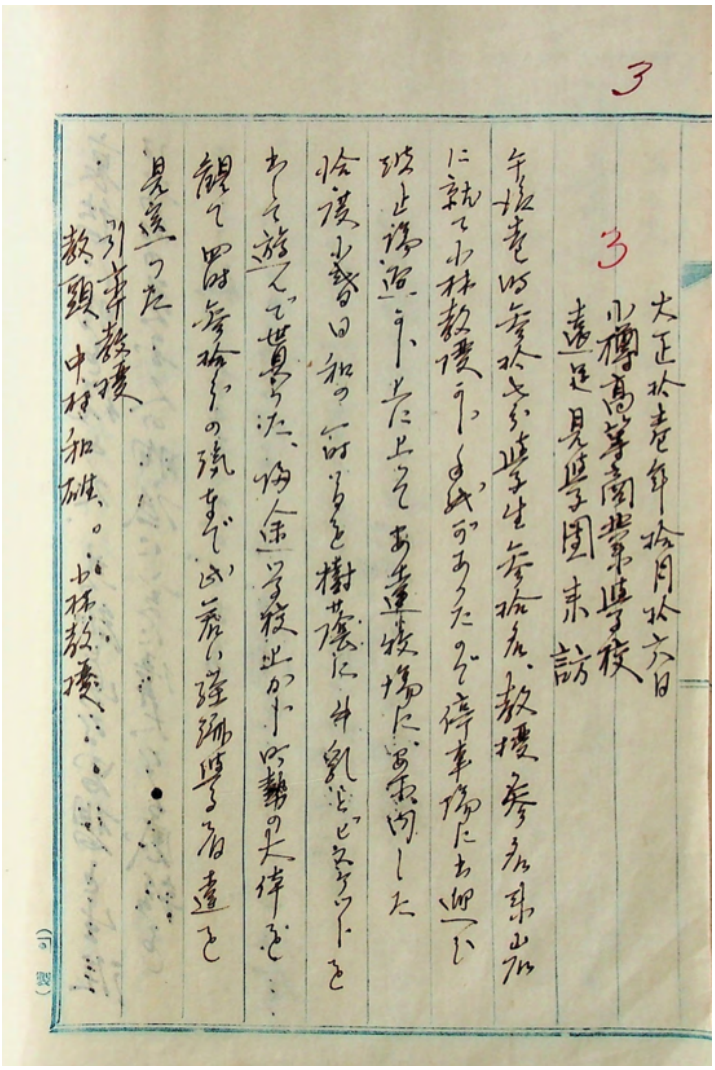
※正しくは、大文字で De Quinsy



（講演要旨）吾々は現実の世界にのみ生きるものであり、又パンにのみ生きて行かなければならぬものであったらどんなに人生は空莫なものであるだろう　此處に藝術の世界があり、詩の郷があって始めて吾々の生活に美しい色彩が加いられて行く　最も純眞なスコットランドの詩人バーンズの生涯は実に詩其ものであったと言はるる程純なもので　野に咲く一輪の雛菊にさいも熱烈な愛を感じ傷いた一匹の野鼠を抱いても限りなき哀愁に胸を傷めた、其純眞な思想と生涯は當時の英國人の胸底に実に偉大なる感銘を印して彼は世を去ったのである

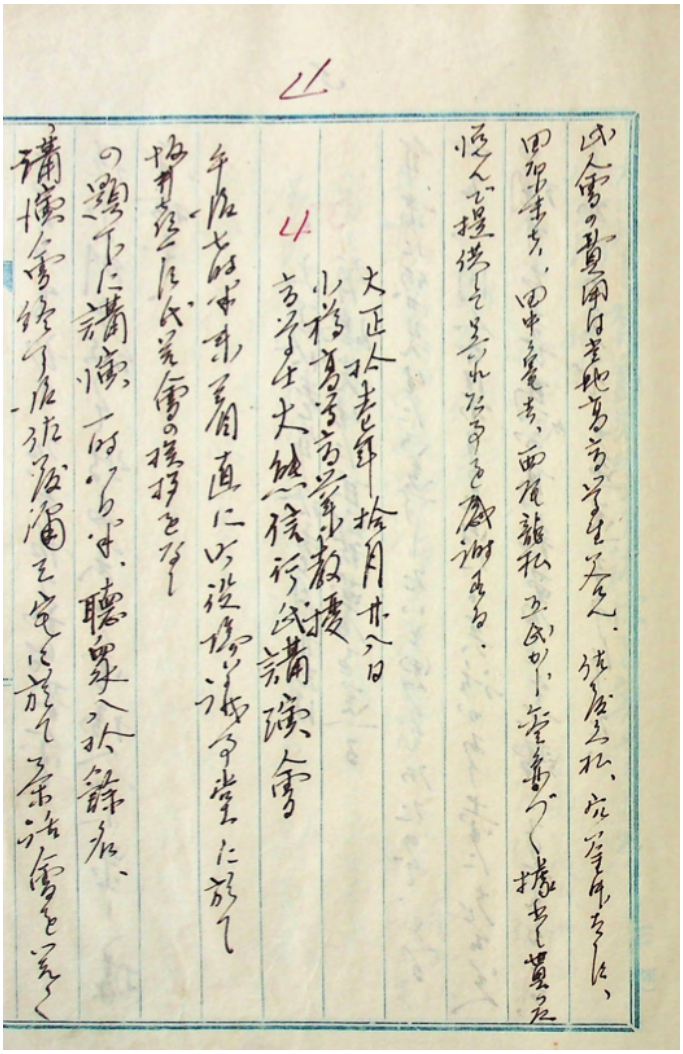
同日午後七時より佐藤彌宅に於て茶話會を開く　會者十六名　夜十弐時散會　翌弐十六日午後八時八分　氏帰樽





3-3
大正拾壱年拾月拾六日
小樽高等商業學校
遠足見學團来訪

午後壱時参拾七分學生参拾名、教授参名来岩に就て小林教授から手紙があったので停車場に出迎え波止場通から上に上って安達牧場に案内した　恰度小春日和の一時間を樹蔭に牛乳とビスケットを出して遊んで貰った。帰途学校上から町勢の大体を観て四時参拾分の瀛車で此若い経済学者達を見送った
引率教授
教頭、中村和雄、小林教授

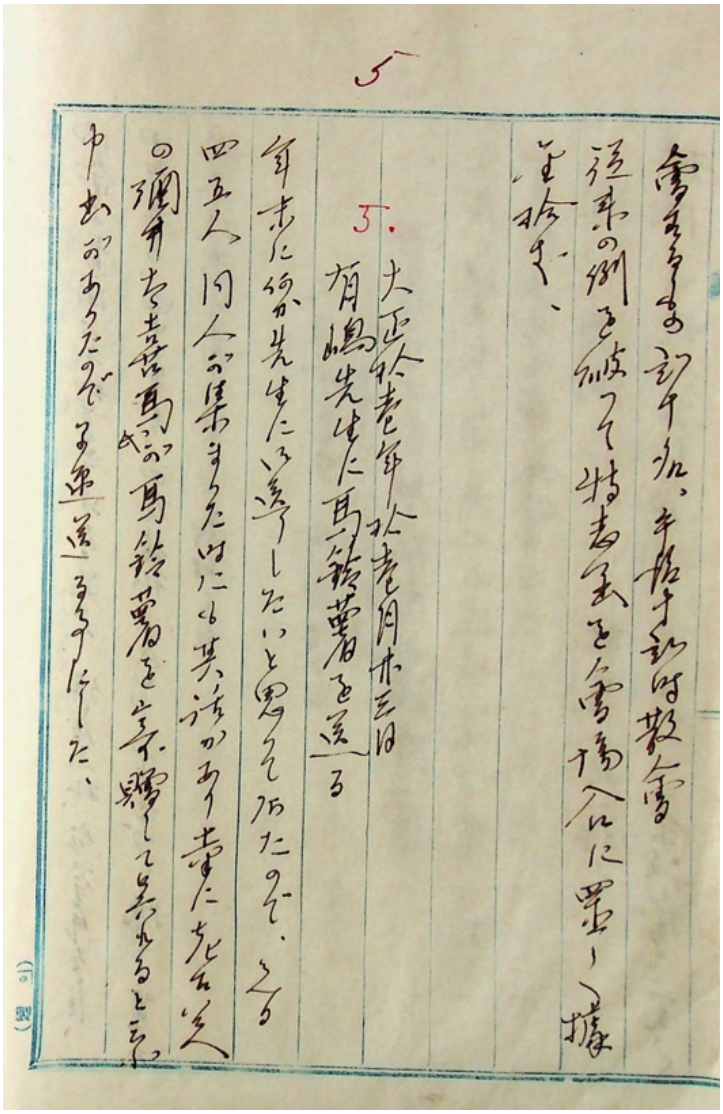


此會の費用は当地高商学生参人、佐藤久松、穴釜牛太郎、田原末吉、田中亀吉、西尾龍松、五氏から参圓づつ拠出し（て）貰った　悦んで提供して呉れた事を感謝する。

4－4
大正拾壱年拾月二十八日
小樽高等商業教授
商学士大熊信行氏講演會

午後七時半来着直に町役場議事堂に於て坂井喜一郎氏開會の挨拶をなし、（空白）の題下に講演一時間半、聴衆八拾餘名
講演会終了後佐藤彌三宅に於て茶話會を開く

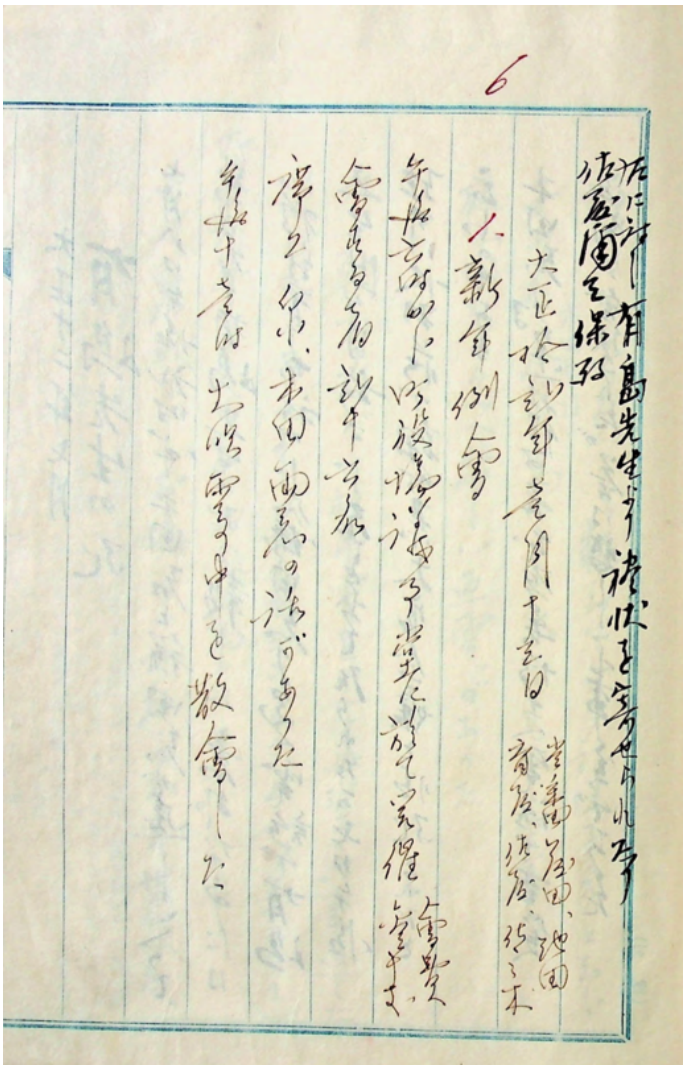
會する者弐十名。午後十弐時散會
従来の例を破って特志函を會場入口に置く　拠金拾銭



5－5
大正拾壱年拾壱月二十三日
有嶋先生に馬鈴薯を送る

年末に何か先生に御送りしたいと思って居たので、先日四五人同人が集まった時にも其話があり幸に老古美※の酒井太喜馬氏が馬鈴薯を寄贈して呉れると云ふ申出があったので　早速送る事にした

※老古美（おいこみ）は今も共和町に残る地名



右に対し有島先生より禮状を寄せられたり　佐藤彌三（ママ）保存※

6－1

大正拾弐年壱月十三日　當番　藤田、池田、斉藤、佐藤、佐々木

新年例會

午後六時から町役場議事堂に於て開催　會費参十銭

會する者弐十六名

席上　泉、木田両君の話があった

午後十壱時大吹雪の中を散會した

※１９２２（大正11）年12月４日付の木田金次郎気付白水会宛有島武郎書簡）（全集14巻所収）

白水会諸兄

お心にかけられて馬鈴薯を澤山お送りくださいまして誠に有難うご座います

どなたが馬鈴薯をどなたが箱をと木田兄から委しい報知を受けるにつけて、諸兄がお心を合わせてのご厚情を殊更らなつかしく感謝しています

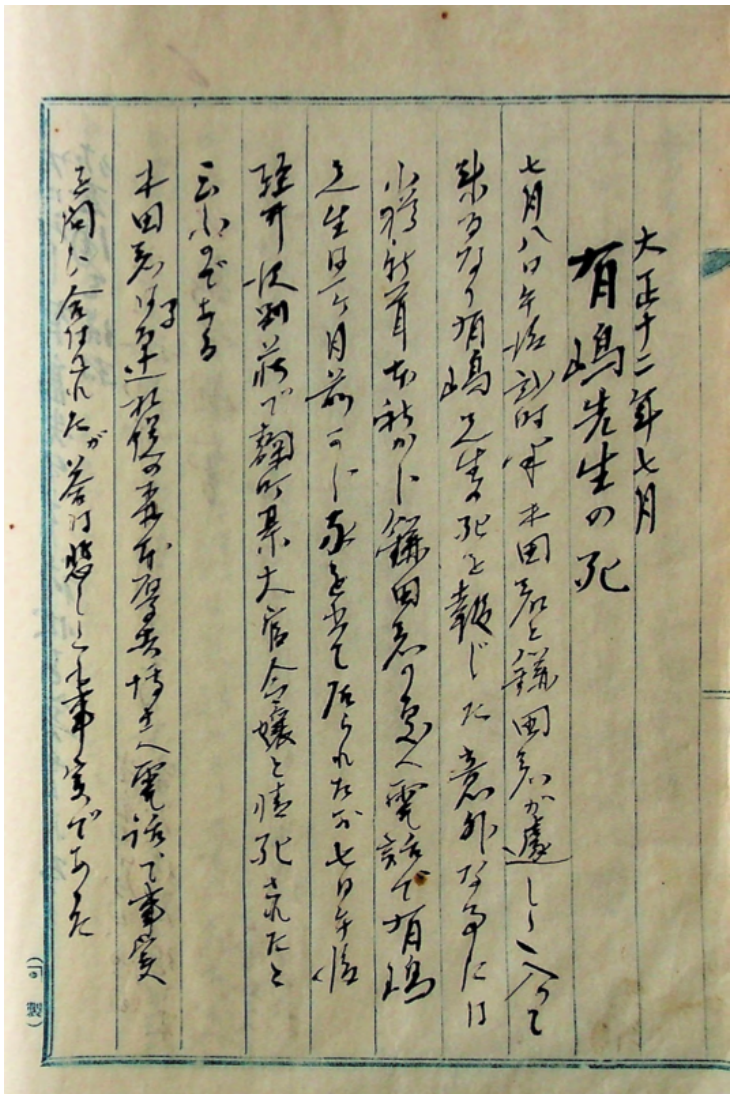
打寄り賞味いたします

時下厳寒、諸兄に切なるご自愛を願上げます

十二月四日朝

有島武郎

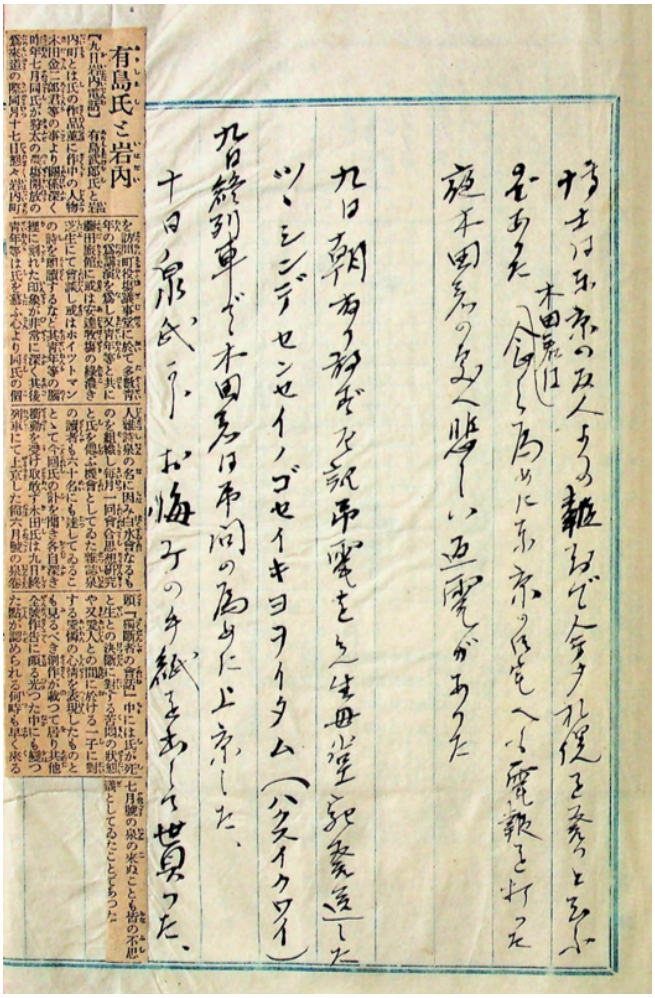
また、１９２２（大正11）年12月７日付の木田金次郎宛の書簡の中でも、有島武郎は馬鈴薯へのお礼と岩内の人達への感謝の気持ちを書いている（全集14巻所収）



7－1※
大正十二年七月
有嶋先生の死

七月八日午後弐時半木田君と鎌田君が遽しく入って来るなり有嶋先生の死を報じた
意外な事には小樽新聞本社から鎌田君の處へ電話で有嶋先生は一ヶ月前から家を出て居られたが　七日午後軽井沢別荘で麹町某大官令嬢と情死されたと云ふのである
木田君は早速札幌の森本厚吉博士へ電話で事実を問ひ合はされたが答は悲しくも事実であった

※後に出て来る7－2を考えればこの番号になるが、原本にはない



博士は東京の友人よりの報告で今夕札幌を発つと云ふのであった　木田君は念の為めに東京の自宅へも電報を打った　夜木田君の處へ悲しい返電があった

九日朝取り敢ず左記弔電を先生母堂宛発送した
ツツシンデセンセイノゴセイキヨヲイタム（ハクスイクワイ）
九日終列車で木田君は弔問の為めに上京した
十日泉氏からお悔みの手紙を出して貰った、

※新聞記事から

●有島氏と岩内※

【九日岩内電話】有島武郎氏と岩内町とは氏の作品並に作中の人物木田金二郎君等の事より関係深く　昨年七月同氏が狩太の農場開放の為来道の際同月十七日※態々※岩内町を訪問　町役場議事堂に於て多数青年の為講演を為し又青年等と共に藤田旅館に或いは安達牧場の緑濃き芝生にて会談し或はホイットマンの詩を朗読する

※記事では、見出しが「有島」、本文は「有嶋」だが、「有島」で統一した
※※実際は十六日
※態々（わざわざ）

など其青年等の脳裡に刻れた印象が非常に深く　其後青年等は氏を慕う心より同氏の個人雑誌泉の名に因み白水会なるものを組織し　毎月一回会合思想研究と氏を偲ぶ機会としていた　雑誌泉の読者も六十名にも達していることとて今回氏の訃を聞き各自深き衝動を受け取敢ず木田氏は九日終列車にて上京した　尚六月号の泉巻頭『独断者の会話』中には氏が死と生との決断に対する苦悶の状態や又愛人との間に於ける一子に対する愛憐の心情を表現したものとも見るべき創作が載って居り其他全号作告に頗る光った中にも変わった点が認められる　何時も早く来る七月号の泉の来ぬことも皆の不思議としていたことであった

有島氏が残した
遺書をけさ發表
相手の女の夫に宛てた一通
女は婦人公論記者波多野秋子（三二）
遺書の内容
三兒よ、父は出來
列車の内で
遺書を認めた有島氏
伊達巻で
縊死した
現場の模様
有夫の婦人との
戀愛は意外だ
有嶋氏の精神的苦惱
告別式
明朝十時
屍體の傍
差配人
愁ろに
弟妹宛た遺書
家人が
愛兒に宛てた遺書の上がき

●有島氏が残した遺書をけさ発表
相手の女の夫に宛てた一通
女は婦人公論記者波多野秋子（三二）

軽井沢三笠山の別荘に於て情死を遂げた文壇の巨匠有島武郎氏の死体は相手婦人の死体と共に七日夜軽井沢で直に火葬に附し　有島氏の遺骨は八日午後二時上野駅着列車で到着したが、相手婦人の遺骨は態と別の列車で送ったらしく、有島家では昨夜来徹宵親族会議を開き、種々善後策に就て協議を重ねた結果、八日午後一時有島家に於て令弟の有島生馬氏及び里見弴氏立合の上遺書其他を発表したが、之に拠ると一ヶ月前六月九日夜に情死したもので、三笠山の別荘奥座敷八畳間の現場には、有島氏の遺書として母堂及長男行光（一三）次男敏行（一二）三男行三（一一）三人の愛児に宛てた一通、弟妹宛のもの一通、牛込の書店叢文閣主人足助素一氏宛一通、友人森本厚吉氏宛のもの一通、及び情死した相手婦人の夫に宛たもの一通、最後に自分の財産に関する覚え一通、全部六通を発見した、総てレターペーパーに万年筆で認められてある

●遺書の内容
三児よ、父は出来るだけ戦って来た

有島氏の遺書六通の中母堂及行光、敏行、行三の三愛児へ宛てたもの、及び弟妹へ宛てた遺書は左の如くである
（母及三児宛のもの）今日母上と行三とにはお逢いしましたが他の二人には逢兼ねました　私には却ってそれが好かったかも知れません、
『三児よ』父は出来るだけ戦って来たよ　こうした行為が異常な行為であるのは心得ています　皆様の怒りと悲しみとを感じないではありませんけれども　仕方がありません、もう戦っても私は此の運命から逃がれる事が出来なくなったのですから、私は心からの喜びを以って、其の運命に近付いて行くのですからすべてを許して下さい

皆様の悲しみが皆様を傷けない様、皆様が弟妹達の親切な手に依って早く其の傷から立ち去る様、ただ之れ計りを祈ります、　かかる決心が来る前まで私は皆様をドレ程愛したか？　六月八日汽車にて　武郎

●弟妹に宛てた遺書

弟と妹よ、長いよい共和の生活に存分私をあづかれて呉れたのを喜びます、　あたたかい想い出許りが残ります、以下六八字（中略す、※これは有島家で相手の婦人を発表しないと云う言質を先方へ与えてあるため略したためである）私があなた方に告げる事の喜びは死が外界の圧迫に依って寸毫も促されてはない事です、私達は最も自由に歓喜して死を迎えるのです、　軽井沢へ列車が到着せんとする今も笑ったり、喜んで談り合って居ます、　どうか暫く私達を世の習慣から引離して考えて下さい、　只母上と三児との身の上を思う時涙ぐまれます、　三児達は仲の好い三人です、三人が仲好くして居なければ淋しくて居られないものです、

　向後も三人が常に一緒に在り得る様、さうしてあなた方の恵に浴する様合力して下さい、　親愛な甥や姪にも私の変らざる行為（ママ）を伝えて下さい、　あなた方すべての上に何時でも好い世界が開けて居る様に・・・。六月八日夜列車中にて　武郎　弟妹諸君

●列車の内で

遺書を認めた有島氏

有島氏は六月八日（情死した前日）午後四時頃麹町下六番町の自宅を和服姿に小さな布呂敷包み一個を持った儘ちょっと用達しに行って来ると云って家出した儘帰宅せず　家人が心配して居ると翌朝有島氏が新橋駅東洋軒で書いた端書が自宅へ配達されたので心当りを捜したが少しも判らず、同家では秘密に行方を捜索して居たもので三笠山の別荘へ行った事は全く知らなかったが有島氏は家出した翌九日夜情死を遂げたのである、　軽井沢駅へ到着する前列車内で遺書を認めた事も判った、遺書にもある通り有島氏は軽井沢へ列車が到着せんとする間際にも、喜んで相手の婦人と談笑し合ってたと云う処から見て、両人は予て※から情死を覚悟して居たものと思はれる、有島氏は恋愛の最後は死である、私達を世間の習慣から引離して考えて下さいと遺書してあるのに依って、従容として死に就いた事と思ふ

●死体の傍

有島氏の死体の傍には所持品の眼鏡一個、銀時計万年筆、銀鉛筆各一本懐中電灯一個、純金のエンゲイジリング一個、及び、現金二百円余が整然と並べられてあった、又婦人の所持品は金時計、オペラバック、化粧袋だけで検視を済ませた後有島家も相手の婦人の家も事件を絶対秘密に付して居たものであると（以下空白）

●告別式

明朝十時

有島家で親族会議の結果、九日午前十時から正十二時迄、麹町中六番町の自宅に於て告別式を行う

●伊達巻で縊死した　現場の模様

有島武郎氏の遺骸は軽井沢三笠山の麓の同氏別邸で東京より駆付けた兄弟山本佐藤両氏等の手で昨夜懇ろに始末され別荘浄目（ママ）庵に近く焼却さる事になった　大正九年当の武郎氏が、好みの設計で建てた和洋折衷二階建

※（中略す、の部分は括弧の付く場所が違うと思うがママでいく

※予（かね）て

である、　南向階下十二畳の食堂こそ武郎氏が最後の室である、　薄縁を敷いた床の上には見るも無惨な腐爛した死体の跡黒々と止め、臭気は鼻を衝く、欄の上には両人は梁に伊達巻としごきを懸けて縊死をして、両人向い合って居た、　男は絽の羽織女は錦紗の羽織を着して居た、　六日の夕方五時頃別荘差配人が裏手から這入って発見した、　表門の扉は固く閉されてあったので差配が裏へ廻って見た所　下駄が二足脱ぎ捨ててあったので、不審を抱いて探した挙句、遂に死体を発見するに至ったのである（軽井沢八日電話）

●有夫の婦人との恋愛は意外だ
**　有島氏の精神的苦悩**

有島武郎氏の相手の婦人に就て会社員の夫人とのみでは一向心当り（・以下切り抜きには含まれておらず不明・）

●写真の説明

武郎氏の遺書を発表する有島生馬氏（左）里見弴氏（右）（有島氏邸にて）

●愛児に宛てた遺書の上がき

池さん、戸川、うめ、千代、みつ、ぢいやによろしくよろしく

母上
行光
敏行
行三

武郎

小説家有島武郎氏
軽井澤にて情死す
相手は婦人公論記者で人妻
波多野秋子(三二)
里見氏語る
『私達兄弟は大變
不幸な境遇に陥ちた』
令弟生馬氏へも
最近は便りがなかつた
武郎氏
略歴
煩悶があつたら
それは女の問題
某新聞社へ變な投書
容子は
何時か
原因は思想上に
菊池寛氏語る
遺書で
十三日から
横濱で
ドモスの死上演
一昨年
情死せる有嶋武郎氏
有嶋氏の最近の便り

大正十二年七月九日（月曜日）時事新報より

●小説家有島武郎氏軽井沢にて情死す

相手は婦人公論記者で人妻波多野秋子（三二）

現文壇の耆宿（きしゅく）※、麹町区中六番町の有島武郎氏（四六）は一ヶ月程前外出先の新橋駅上東洋軒から家人に「電話を掛けたいが通じないので端書で書くが、急に旅行したくなったので東京を発つ、すぐ帰って来るから心配せぬように」と端書を送り、旅装一つ調えずに波多野秋子と打連れ其儘信州軽井沢の同氏別荘に赴いていたが六日前記両名は同別荘二階に於て枕を並べて情死し、腐爛せる死体が発見され、七日未明麹町の有島邸へ軽井沢警察から入電があった、同邸では突然の悲報に驚き令弟生馬氏は鎌倉より同里見弴氏は逗子より駈付け義父神尾大将等と共に善後策を協議する一方同日午前十時令弟佐藤隆三、義兄山本直亮両氏は取る物も取り敢ず上野発列車で現場に急行した、

●里見氏語る

『私達兄弟は大変不幸な境遇に陥ちた』

右情死の原因については「私達兄弟は大変不幸な境遇に陥っているし、まだ親族会議も開いていないから」と兄弟を代表して里見氏が云った丈で、一切口を緘（かん）して発表しないが、武郎氏は数年前、夫人を喪い家庭に在っては母堂幸子刀自を養い三人の子供の父として平和な生活を送っていた筈であったが、最近は虚無思想に傾き、且つ氏が世襲の巨万の財を有する処から金銭を乞いに来る者が追々繁くなっていた、家人も「ああした財産を譲られた事は一種の苦痛だったでしょう」と云う如く、予て其邸宅は売りに出し、自らは牛込区原町に、又最近には四谷区内の小住宅に引越すなどしていた、尚お例の北海道の処分問題にも其結果の思わしからぬものがあった、併（しか）し原因は全く恋愛問題で、相手の女性は東京在住の波多野春房氏夫人であるが悉く秘密に付せられて居る

※耆宿（きしゅく）老大家のこと

●略歴

有島武郎氏は故有島武氏の長男として明治十一年三月東京小石川区水道町に生れた、学習院を経て札幌農学校を卒業後米国に留学しハーバーフォード大学を卒業、明治四十一年より大正三年迄札幌農科大学予科の教授に就任し、後辞任して以来創作に従事して居た、弟の生馬氏里見弴氏と共に文壇三人兄弟として有名である

●令弟生馬氏へも最近は便りがなかった

五月に鎌倉へ来たきり……

相州鎌倉極楽寺姥ケ津の有島生馬氏邸では兄武郎氏の変事を聞いて生馬氏は七日午前七時急遽麹町下六番町の本邸へ帰京した、午後十二時瀟洒な洋風の同邸を訪えば信子夫人はもうお寝みになった後で疲れて居るからとて面会を断り武郎氏の変時に就ては何も知らないとて取次を以て答えた　年若い小間使二人は交る交る記者の問に「御主人は月の中二回位上京し後は創作に没頭して居らっしゃいますが、今朝は急に御用が出来たとかで朝早く御出発になりました、御変事ですって？私共は一切知りません、　又格別訪問客もありません、武郎氏は去る五月二十日有島家の親族会議の際にいらっしゃった限り其後お見えになりません、また最近何の御便りもなかったようです」（鎌倉電話）

●煩悶があったらそれは女の問題

某新聞社へ変な投書

親交のあった藤森成吉氏語る

小石川雑司ヶ谷に藤森成吉を訪えば驚いて語る「有島氏とは四月初旬に水脈社から依頼されて秋田雨雀氏と私と三人で山陰道の方へ講演する筈だったのですが、私は家人の病気の為め同行出来ず有島氏と秋田氏二人限りで行って来たのでしたが、その後五月のはじめ頃でしたが神田の中央仏教会館でクラルテの出版記念講演会の際弁士控室で会いましたがそれがお会いした最後になりました、その時は大変懐しそうに話しかけ、なぜ講演に一緒に行かなかったか、君にゆっくり話したい事があるなどと云って居ました、金曜日が面会日だったのですがその後は自分の仕事があったので余り外出もせず何も有島氏の容子は知りませんが先月十八日の秋田雨雀、小川未明、中村吉蔵三氏の三人会の際も発起人だったのですが顔を見せませんでした、叢文閣の足助氏からだったか近頃旅行中だと聞いた事がありましたが、今月は『泉』も出版せずに居た有様で何かその間に事情があったかとも思われます、十年位前に夫人を失ってからは清い生活をして居り無神論者であるが何時かある新聞社の人から有島はクリスチャンで表面品行方正だが、人の妻君と関係して居ると云った風の投書を見せられた事がありましたが、私は有島氏は決してそんな事はないと憤慨した事がありましたが、煩悶があったとすれば婦人問題だったでしょう」

●原因は思想上に

菊池寛氏語る

有島武郎氏の変事に就いて菊地（ママ）寛氏は「全く意外なことなので只驚いたと云うより外にありません」と冒頭してこう語った「有島さんとは去る五月慶応大学のホールで女性改造主催の講演会の時に会ったのが最後でし

た、原因に就ては思い当ることもあるが、然し遺書でも発表されない内には何とも云えない、やはり思想上からも来ているのじゃないだろうか・・つまりああ云う風に財産放棄などをしたあの人の意志が社会的に容れられないと云うようなことも原因ではないかと思う、女性と一緒に情死したと云うことも、あの人は独身でもあり、独身だから恋愛をすることも自由だし……と云って単に所謂情事関係のみに考えることはどうしても出来ないと思う」と

●十三日から横浜でドモ又の死上演

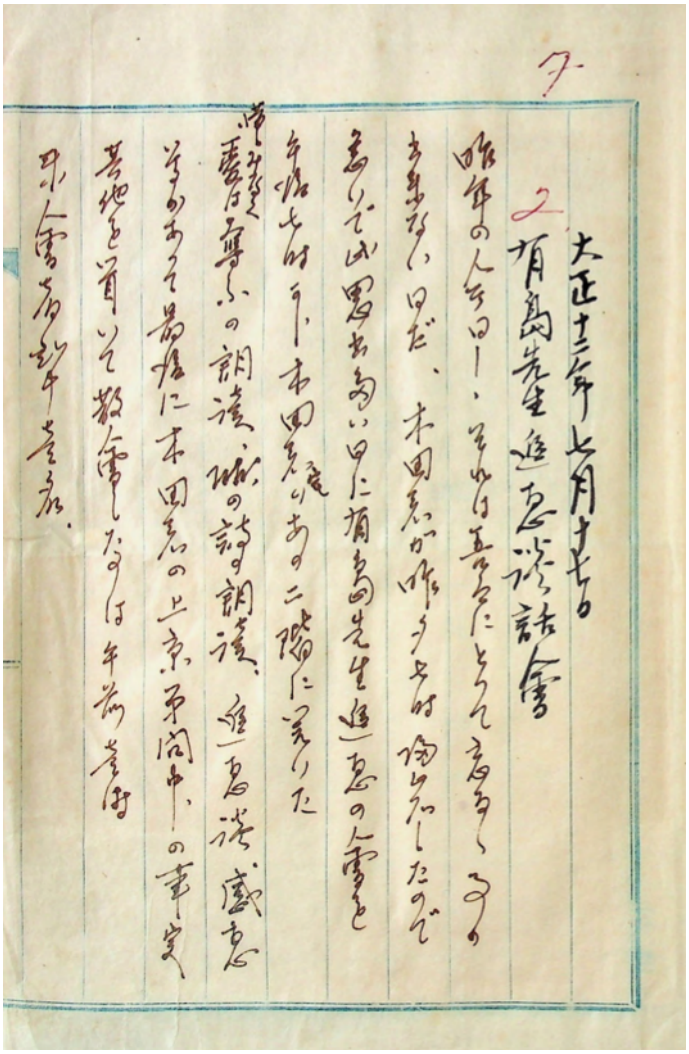
有島武郎氏の戯曲『ドモ又の死』は先月二十二日からつい此の二日まで浅草公園の公園劇場で花柳章太郎一派によって上演され　来る十三日からは横浜で同じく花柳一派の新戯座に上演されることになっているが、尚有島氏の戯曲に就いて水木京太氏は語る『代表的なものには「死とその前後」がありこれは嘗て松井須磨子によって牛込の芸術倶楽部に上演された、　去る三月には菊五郎等によって帝劇で「断橋」が上演された、全体の傾向として云えば氏のものは戯曲の内に多分に小説的分子が含まれていると云えるが一昨年吉右衛門が市村座を脱退して間もなく新富座で上演した「門（ママ）柱」※は氏のものとしては最もお芝居味の勝った面白いものだと思う』と

●有島氏の最近の便り

（六月三日鷹野つぎ子女史に宛てた、画は同氏が万年筆で描いたもの）

まして難有う御座いました。厚く御礼申上げます。六月三日（最後の部分と絵のみ写っている）

※「門（ママ）柱」は正しくは「御柱」



7-2

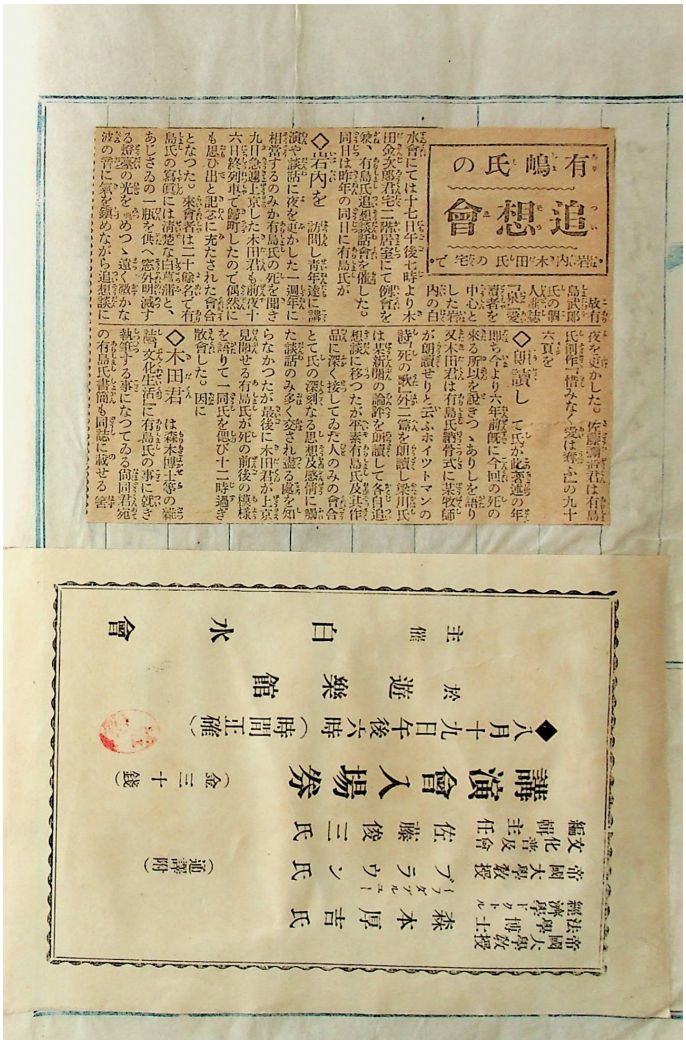
大正十二年七月十七日

有島先生追想談話會

昨年の今日―、それは吾々にとって忘るる事の出来ない日だ、木田君が昨夕七時帰岩したので急いで此思出多い日に有島先生追想の會を午後七時から木田君宅のあの二階に開いた

惜しみなく愛は奪ふの朗読、Whit※の詩の朗読、追想談、感想等があって最後に木田君の上京弔問中の事実其他を聞いて散會したのは午前壱時来會者弐十壱名、

※ホイットマンを指す



有島氏の追想會

岩内木田氏の宅で

故有島武郎氏の個人雑誌『泉』愛読者を中心とした岩内の白水会にては十七日午後七時より木田金次郎君宅二階居室にて例会を兼、有島氏追想談話会を催した。同日は昨年の同日に有島氏が岩内を訪問し青年達に講演や談話に夜を更かした一週（ママ）年に相当するのみか有島氏の死を聞き九日急遽上京した木田君も前夜十六日終列車で帰町したので偶然にも思い出と記念に充たされた会合となった。来会者は二十余名で有島氏の写真には清楚な白菖蒲と、あじさいの一瓶を供え、窓外明滅する灯台の光をみつめつつ遠く微かな波の音に気を鎮めながら追想談に夜を更かした。佐藤彌造君は有島氏創作『惜しみなく愛は奪う』の九十六頁を朗読して氏が此著述の年即ち今より六年前既に今回の死の来る所以を説きつつありしを語り又木田君は有島氏納骨式に某牧師が朗読せりと云うホイット

講演會入場券

（金三十錢）

◆八月十九日午後六時（時間正確）

於遊樂館

主催 白水會

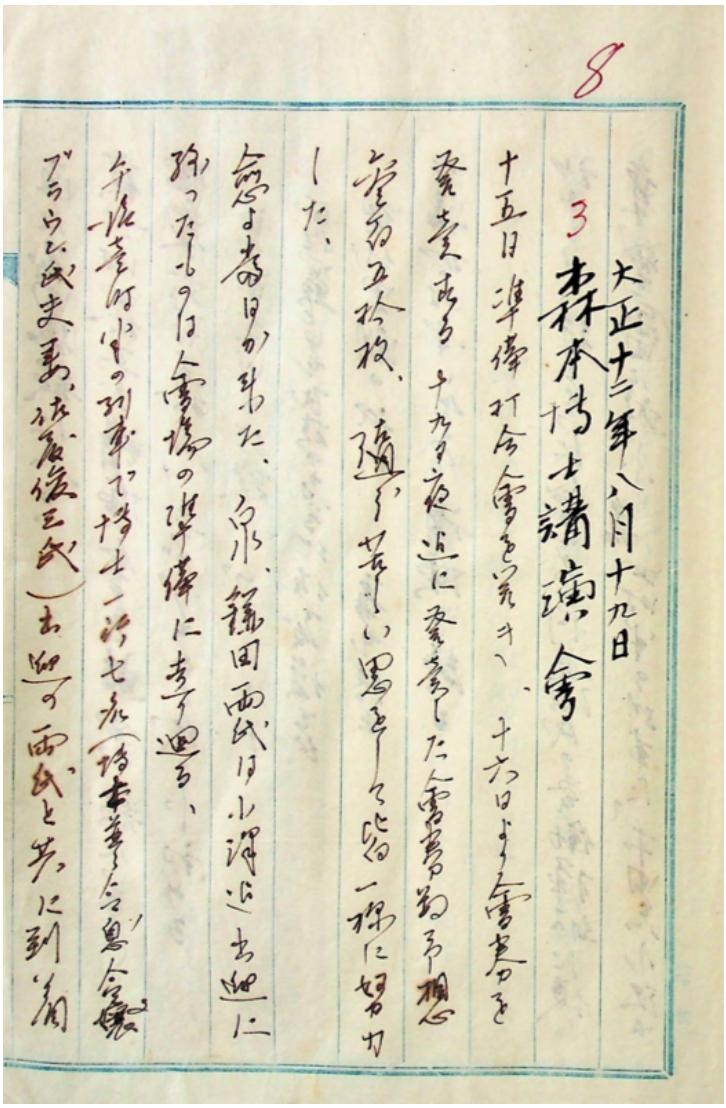
マンの詩『死の歌』外二篇を朗読し　梁川氏は某新聞の論評を朗読して各自追想談に移ったが　平素有島氏及其作品に深く接していた人のみの会合とて氏の深刻なる思想及感情に触た談話のみ多く交され尽る処を知らなかったが　最後に木田君が上京見聞せる有島氏が死の前後の模様を語りて一同氏を偲び十二時過ぎ散会した。因みに木田君は森本博士等の雑誌『文化生活』に有島氏の事に就き執筆する事になっている　尚同君宛の有島氏書簡も同誌に載せる筈

●入場券

帝國大學教授／法學博士／経済學ドクトル　森本厚吉氏
帝國大學教授　イフ（ママ）ダブルユー　ブラウン氏　（通譯附）
文化普及会／編輯主任　佐藤俊三氏

講演会入場券　（金三十銭）

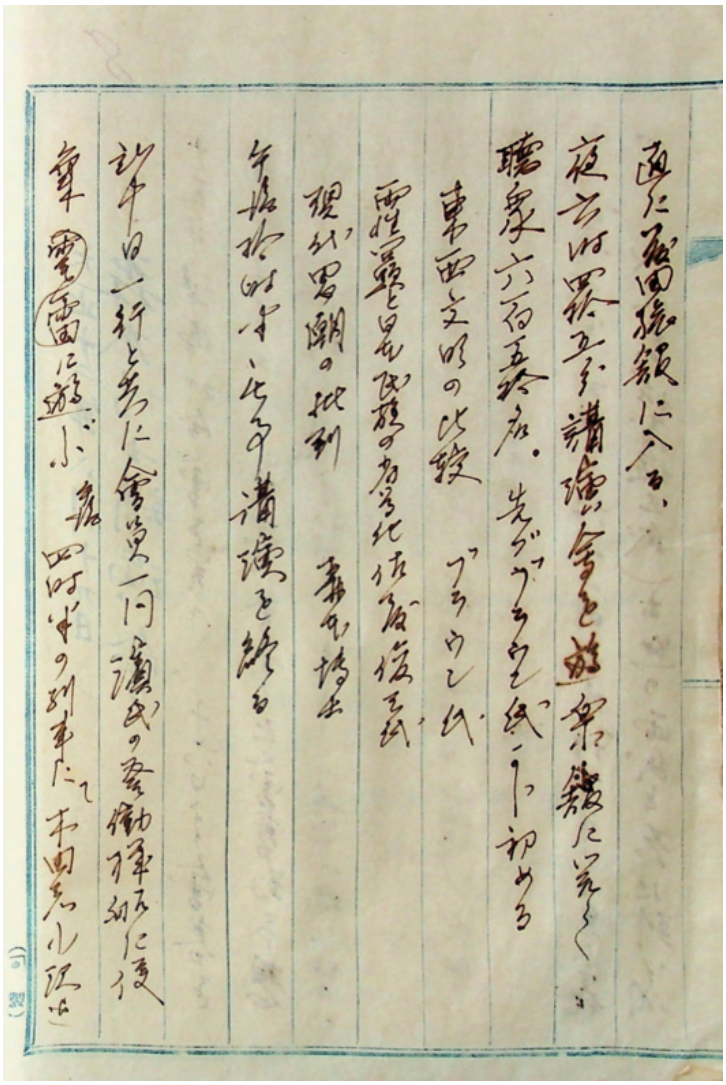
◆八月十九日午後六時（時間正確）
於　遊楽館
主催　白水會



8－3
大正十二年八月十九日
森本博士講演會

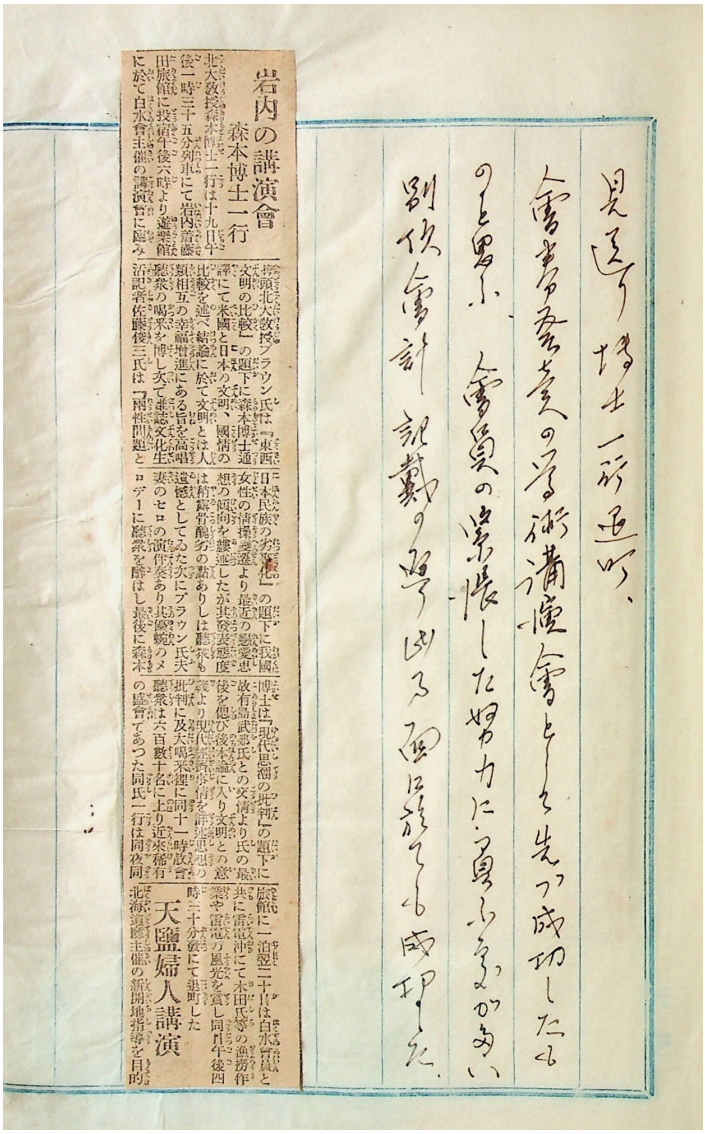
十五日準備打合會を開き、十六日より會券を発売する　十九日夜迄に発売した會券数予想参百五拾枚、随分苦しい思をして皆一様に努力した、
愈よ当日が来た、泉、鎌田両氏は小澤迄出迎に　残ったものは會場の準備に走り廻る、
午後壱時半の列車で博士一行七名（博士並に令息１令嬢２※、ブラウン氏夫妻、佐藤俊三氏）出迎の両氏と共に到着

※令息１令嬢２の数字は人数。それにより計７名になる。



直ちに藤田旅舘に入る、
夜六時四拾五分講演會を遊楽舘に開く
聴衆六百五拾名。先づブラウン氏から初（ママ）める
　東西文明の比較　ブラウン氏
　両性問題と日本民族の劣等化　佐藤俊三氏
　現代思潮の批判　森本博士
午後拾時半無事講演を終る

弐十日一行と共に會員一同濱氏の発働機船に便乗　雷電に遊ぶ　午後四時半の列車にて木田君小沢迄



見送り　博士一行退町、
會券発売の学術講演會として先づ成功したものと思ふ　會員の緊張した努力に負う処が多い
別項會計記載の通り此乃面に於ても成功した

●新聞記事より

岩内の講演会

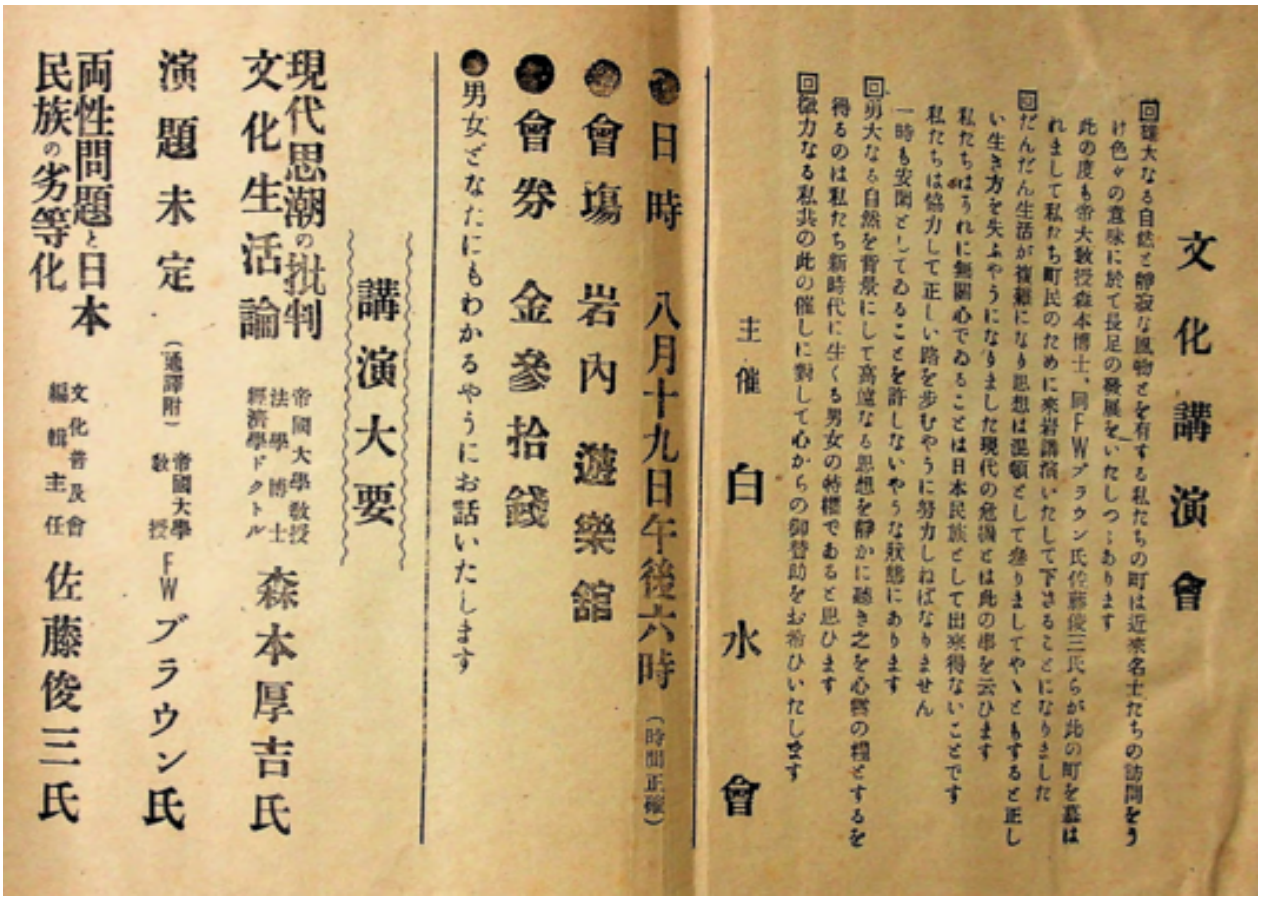
森本博士一行

北大教授森本博士一行は十九日午後一時三十五分列車にて岩内着　藤田旅館に投宿‖午後六時より遊楽館に於て白水会主催の講演会に臨み　劈頭北大教授ブラウン氏は『東西文明の比較』の題下に森本博士通訳にて米国と日本の文明、国情の比較を述べ　結論に於て文明とは人類相互の幸福増進にある旨を高唱　聴衆の喝采を博し　次いで雑誌文化生活記者佐藤俊三氏は『両性問題と日本民族の劣等化』の題下に我国女性の情操変遷より最近の恋愛思想

の傾向を縷述したが其発表態度は稍露骨醜劣の点ありしは聴衆も遺憾としていた　次にブラウン氏夫妻のセロの演伴奏あり其優蜿※のメロデーに聴衆を酔わし　最後に森本博士は『現代思潮の批判』の題下に故有島武郎氏との交情より氏の最後を偲び　後本論に入り文明との意義より現代経済事情を詳述　思想の批判に及大喝采裡に同十一時散会

聴衆は六百数十名に上り近来稀有の盛会であった　同氏一行は同夜同旅館に一泊　翌二十日は白水会員と共に雷電沖にて木田氏等の漁撈作業や雷電の風光を賞し同日午後四時三十分発にて退町した

※優蜿（ゆうわん）



文化講演會

回雄大なる自然と靜寂な風物とを有する私たちの町は近來名士たちの訪問をうけ色々の意味に於て長足の發展をいたしつゝあります
此の度も帝大教授森本博士、同FWブラウン氏佐藤俊三氏らが此の町を慕はれまして私たち町民のために來岩講演いたして下さることになりました
回だんだん生活が複雜になり思想は混頓として參りましてややともすると正しい生き方を失ふやうになりました
私たちはこれに無關心でゐることは日本民族として出來得ないことです
私たちは協力して正しい路を歩むやうに努力しねばなりません
一時も安閑としてゐることを許しないやうな狀態にあります
回勇大なる自然を背景にして高遠なる思想を靜かに聽き之を心靈の糧とするを得るのは私たち新時代に生くる男女の特權であると思ひます
回微力なる私共の此の催しに對して心からの御贊助をお希ひいたします

主催　白水會

●日時　八月十九日午後六時（時間正確）
●會場　岩内遊樂舘
●會券　金參拾錢
●男女どなたにもわかるやうにお話いたします

講演大要

現代思潮の批判　帝國大學教授　法學博士　經濟學ドクトル　森本厚吉氏
文化生活論　（通譯附）　帝國大學教授　FWブラウン氏
演題未定
兩性問題と日本民族の劣等化　文化普及會編輯主任　佐藤俊三氏

●チラシより

文化講演會

■雄大なる自然と靜寂な風物とを有する私たちの町は近來名士たちの訪問をうけ色々の意味に於て長足の發展をいたしつゝあります
此の度も帝大教授森本博士、同FWブラウン氏佐藤俊三氏らが此の町を慕はれまして私たち町民のために來岩講演いたして下さることになりました
■だんだん生活が複雜になり思想は混頓（ママ）として參りましてややともすると正しい生き方を失やうになりました　現代の危機とは此の事を云ひます
私たちはこれに無關心でゐることは日本民族として出來得ないことです
私たちは協力して正しい路を歩むやうに努力しね（ママ）ばなりません
一時も安閑としてゐることを許しない（ママ）やうな狀態にあります
■勇大なる自然を背景にして高遠なる思想を靜かに聽き之を心靈の糧とするを得るのは私たち新時代に生くる男女の特權であると思ひます
■微力なる私共の此の催しに對して心からの御贊助をお希ひいたします　主催　白水會

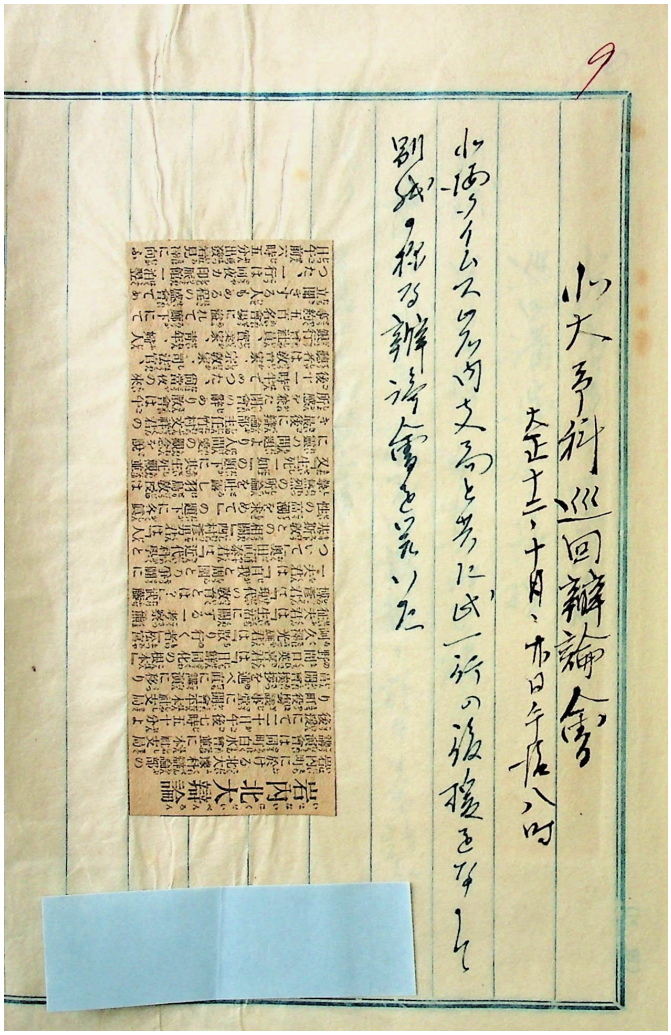
●日時　八月十九日午後六時（時間正確）
●會場　岩内遊樂舘
●會券　金參拾錢
●男女どなたにもわかるやうにお話いたします

●講演大要

現代思潮の批判文化生活論　帝國大學教授法學博士経済學ドクトル　森本厚吉氏

演題未定（通譯附）　帝國大學教授　FW.ブラウン氏

両性問題と日本民族の劣等化　文化普及會編輯主任　佐藤俊三氏



9

北大予科巡回辯論會

大正十二・十月・二十日午後八時

北海タイムス岩内支局と共に此一行の後援をなして別紙の様な辯論會を開いた

※新聞記事から

●岩内北大辯論

岩内町に於ける北大予科弁論部の講演会は同日白水会並に本社支局後援にて二十日午後七時五十分より町役場議事堂に開会　平本社支局員開会挨拶を述べ直に講演に移り　野間口英喜君は『日鮮同化の根本』　阿久沢光雄君は『散り行く者』　松宮征夫君は『生活に関する一考察』　熊博彦君は『現代の教育とは？』　武藤一夫君は『自我

と周囲との争闘について』　奥田直泰君は『近代科学と基斯（ママ）教との相関』　西村彦男君は『人性の高潮を求めて』の題下に各真摯熱烈の所論を吐露し　羽鳥教授は又『生死一如』の題下に其生死観並に霊の問題より人間愛の観念を説き　最後に弁論部主任竹村文祥君の所感を兼た閉会の辞あり　散会は午後十一時半であった、尚当夜の来聴者は教育家、宗教家、司法官、銀行会社員、実業家、青年、婦人等約五百名会場に溢れて廊下にて立聞きする人もある程の盛会であった、一行は同夜カ印旅館一泊　翌日午前六時五分出発　岩見澤に向う※

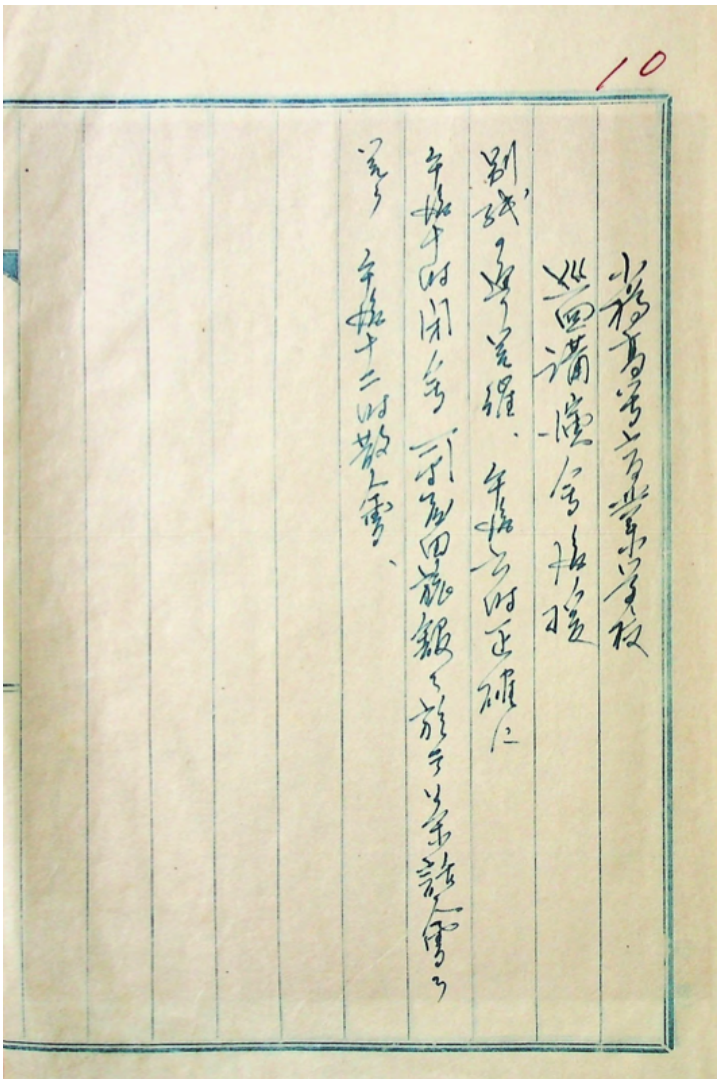
※弁論部主任竹村文祥氏から白水会に礼状が来ている。その中で、岩内文化状況の特筆すべき点に触れている。

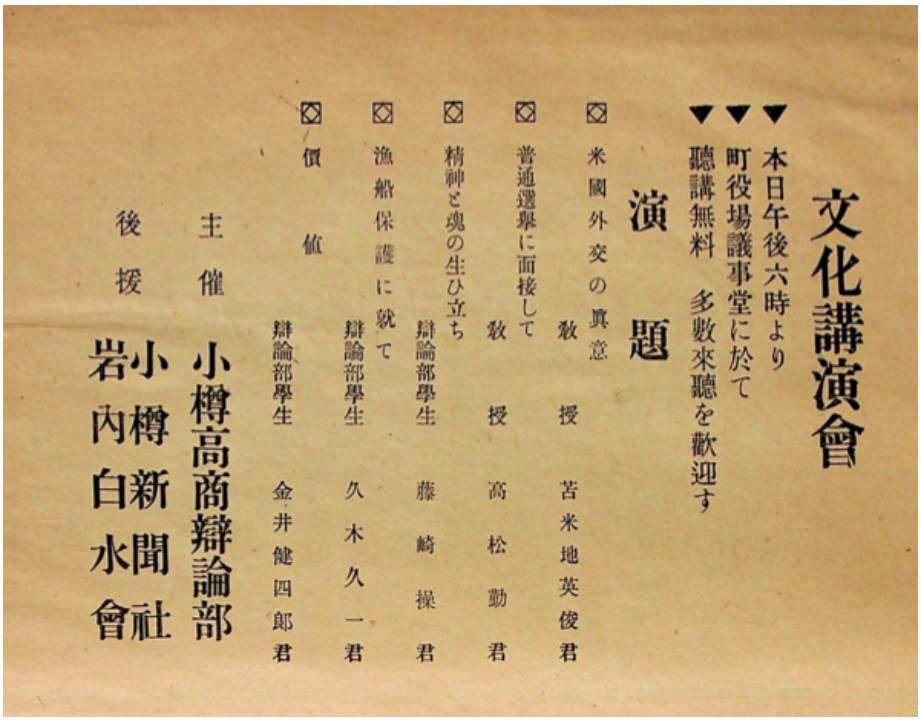
北海道岩内町白水会御中
札幌市南二条西九丁目
成田優治方　竹村文祥
「先日の講演会には一方ならぬ御厚情にあづかりまして御礼申し上げます。北大予科弁論部の企図目的を十分に果して帰札する事が出来ましたのを深く深く喜んでおります。あの講演会席場に数多くの女性の見えられましたのは、私たちの将来経験しなかったことで、生命の花咲く潮の花ともいふべき岩内文化進歩を物語るものと思ひます。貴会の御同情を永遠に感謝いたします。」
（岩内町郷土館所蔵）

10

小樽高等商業学校
巡回講演會後援

別紙の通り開催、午後六時正確に　午後十時閉會　丁平藤田旅舘に於て茶和會を開く　午後十二時散會、




文化講演會

▼本日午後六時より
▼町役場議事堂に於て
▼聽講無料　多數來聽を歡迎す

演題

☒米國外交の眞意　教授　苫米地英俊君
☒普通選擧に面接して　教授　高松勤君
☒精神と魂の生ひ立ち　辯論部學生　藤崎操君
☒漁船保護について　辯論部學生　久木久一君
☒價値　辯論部學生　金井健四郎君

主催　小樽高商辯論部
後援　小樽新聞社　岩内白水會

●チラシより

文化講演會

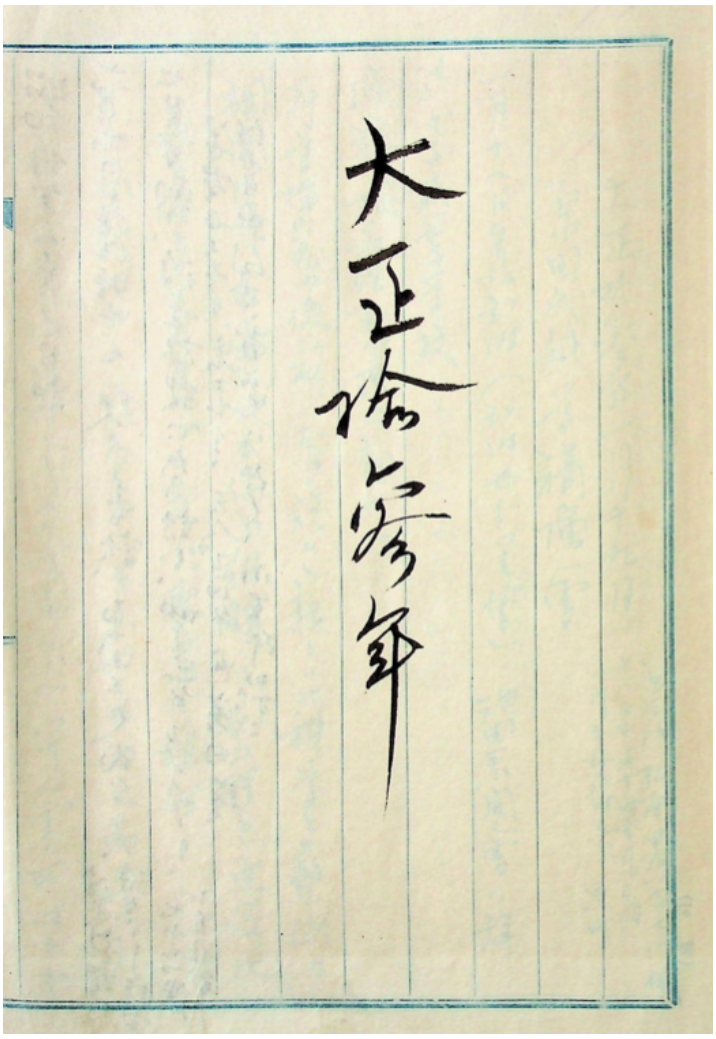
▼本日午後六時より
▼町役場議事堂に於て
▼聽講無料　多數來聽を歡迎す

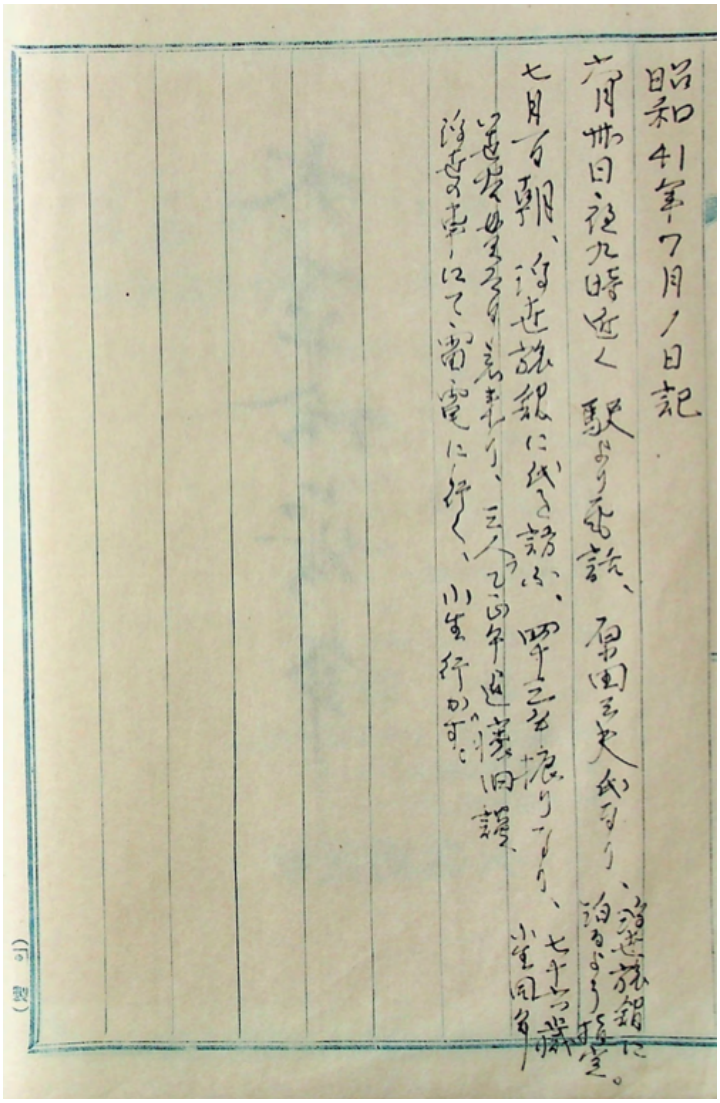
演題

☒米國外交の眞意　教授　苫米地英俊君
☒普通選擧に面接して　教授　高松勤君
☒精神と魂の生ひ立ち　辯論部學生　藤崎操君
☒漁船保護について　辯論部學生　久木久一君
☒價値　辯論部學生　金井健四郎君

主催　小樽高商辯論部
後援　小樽新聞社　岩内白水會

大正拾参年

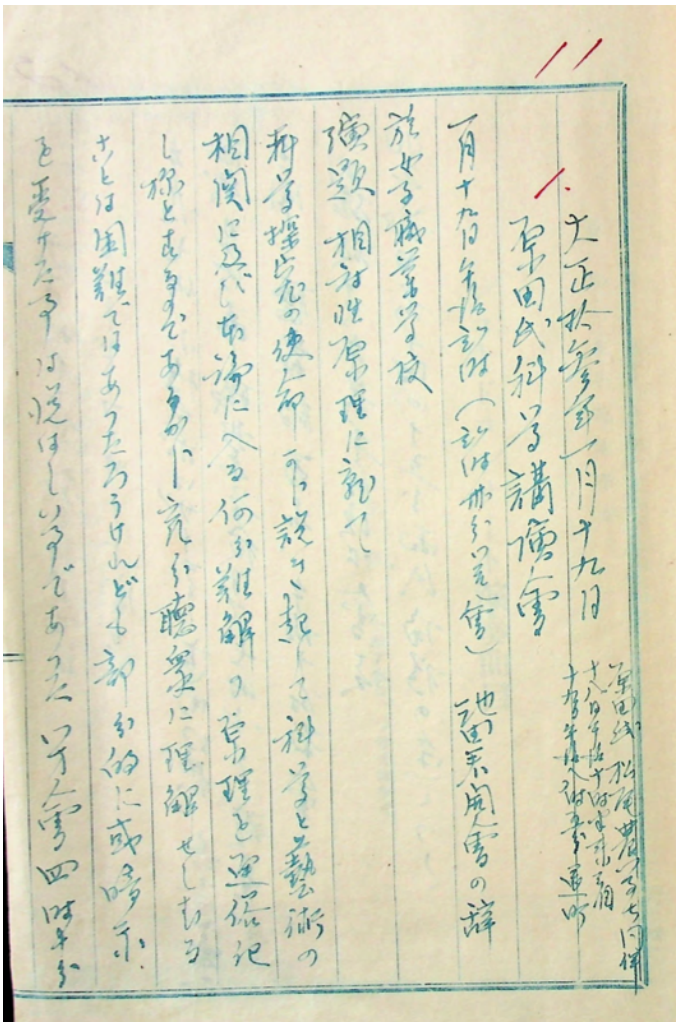




昭和41年7月1日記※

六月三十日夜九時近く駅より電話、原田三夫氏なり、浮世旅舘に泊るよう指定、七月一日朝、浮世旅舘に氏を訪ふ、四十三年振りなり、七十六歳小生同年
笹谷貫太郎君来り。三人で正午迄懐旧談　浮世の車にて雷電に行く、小生行かず。

※この記述は、後代になってから追記したと思われるが、次ページの記述（大正13年1月19日）に関連してのものと思われる。



11－1

大正拾参年一月十九日

原田氏科学講演會

原田氏　松尾農學士同伴

十八日　午後十時半来着

十九日　午後八時五分退町

一月十九日午後弐時（弐時三十分開會）

池田君　開會の辞

於女子職業学校

演題　相対性原理に就て

科学探究の使命から説き起して科学と藝術の相関に及び本論に入る　何分難解の原理を通俗化し様とするのであるから　充分聴衆に理解せしむることは困難ではあったろうけれども部分的に或暗示を受けた事は悦は（ママ）しい事であった　閉會四時十分

通俗科學講演會

十九日午後白水會主催にて當町文化促進の爲に常に不斷の努力をなしつゝある白水會にては去る十九日午後二時より職業學校に於て前帝大教授理學士、原田三夫氏を招き、アインスタインの相對性原理に就て通俗科學講演會を開いた

池田雄次郎氏の極めて簡潔雄弁な開會の辭に次で、原田氏壇上に上り、科學探究の本來の使命より藝術と科學の相關に言及し本論に入る、何分難解な原理を通俗化し樣とするのであるから、充分の理解を得せしむることは勿論困難であつた樣であるが、部分的に相當な效果を擧げ之に依つて或重大な暗示を聽衆に與へ得たことは充分認めることが出來た

殊に此講演會に就て感ずることは約百五十名の聽衆が最も選れたる岩内の知識階級ではあつたが、此難解と稱せらるゝ原理に對しても如何に旺盛な知識慾を持て居らるゝかを覗ふことの出來たのは岩内町將來の爲に大いに心强く感ぜられた次第であつた

科學は現代生活のあらゆる部門に於て其基調をなすものであることは言ふ迄もないが、又最も吾々に欠除して居る處のものは科學の知識である、此意味に於て此種の講演會が度々開催さるゝことは大いに歡迎すべきことであり又主催者の勞を多とせなければならぬ

●新聞記事より

通俗科学講演会

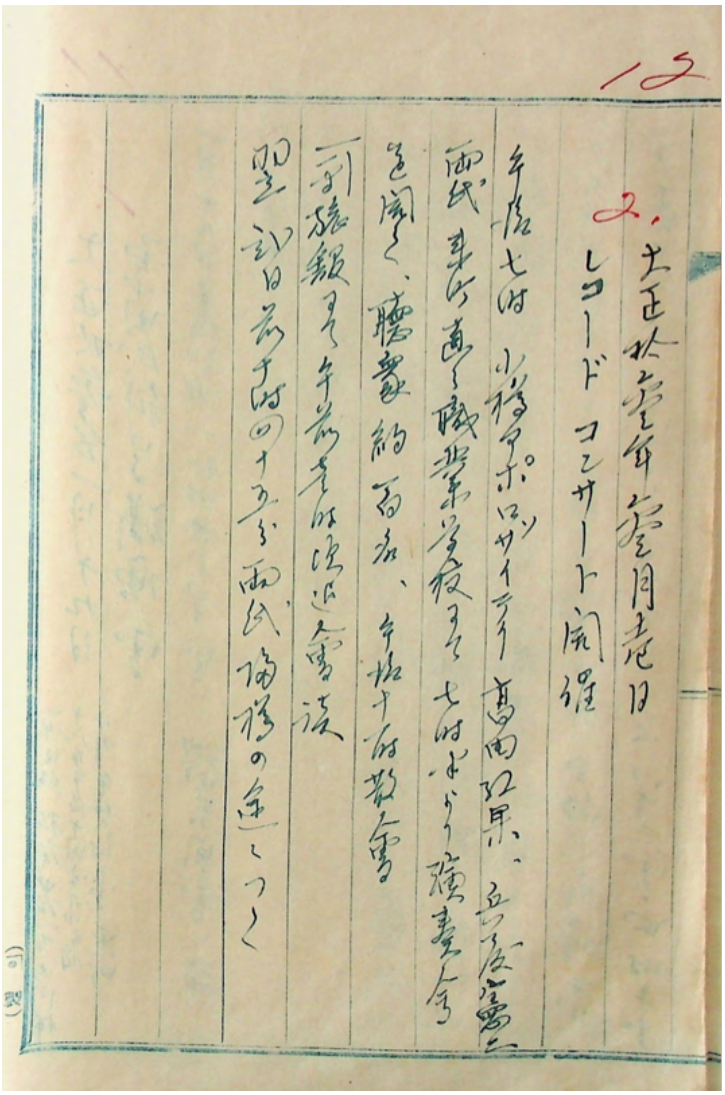
十九日午後白水会主催にて

当町文化促進の為に常に不断の努力をなしつつある白水会にては去る十九日午後二時より職業学校に於て前帝大教授理学士、原田三夫氏を招き、アインスタインの相対性原理に就て通俗科学講演会を開いた

池田雄次郎氏の極めて簡潔雄弁な開会の辞に次いで、原田氏壇上に上り、科学探究の本来の使命より芸術と科学の相関に言及し本論に入る、何分難解な原理を通俗化し様とするのであるから、充分の理解を得せしむることは勿論困難であった様であるが、部分的に相当な効果を挙げ之に依って或重大な暗示を聴衆に与え得たことは充分認めることが出来た

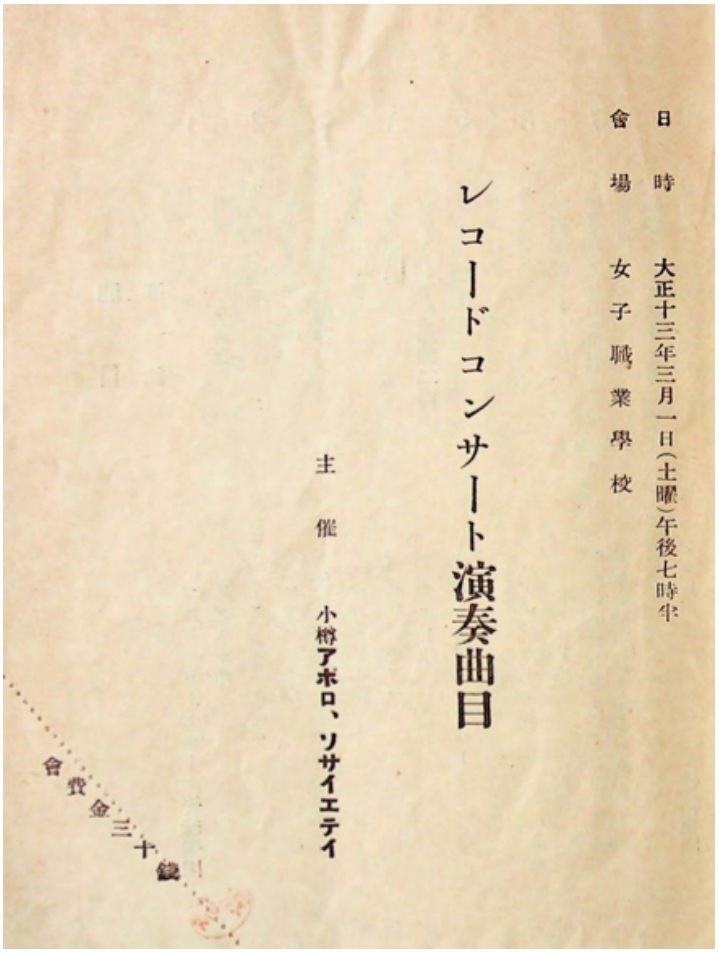
殊に此講演会に就て感ずることは約百五十名の聴衆が最も選れたる岩内の知識階級ではあったが、此難解と称せらるる原理に対しても如何に旺盛な知識欲を持て居らるるかを覗うことの出来たのは岩内町将来の為に大いに心強く感ぜられた次第であった

科学は現代生活のあらゆる部門に於て其基調をなすものであることは言う迄もないが、又最も吾々に欠如して居る処のものは科学の知識である、此意味に於て此種の講演会が度々開催さるることは大いに歓迎すべきことであり又主催者の労を多とせなければならぬ



12-2
大正拾参年参月壱日
レコードコンサート開催
午後七時　小樽アポロソサイテイ（ママ）高田紅果、兵藤憲二両氏来町　直に職業学校にて七時半より演奏會を開く、聴衆約百名、午後十時散會、丁平旅舘にて午前壱時頃迄會談　翌弐日（午）※前十時四十五分両氏帰樽の途につく

※最後の文にある「午前」で、原本には「午」の字はないが補いは正しいと思うので、括弧書きにした



●プログラムより

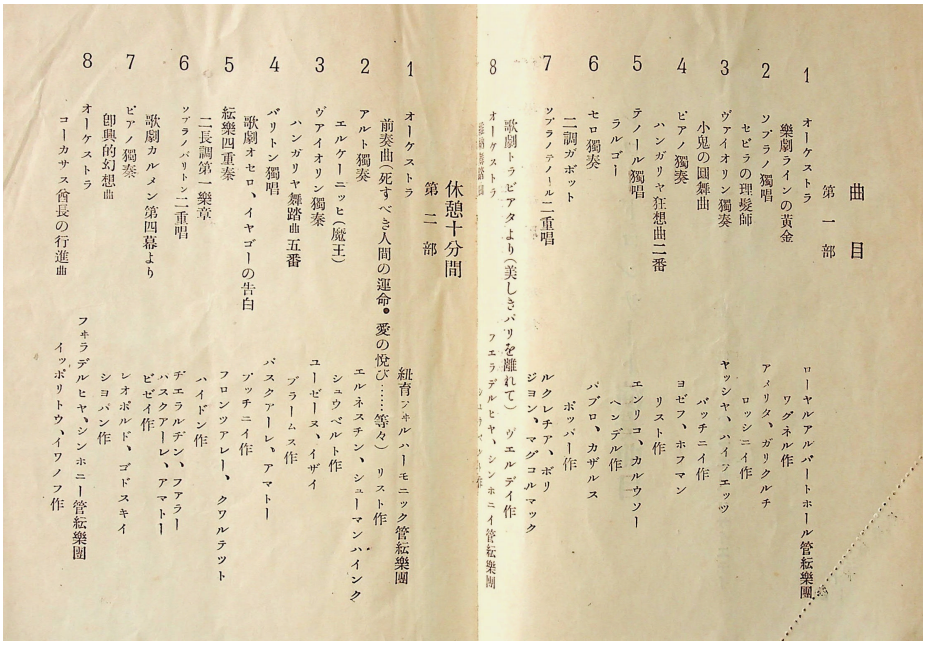
レコードコンサート演奏曲目

日時　大正十三年三月一日（土曜）午後七時半

會場　女子職業學校

主催　小樽アポロ、ソサイエテイ

會費　金三十銭


曲目
第一部
1 オーケストラ ローヤルアルバートホール管絃樂團
樂劇ラインの黄金 ワグネル作
2 ソプラノ獨唱 アメリタ・ガリクルチ
セビラの理髪師 ロッシニイ作
3 ヴアイオリン獨奏 ヤッシャ・ハイフエッツ
小鬼の圓舞曲 バッチニイ作
4 ピアノ獨奏 ヨゼフ・ホフマン
ハンガリヤ狂想曲二番 リスト作
5 テノール獨唱 エンリコ・カルウソー
ラルゴー ヘンデル作
6 セロ獨奏 パブロ・カザルス
二調ガボット ポッパー作
7 ソプラノテノール二重唱 ルクレチア・ボリ ジヨン・マグコルマック
歌劇トラビアタより（美しきパリを離れて） ヴエルデイ作
8 オーケストラ フエラデルヒヤ・シンホニイ管絃樂團
維納舞踏曲 シユウベルト作
休憩十分間
第二部
1 オーケストラ 紐育フヰルハーモニック管絃樂團
前奏曲（死すべき人間の運命、愛の悦び……等々） リスト作
2 アルト獨奏 エルネスチン・シューマンハインク
エルケーニッヒ（魔王） シュウベルト作
3 ヴアイオリン獨奏 ユーゼーヌ・イザイ
ハンガリヤ舞踏曲五番 ブラームス作
4 バリトン獨唱 バスクアーレ・アマトー
歌劇オセロ、イヤゴーの告白 プッチニイ作
5 絃樂四重奏 フロンツアレー、クツルテツト
二長調第一樂章 ハイドン作
6 ソプラノバリトン二重唱 ヂエラルヂン、ファラー
歌劇カルメン第四幕より バスクアーレ、アマトー
7 ピアノ獨奏 ビゼイ作
即興的幻想曲 レオポルド、ゴドスキイ
8 オーケストラ ショパン作
コーカサス酋長の行進曲 フヰラデルヒヤ、シンホニー管絃樂團
イッポリトウ、イワノフ作

曲目

第一部

1 オーケストラ　ローヤルアルバートホール管絃樂團
　樂劇ラインの黄金　ワグネル作
2 ソプラノ獨唱　アメリタ・ガリクルチ
　セビラの理髪師　ロッシニイ作
3 ヴアイオリン獨奏　ヤッシャ・ハイフエッツ
　小鬼の圓舞曲　バッチニイ作
4 ピアノ獨奏　ヨゼフ・ホフマン
　ハンガリヤ狂想曲二番　リスト作
5 テノール獨唱　エンリコ・カルウソー
　ラルゴー　ヘンデル作
6 セロ獨奏　パブロ・カザルス
　二調ガボット　ポッパー作
7 ソプラノ、テノール二重唱　ルクレチア・ボリ　ジヨン・マグコルマック
　歌劇トラビアタより（美しきパリを離れて）
　ヴエルデイ作
8 オーケストラ　フエラデルヒヤシンホニイ管絃樂團
　維納舞踏曲※　シユウベルト作

（休憩十分間）

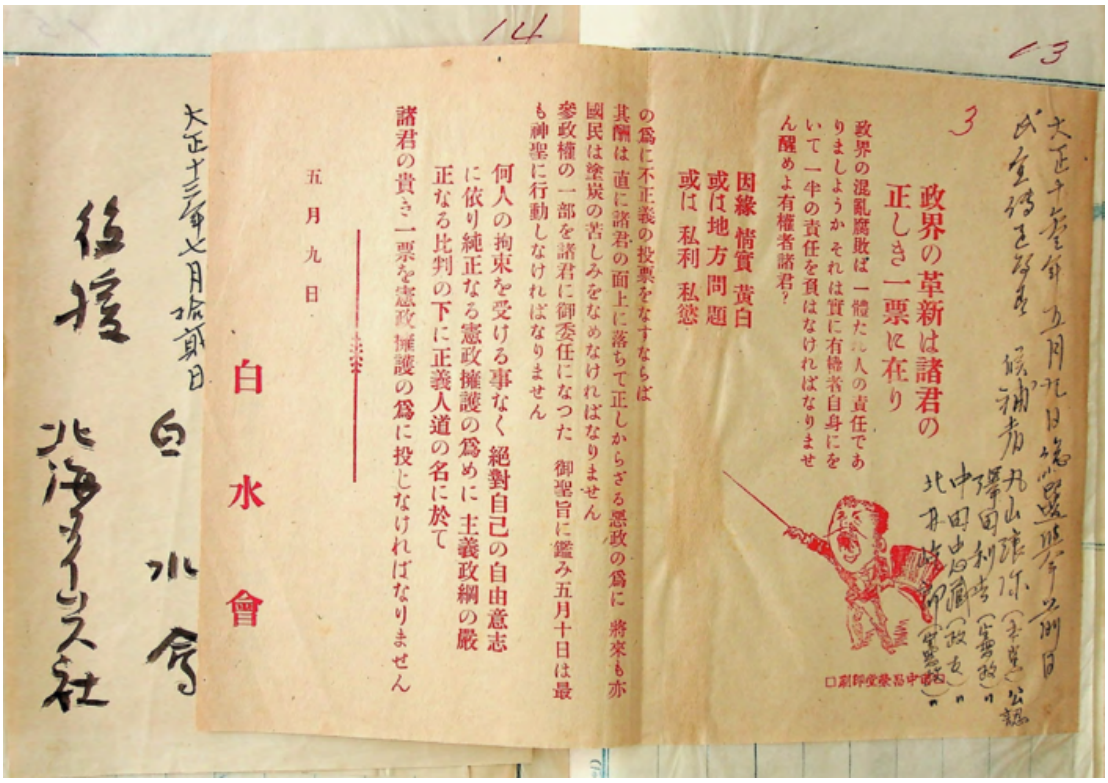
第二部

1 オーケストラ　紐育フヰルハーモニック管絃樂團
　前奏曲（死すべき人間の運命、愛の悦び……等々）
　リスト作
2 アルト獨奏※　エルネスチン・シューマンハインク
　エルケーニッヒ（魔王）　シュウベルト作
3 ヴアイオリン獨奏　ユーゼーヌ・イザイ
　ハンガリヤ舞踏曲五番　ブラームス作
4 バリトン獨唱　バスクアーレ・アマトー
　歌劇オセロ、イヤゴーの告白　プッチニイ作

※維納はウィーンのこと

※「独唱」の間違い？

5　絃楽四重奏　フロンツアレー・クワルテツト
二長調第一楽章　ハイドン作
6　ソプラノバリトン二重唱　ヂエラルヂン・ファラー
バスクアーレ・アマトー
歌劇カルメン第四幕より　ビゼイ作
7　ピアノ獨奏　レオポルド・ゴドスキイ
即興的幻想曲　シヨパン作
8　オーケストラ　フヰラデルヒヤシンホニー管絃楽團
コーカサス酋長の行進曲　イッポリトウ・イワノフ作

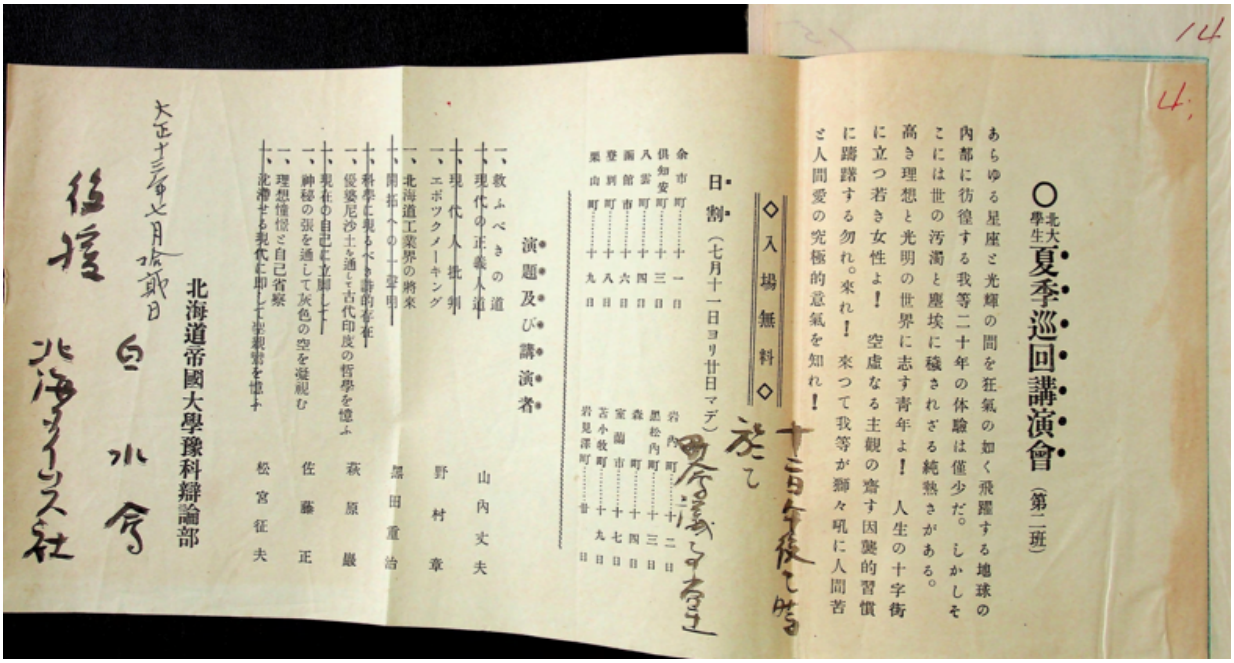


●13－3 **宣伝ビラ**※

大正十参年五月九日総選挙前日
此宣傳を致す
候補者　丸山謙弥　（本黨※）公認
　　澤田利吉（憲政）〃
　　中田忠蔵（政友）〃
　　北林屹郎（憲政）〃

政界の革新は
諸君の正しき一票に在り
政界の混亂腐敗は　一體たれ人の責任でありましよう
うか　それは實に有権者自身にをいて一半の責任を
負はなければなりません
醒めよ有権者諸君？
因縁情實黃白
或は地方問題
或は私利私慾
の為に不正義の投票をなすならば其酬は直に諸君の
面上に落ちて正しからざる悪政の為に将来も亦國民
は塗炭の苦しみをなめなければなりません
参政権の一部を諸君に御委任になった御聖旨に鑑み
五月十日は最も神聖に行動しなければなりません
何人の拘束を受ける事なく　絶對自己の自由意志に
依り純正なる憲政擁護の為めに　主義政綱の厳正な
る比（ママ）判の下に正義人道の名に於て諸君の貴き
一票を憲政擁護の為に投じなければなりません
五月九日
白水會

※政友本党のこと
※ビラの初めに上記6行のメモ書きあり
※北海道12区は丸山、澤田が当選



○北大學生 夏季巡回講演會（第二班）

あらゆる星座と光輝の間を狂氣の如く飛躍する地球の内部に彷徨する我等二十年の体驗は僅少だ。しかしそこには世の汚濁と塵埃に穢されざる純熱さがある。高き理想と光明の世界に志す青年よ！ 人生の十字街に立つ若き女性よ！ 空虚なる主観の齎す因襲的習慣に躊躇する勿れ。來れ！ 來つて我等が獅々吼に人間苦と人間愛の究極的意氣を知れ！

◇入場無料◇

日割（七月十一日ヨリ廿日マデ）

余市町……十一日　岩内町……十二日
倶知安町……十三日　黒松内町……十三日
八雲町……十四日　森町……十四日
函館市……十六日　室蘭市……十七日
登別町……十八日　苫小牧町……十九日
栗山町……十九日　岩見澤町……廿日

演題及び講演者

一、救ふべきの道　山内丈夫
一、現代人批判
一、エポックメーキング　野村章
一、北海道工業界の將來　黒田重治
一、神秘の張を通して灰色の空を凝視む
一、理想憧憬と自己省察　松宮征夫

北海道帝國大學豫科辯論部

大正十三年七月拾弐日

後援　白水會
北海タイムス社

●14－4 講演会チラシ

北大學生　夏季巡回講演會（第二班）

あらゆる星座と光輝の間を狂氣の如く飛躍する地球の内部に彷徨する我等二十年の体驗は僅少だ。しかしそこには世の汚濁と塵埃に穢されざる純熱さがある。
高き理想と光明の世界に志す青年よ！　人生の十字街に立つ若き女性よ！　空虚なる主観の齎す因襲的習慣に躊躇する勿れ。
來れ！來って我等が獅子吼に人間苦と人間愛の究極的意氣を知れ！

入場無料

十二日午後七時
於て　町會議事堂

日割（七月十一日ヨリ二十日マデ）

余市町・・・十一日　岩内町・・・十二日
倶知安町・・・十三日　黒松内町・・・十三日
八雲町・・・十四日　森町・・・十四日
函館市・・・十六日　室蘭市・・・十七日
登別町・・・十八日　苫小牧町・・・十九日
栗山町・・・十九日　岩見澤町・・・二十日

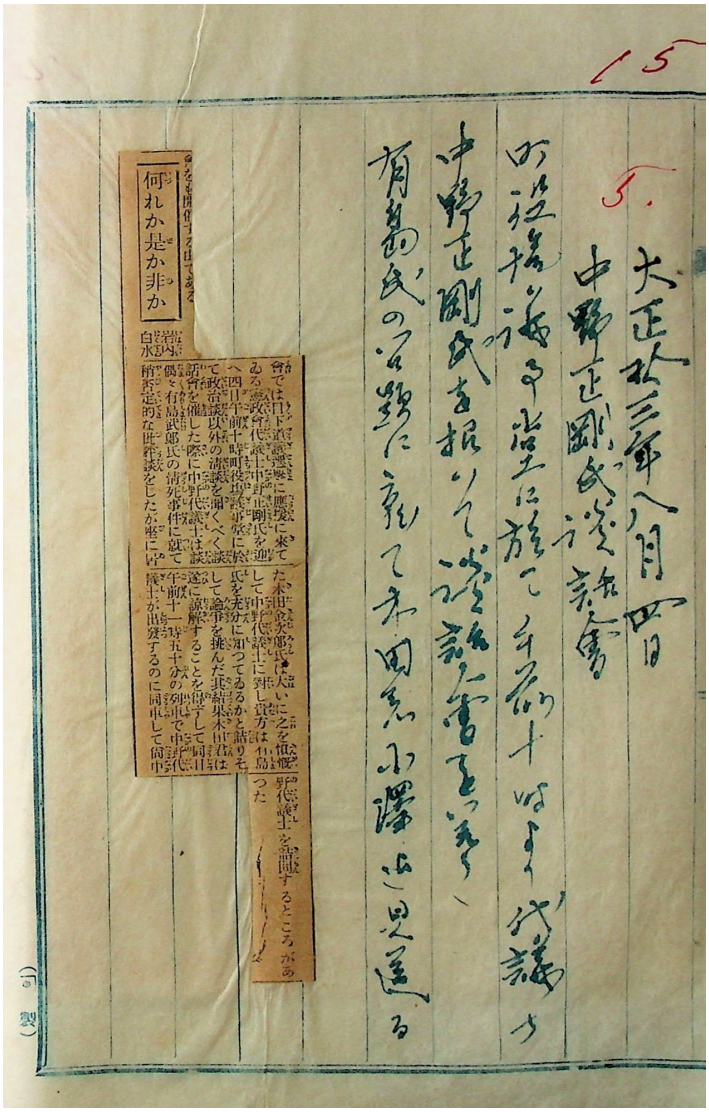
演題及び講演者

一、救ふべきの道　山内丈夫
一、エポックメーキング　野村　章
一、北海道工業界の將來　黒田重治
一、優婆尼沙土を通して古代印度の哲學を憶ふ　萩原　巖
一、神秘の張を通して灰色の空を凝視む　佐藤　正
一、理想憧憬と自己省察　松宮征夫

北海道帝國大學豫科辨論部

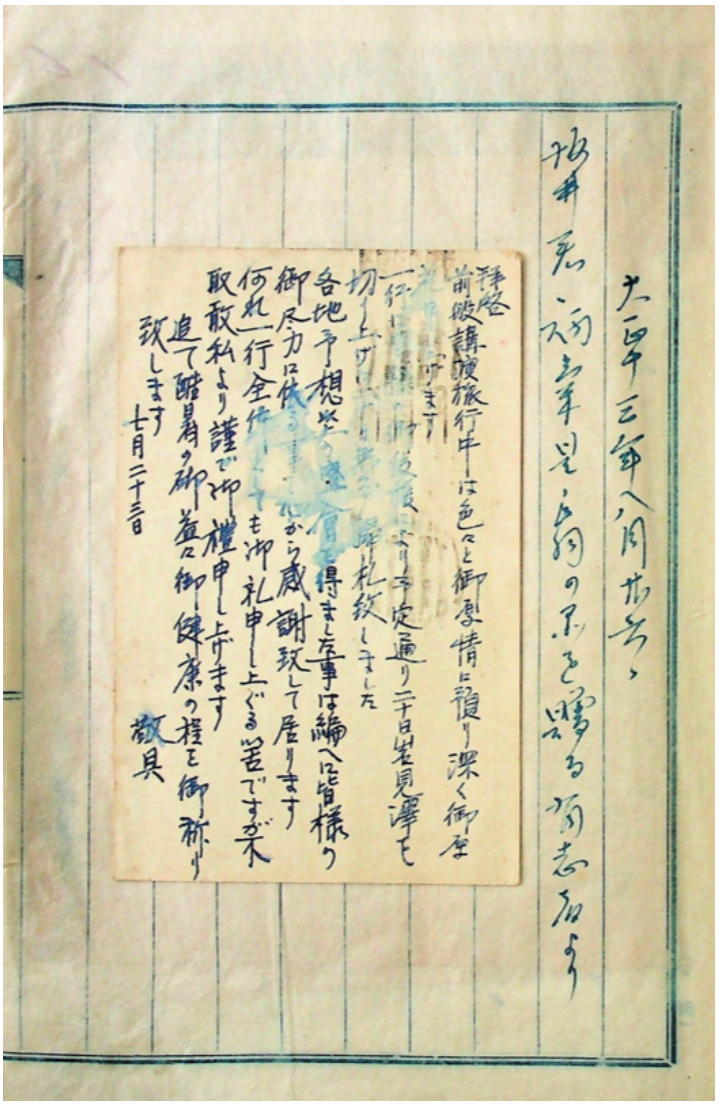
大正十三年七月拾弐日

後援　白水會
北海タイムス社


15
大正拾三年八月四日
中野正剛氏談話會
何れか是か非か

15－5
大正拾三年八月四日
中野正剛氏談話會
町役場議事堂に於て午前十時より代議士中野正剛氏を招いて談話會を開く
有島氏の問題に就て木田君小澤迄見送る※
●新聞記事より
何れか是か非か
岩内白水会では目下道議選挙に応援に来ている憲政会代議士中野正剛氏を迎え　四日午前十時町役場議事堂に於て政治談以外の清談を聞くべく談話会を催した際に中野代議士は談偶々有島武郎氏の情死事件に就て稍否定的な批評談をしたが　座に居た木田金次郎氏は大いに之を憤慨して中野代議士に対し貴方は有島氏を充分に知っているかと詰り　そして論争を挑んだ　其結果木田君は遂に諒解することを得ずして　同日午前十一時五十分の列車で中野代議士が出発するのに同車して　尚中野代議士を詰問するところがあった

※実際は黒松内駅まで同道



大正拾三年八月二十六日
坂井君病氣見舞の品を贈る有志者より
●葉書より

拝啓
前般講演旅行中は色々と御厚情に預り深く御礼申し上げます
一行は皆様の御後援により予定通り二十日岩見澤を切り上げて二十一日無事帰札致しました
各地予想以上の盛會を得ました事は編（ママ）※へに皆様の御尽力に依る事で心から感謝致して居ります
何れ一行全体としても御礼申し上ぐる筈ですが不取敢私より謹で御禮申し上げます
追て酷暑の砌※益々御健康の程を御祈り致します

七月二十三日

敬具

※編は偏（ひとえに）の誤りか
※（みぎり）

16－6

●新聞広告より

時局批判　政談　大演説會

・八月二十八日七時開會

・大國難に直面して

◇鈴木正吾個人遊説‼

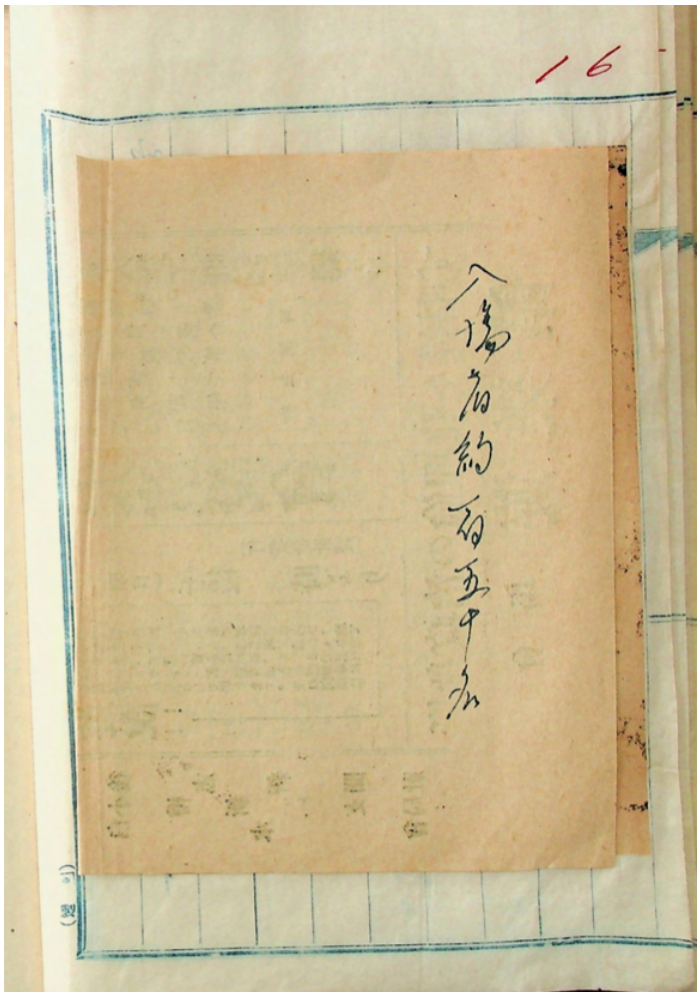
　我等が多年要望したる普通選擧は今や漸やく實現せられんとして居ります。量の問題はこれで一應解決せられたとして、質の問題はどうなりませう。若し新有権者の選擧権に對する理解が舊有権者と五十歩百歩の似た程度なら、普選の實施は結局、これまで三百万人がかりで堕落せしめた日本の政治を、今後は一千二三百万人、即ち國民総がかりで腐敗させることになります。これ私が挺身、全國を行脚して新有権者諸君に向ひ、敢て政治の倫理化を提唱する所以であります。

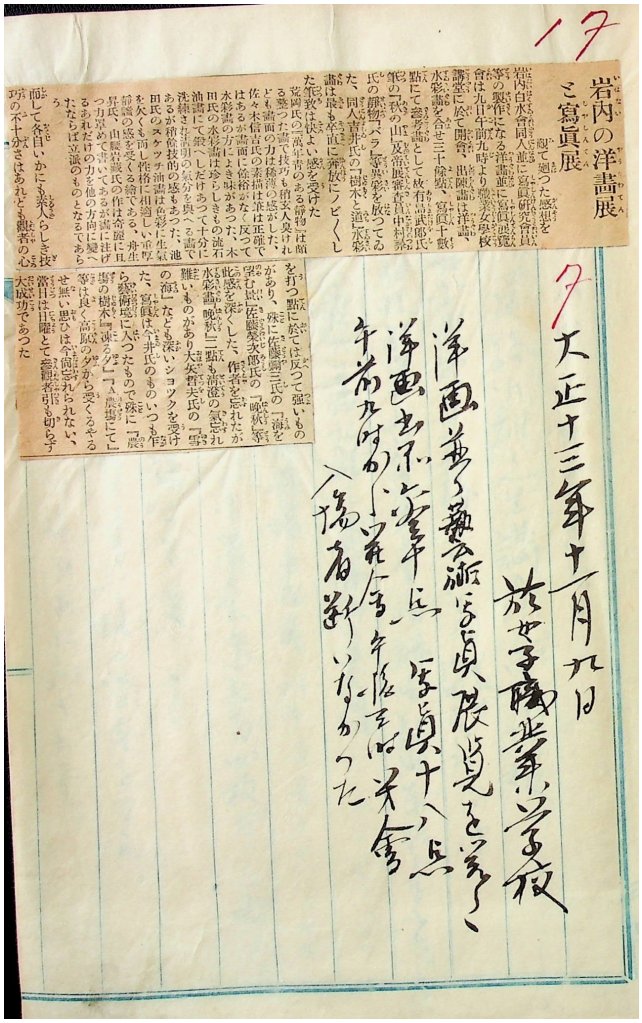
◇主催　白水會、小樽新聞支局、後志新聞社

◇日時　　月　　日（　曜日）午後　時より
◇会場　　（會費　金三十銭）
・題目　１興亡の岐路に立てる日本
２日、露、支、米の四角関係
３内憂外患を直視して
４貧乏の原因と其救済策
５自ら責め、自ら治め、自ら救へ
６一票一圓無黨派聯盟……等　約三時間
◇子爵　後藤新平先生の大獅子吼（レコード吹込）を聴け！！
・挺身政治の倫理化を提唱す
・會場　遊楽館

※日時、会場とも書き込みなく空白のまま

入場者約百五十名





17－7
大正十三年十一月九日
於女子職業学校
洋画並に藝術寫眞展覧を開く
洋画出品参十点　写眞十八点
午前九時から開會　午後三時閉會
入場者断い※（ママ）なかった

●新聞記事より
岩内の洋画展と写真展
観て廻った感想を

岩内白水会同人並に写真研究会員等の製作になる洋画並に写真展覧会は九日午前九時より職業女学校講堂に於て開会、出陳画は洋画、水彩画を合せ三十余点、写真十数点にて参考画として故有島武郎氏筆の『秋の山』及帝展審査員中村彝※氏の静物『バラ』等異彩を放っていた、　同人吉井氏の『樹木と道』水彩画は最も卒（ママ）直に奔放にノビノビした筆致は快よい感を受けた

※「断（た）えなかった」の意味

※彝（つね）

荒岡氏の『万年青のある静物』は頗る整った画で、技巧も稍玄人臭けれども画面の力は稀薄の感がした、佐々木信吉氏の素描は筆は正確ではあるが画面に余裕がなく反って水彩画の方によき味があった、木田氏の水彩画は珍らしきもの流石油絵にて鍛えしだけあって十分に洗練され清明の気分を与える画であるが稍余技的の感もあった、池田氏のスケッチ油画は色彩に生気を欠くも而し性格に相適(ママ)しい重厚静謐の感を受くる絵である、舟生昇氏、山腰岩蔵氏の作は奇麗に且つ力罩めて※書（ママ）いてあるが画に注げるあれだけの力を他の方向に変えたならば立派のものとなるであろう

而して各自いかにも素人らしき技巧の不十分さはあれども観者の心を打つ点に於ては反って強いものがあり、殊に佐藤彌三（ママ）※氏の『海を望む景』佐藤栄次郎氏の『晩秋』等此感を深くした、作者を忘れたが水彩画『晩秋』二点も清澄の気忘れ難いものがあり大矢哲夫氏の『雪の海』なども深いショックを受けた、写真は今井氏のものいつも乍ら芸術境に入ったもので殊に『農場の樹木』『凍る夕』『A農場にて』等は良く　高原の夕から受くるやるせ無い思いは今尚忘れられない、　当日は日曜とて参観者引も切らず大成功であった

※罩（こ）めて

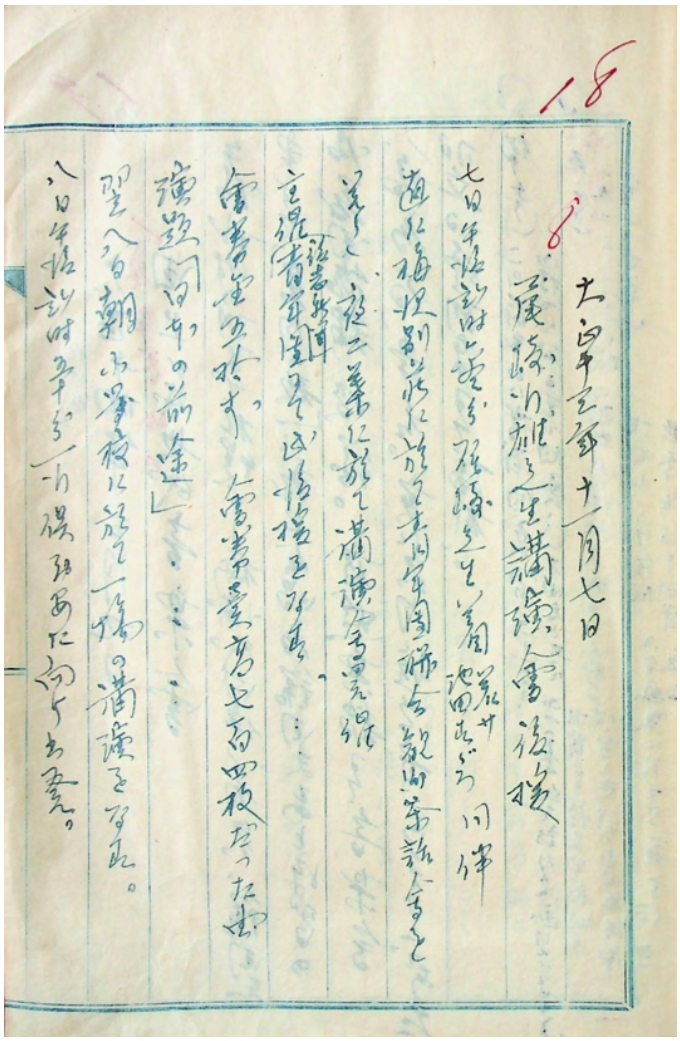
※彌造をしばしばこのように記している。彌蔵とすることもあった

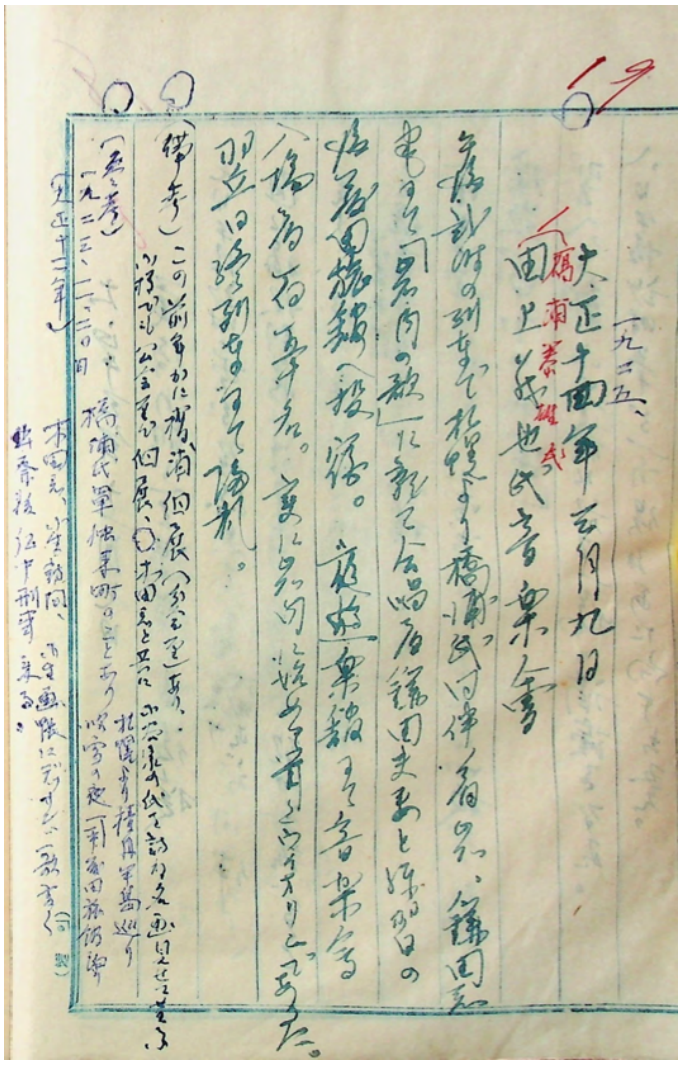
18－6

大正十三年十一月七日

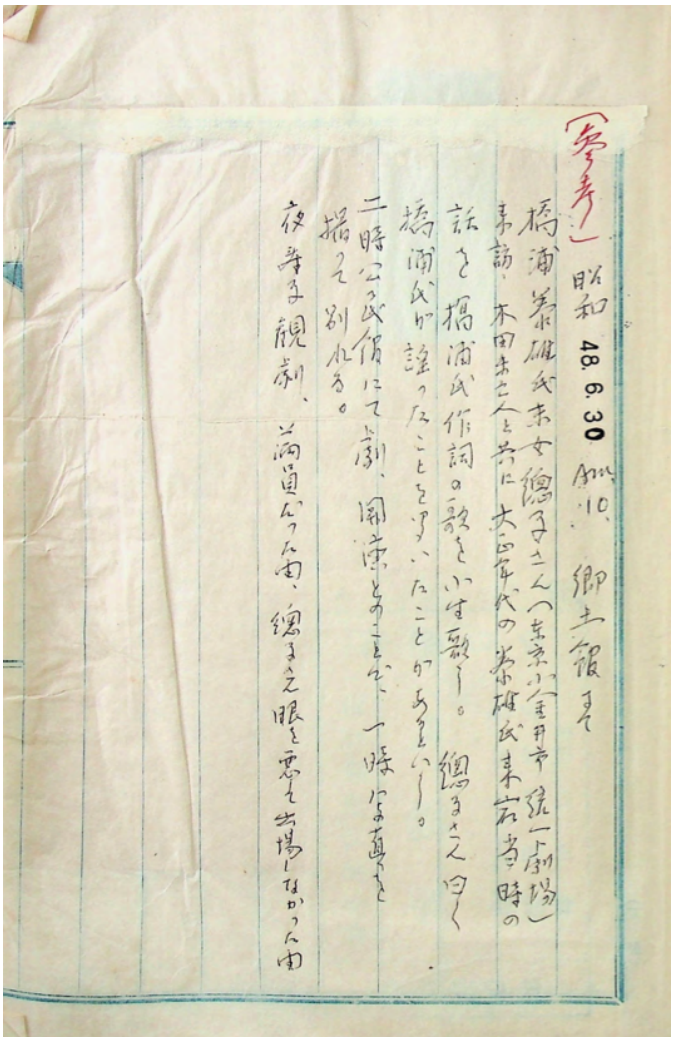
尾崎行雄先生講演會後援

七日午後弐時参分尾崎先生着若サ池田すゞろ同伴
直に梅沢別荘に於て青年團聯合歓迎茶話會を開く、夜に二葉に於て講演會開催
主催後志新聞、青年團にて此後援をなす
會券金五拾銭　會券賣高七百四枚だった由
演題「日本の前途」
翌八日朝小学校に於て一場の講演をなす。
八日午後弐時五十分一行倶知安に向け出発。





19－1
○一九二五、
大正十四年三月九日
橋浦泰雄氏・田上義也氏音楽會
午後弐時の列車で札幌より橋浦氏同伴ノ者四名。鎌田君宅にて「岩内の歌」に就て合唱者鎌田夫妻と練習の後　藤田旅館へ投宿。夜遊楽舘にて音楽會
入場者百五十名。実に岩内に始（ママ）めて聴くウ（ママ）イオリンであった。
翌日終列車にて帰札。
○（備考）この前年かに橋浦個展（分会堂）あり、小樽でも公会堂で個展、○木田君と共に、小谷家の氏を訪ね名画見せて貰ふ
○（参考）一九二三、一一、二〇日（大正十二年）　橋浦氏単独来町のことあり
札幌より積丹半島巡り吹雪の夜丁平藤田旅館泊り　木田君、小生訪問、小生画帳にデッサン、歌書く　出発後弘中刑事来る


参考
昭和48.6.30 AM10 郷土館
橋浦泰雄氏末女總子さん（東京小金井市統一劇場）来訪、木田未亡人と共に大正年代の泰雄氏来岩当時の話を
橋浦氏作詞の歌を小生歌う。總子さん曰く橋浦氏が謡ったことを聞いたことがあるという。
二時公民館にて劇、開演とのことで、一時写真を撮って別れる。
夜寿子観劇、満員だった由、總子さん眼を悪して出場しなかった由

（参考）昭和48.6.30AM10郷土館にて
橋浦泰雄氏末女總子さん（東京小金井市統一劇場）来訪、木田未亡人と共に大正年代の泰雄氏来岩当時の話を
橋浦氏作詞の歌を小生歌う。總子さん曰く橋浦氏が謡ったことを聞いたことがあるという。
二時公民館にて劇、開演とのことで、一時写真を撮って別れる。
夜寿子観劇、満員だった由、總子さん眼を悪して出場しなかった由

※「橋」と「槗」とが混在している

●チラシから

ヴアイオリンの夕　田上義也氏獨奏會

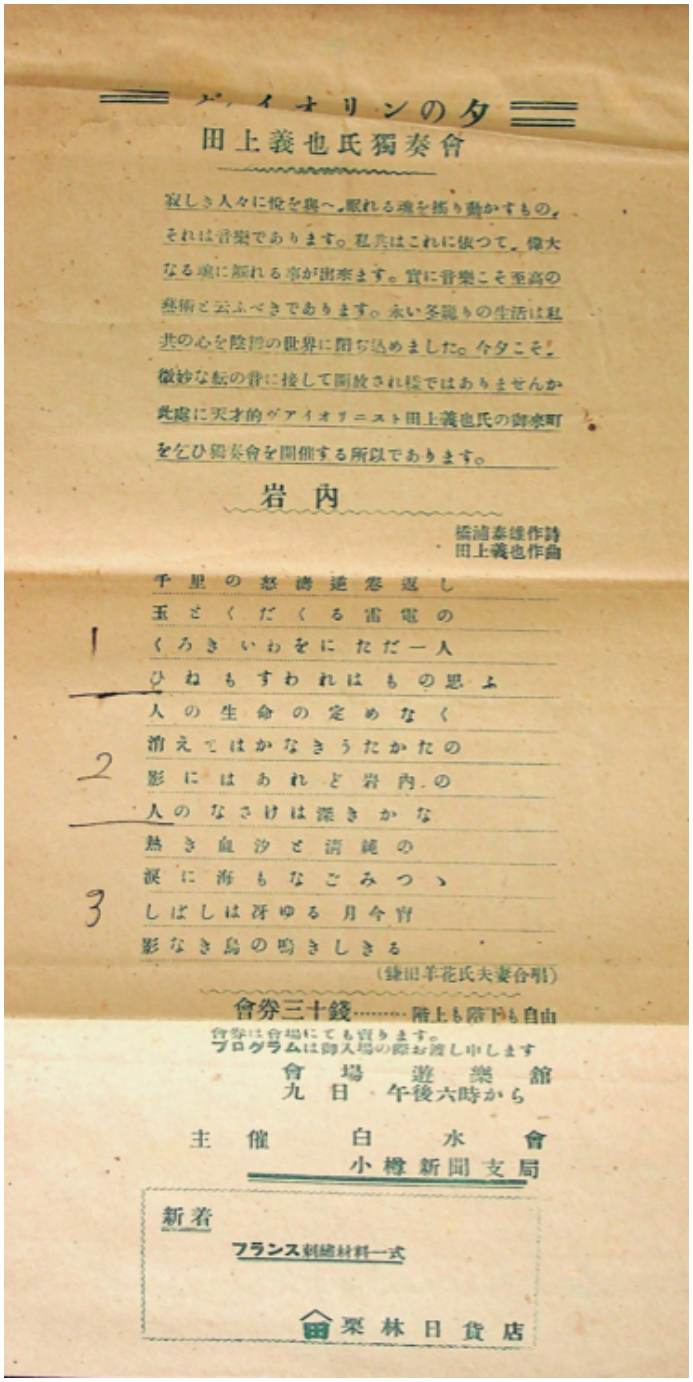
寂しき人々に悦を與へ、眠れる魂を揺り動かすもの、それは音楽であります。私共はこれに依って、偉大なる魂に觸れる事が出来ます。實に音楽こそ至高の藝術と云ふべきであります。永い冬籠りの生活は私共の心を陰鬱の世界に閉ぢ込めました。今夕こそ、微妙な絃の音に接して開放され様ではありませんか

此處に天才的ヴアイオリニスト田上義也氏の御来町を乞ひ獨奏會を開催する所以であります。

岩内

　橋浦泰雄作詞
　田上義也作曲

1　千里の怒濤逆巻返し
　玉とくだくる雷電の


ヴアイオリンの夕
田上義也氏獨奏會
寂しき人々に悦を與へ、眠れる魂を揺り動かすもの、
それは音楽であります。私共はこれに依つて、偉大
なる魂に觸れる事が出来ます。實に音楽こそ至高の
藝術と云ふべきであります。永い冬籠りの生活は私
共の心を陰鬱の世界に閉ぢ込めました。今夕こそ、
微妙な絃の音に接して開放され様ではありませんか
此處に天才的ヴアイオリニスト田上義也氏の御来町
を乞ひ獨奏會を開催する所以であります。
岩内
橋浦泰雄作詞
田上義也作曲
千里の怒濤逆巻返し
玉とくだくる雷電の
1
くろきいわをにただ一人
ひねもすわれはもの思ふ
人の生命の定めなく
消えてはかなきうたかたの
2
影にはあれど岩内の
人のなさけは深きかな
熱き血汐と清純の
涙に海もなごみつゝ
3
しばしは浮ゆる月今宵
影なき島の鳴きしきる
（鎌田羊花氏夫妻合唱）
會券三十錢……階上も階下も自由
會券は會場にても賣ります。
プログラムは御入場の際お渡し申します
會場　遊樂館
九日　午後六時から
主催　白水會
小樽新聞支局
新着
フランス刺繍材料一式
栗林日貨店

くろきいわをにただ一人
ひねもすわれはもの思ふ

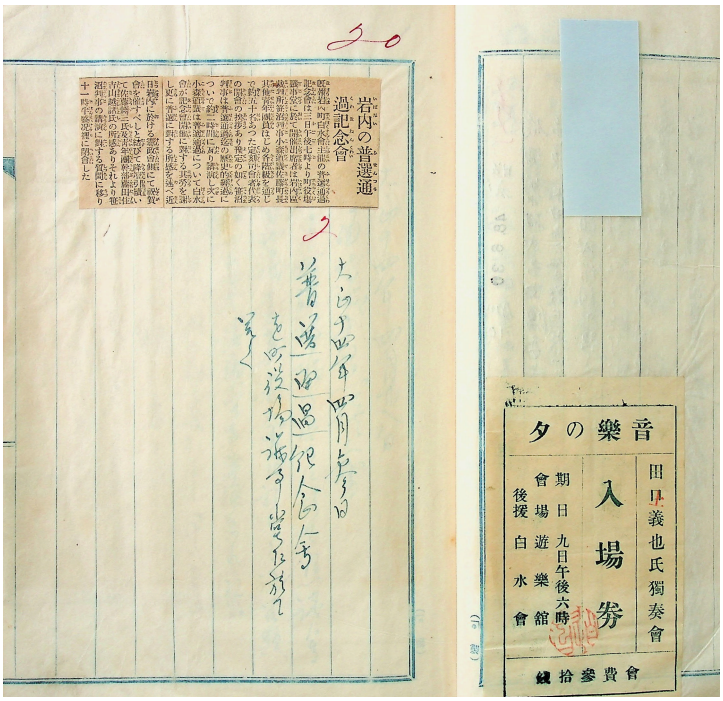
2
人の生命の定めなく
消えてはかなきうたかたの
影にはあれど岩内の
人のなさけは深きかな

3
熱き血汐と清純の
涙に海もなごみつゝ
しばしは冴ゆる月今宵
影なき鳥の鳴きしきる

（鎌田羊花氏夫妻合唱）

會券三十銭……階上も階下も自由
會券は會場にても賣ります。
プログラムは御入場の際お渡し申します
會場　遊楽舘
九日午後六時から
主催　白水會
　　小樽新聞支局

※この後にあった店の広告は省略



●入場券より

音楽の夕

田上義也氏獨奏會

入場券

期日　九日午後六時

會場　遊楽舘

後援　白水會

會費　参拾銭

20－2

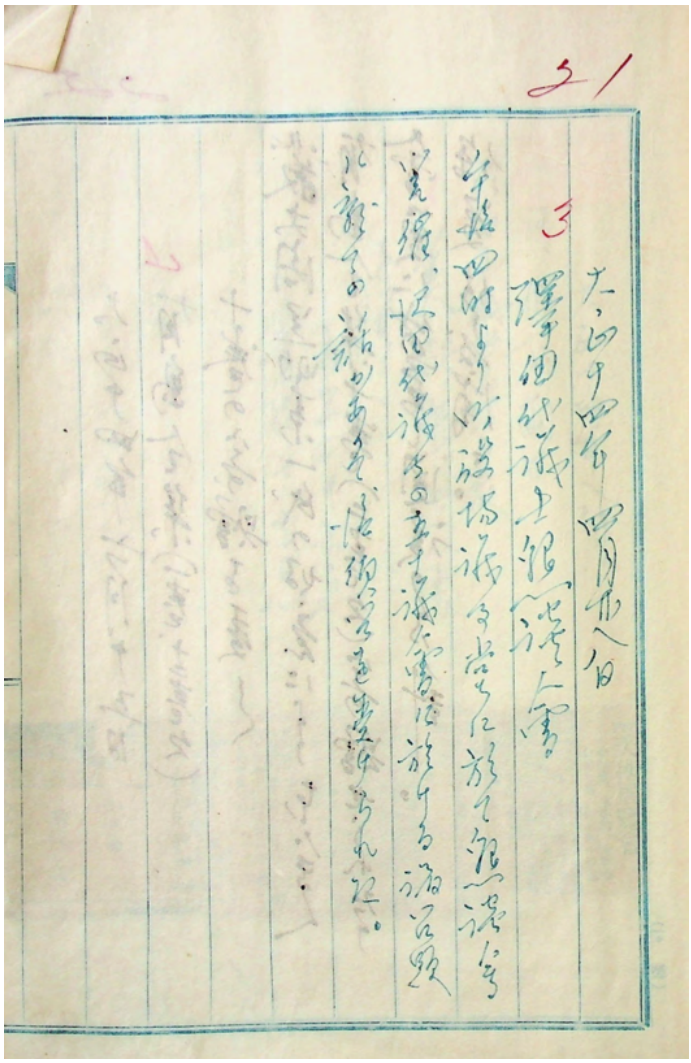
大正十四年四月参日

普選通過記念會を町役場議事堂に於て開く

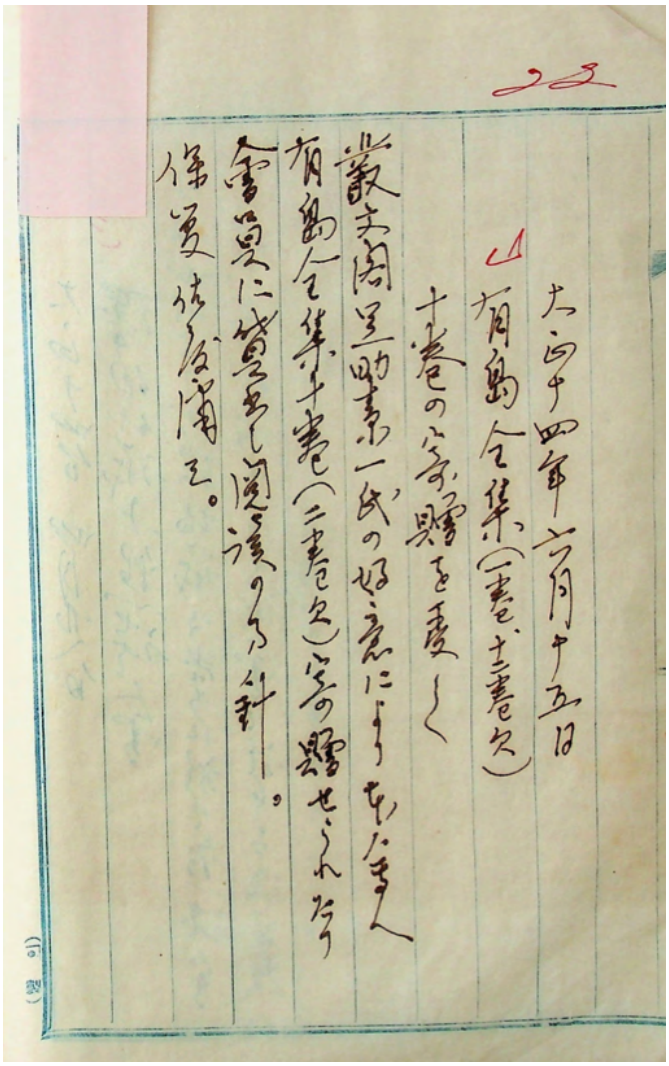
●新聞記事から

岩内の普選通過記念会

既報岩内町白水会主催の普選通過記念会は　三日午後七時より町役場議事堂に於て開催　出席者は岩内区裁判所笹沼判事　小森道議　佐藤町長其他青年団員はじめ各階級を通じで（ママ）約五十名あった　定刻司会者代表の開会の挨拶あり　予定の如く笹沼判事は普選通過迄の歴史的経過についで（ママ）約二時間に亘り講演し　次に小森道議は普選通過について白水会が記念会開催に対する其労を謝し　更に普選に対する所感を述べ　近日岩内に於ける憲政会側にて祝賀会を催すべしと結びて降壇　引続いて佐藤彌三氏及青年団幹部藤田　住吉　山越諸氏の所感あり　それより笹沼判事の講演に対する質問に移り　十一時半盛況裡に閉会した

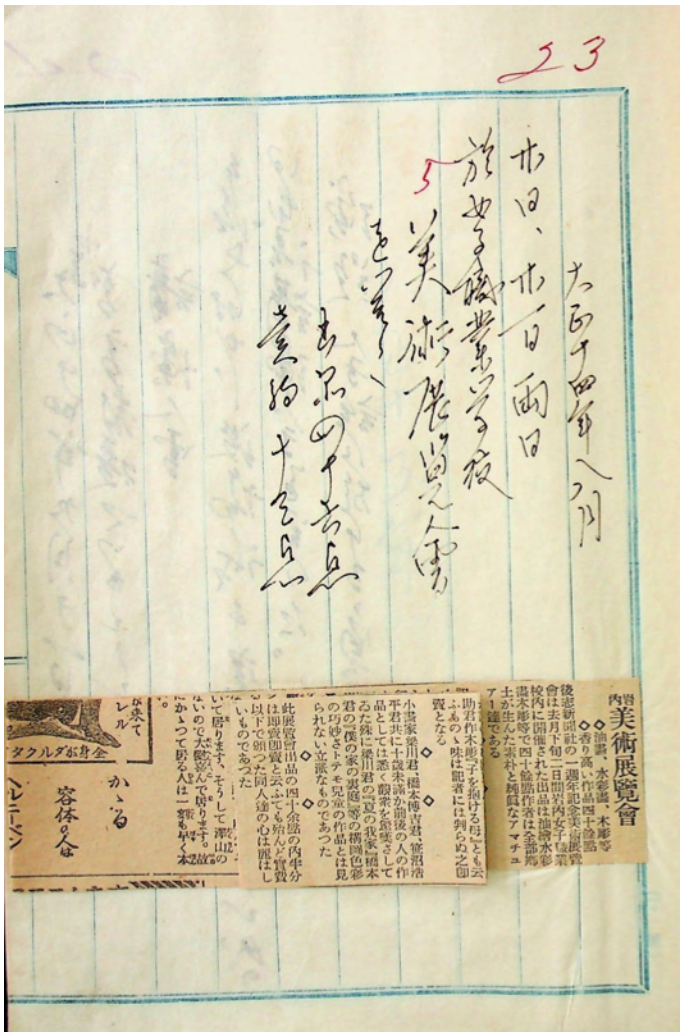


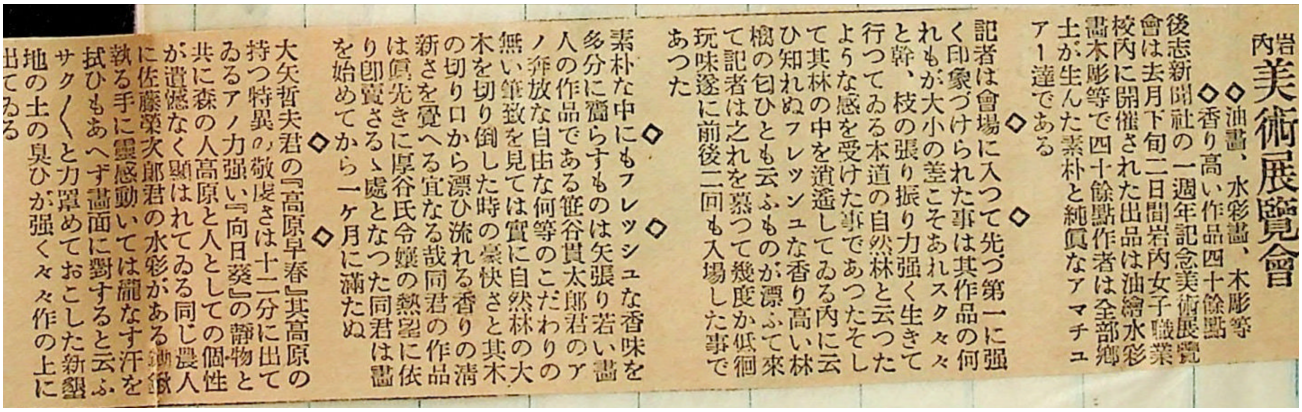
21－3
大正十四年四月二十八日
澤田代議士懇談會
午後四時より町役場議事堂に於て懇談會開催、沢田代議士の五十議會に於ける諸問題に就ての話があって、後質問を受けられた。



22－4
大正十四年六月十五日
有島全集（一巻、十二巻欠）十巻の寄贈を受く
叢文閣足助素一氏の好意により本會へ有島全集十巻（二巻欠）寄贈せられたり
會員に貸出し閲讀の方針。
保管佐藤彌三。

23－5
大正十四年八月二十日、二十一日両日
於女子職業学校
美術展覧會を開く
出品四十六点
賣約十三点


23
大正十四年八月
於女子職業学校
美術展覧會
美術展覧會
内
◇油畫、水彩畫、木彫等
◇者り高い作品四十餘點
後援朝日社の一週年記念美術展覽
會は去月下旬二日間岩内女子職業
校内に開催された出品は油畫水彩
畫木彫等で四十餘點作者は全部岩
土が生んだ素朴と純眞なアマチュ
ア一達である
勘君作木彫子を抱ける母とも云
ふあの一點は記者には特に之の
賞となる
◇小畫家葉川君◇橋本博吉君◇笹淵浩
平君共に十歳未滿か前後の人の作
品としては遙く觀衆を驚嘆さして
ゐた殊に葉川君の「夏の我家」橋本
君の「僕の家の裏庭」等の構圖色彩
の巧妙さトチを兒童の作品とは見
られない立派なものであつた
◇此展覽會出品の四十餘點の内半分
は即賣即賣と云ふても殆んど賣賞
以下で卽つた同人達の心は實はし
いものであつた
いで居ります、そうして澤山の
はいので大變悦んで居ります。
かいつて居る人は一點も好く本
容体の人は
かゝる
レルに來て
全身ボルタクル
ヘレニーゼン



岩内美術展覽會

◇油畫、水彩畫、木彫等
◇香り高い作品四十餘點

後志新聞社の一週年記念美術展覽會は去月下旬二日間岩内女子職業校内に開催された出品は油繪水彩畫木彫等で四十餘點作者は全部鄉土が生んだ素朴と純眞なアマチユア一達である

◇

記者は會場に入つて先づ第一に強く印象づけられた事は其作品の何れもが大小の差こそあれスクスクと幹、枝の張り振り力強く生きて行つてゐる本道の自然林と云つたような感を受けた事であつたそして其林の中を逍遥してゐる内に云ひ知れぬフレッシュな香り高い林檎の匂ひとも云ふものが漂ふて來て記者は之れを慕つて幾度か低徊玩味遂に前後二回も入場した事であつた

◇

素朴な中にもフレッシュな香味を多分に齎らすものは矢張り若い畫人の作品である　笹谷貫太郎君のアノ奔放な自由な何等のこだわりの無い筆致を見ては　實に自然林の大木を切り倒した時の豪快さと其木の切り口から漂い流れる香りの清新さを覚える宜なる哉　同君の作品は真先きに厚谷氏令嬢の熱望に依り即売さるる処となった　同君は画を始めてから一ヶ月に満たぬ

◇

大矢哲夫君の『高原早春』其高原の持つ特異の敬虔さは十二分に出ているアノ力強い『向日葵』の静物と共に　森の人高原と（ママ）人としての個性が遺憾なく顕われている　同じ農人に佐藤栄次郎君の水彩がある　鋤鍬執る手に霊感動いては滝なす汗を拭いもあえず画面に対すると云う　サクサクと力罩めて※おこした新墾地の土の臭いが強く強く作の上に出ている

●新聞記事から

岩内美術展覧会

◇油画、水彩画、木彫等
◇香り高い作品四十余点

後志新聞社の一週（ママ）年記念美術展覧会は去月下旬二日間岩内女子職業校内に開催された　出品は油絵水彩画木彫等で四十余点　作者は全部郷土が生んだ（ママ）素朴と純真なアマチュアー達である

◇

記者は会場に入って先ず第一に強く印象づけられた事は其作品の何れもが大小の差こそあれスクスクと幹、枝の張り振り力強く生きて行っている本道の自然林と云ったような感を受けた事であった　そして其林の中を逍遥している内に　言い知れぬフレッソン（ママ）ュな香り高い林檎の匂いとも云うものが漂うて来て　記者は之れを慕って幾度か低徊玩味遂に前後二回も入場した事であった

◇

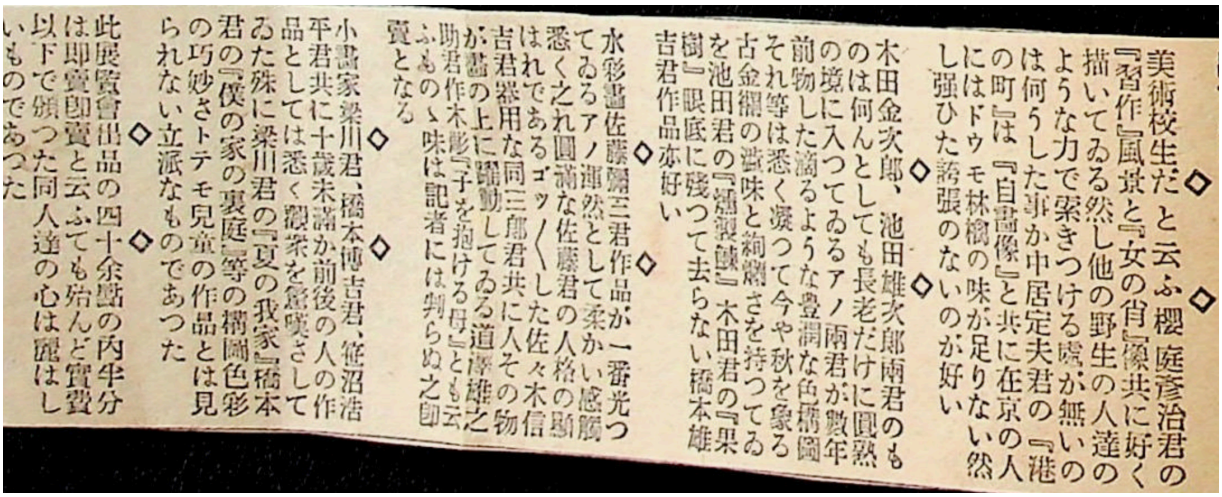
素朴な中にもフレッシュな香味を多分に齎らす※ものは矢張り若い画人の作品である　笹谷貫太郎君のアノ奔放な自由な何等のこだわりの無い筆致を見ては　実に自然林の大木を切り倒した時の豪快さと其木の切り口から漂い流れる香りの清新さを覚える宜なる哉　同君の作品は真先きに厚谷氏令嬢の熱望に依り即売さるる処となった　同君は画を始めてから一ヶ月に満たぬ

◇

大矢哲夫君の『高原早春』其高原の持つ特異の敬虔さは十二分に出ている　アノ力強い『向日葵』の静物と共に　森の人高原と（ママ）人としての個性が遺憾なく顕われている　同じ農人に佐藤栄次郎君の水彩がある　鋤鍬執る手に霊感動いては滝なす汗を拭いもあえず画面に対すると云う　サクサクと力罩めて※おこした新墾地の土の臭いが強く強く作の上に出ている

※齎（もた）らす

※罩（こ）めて



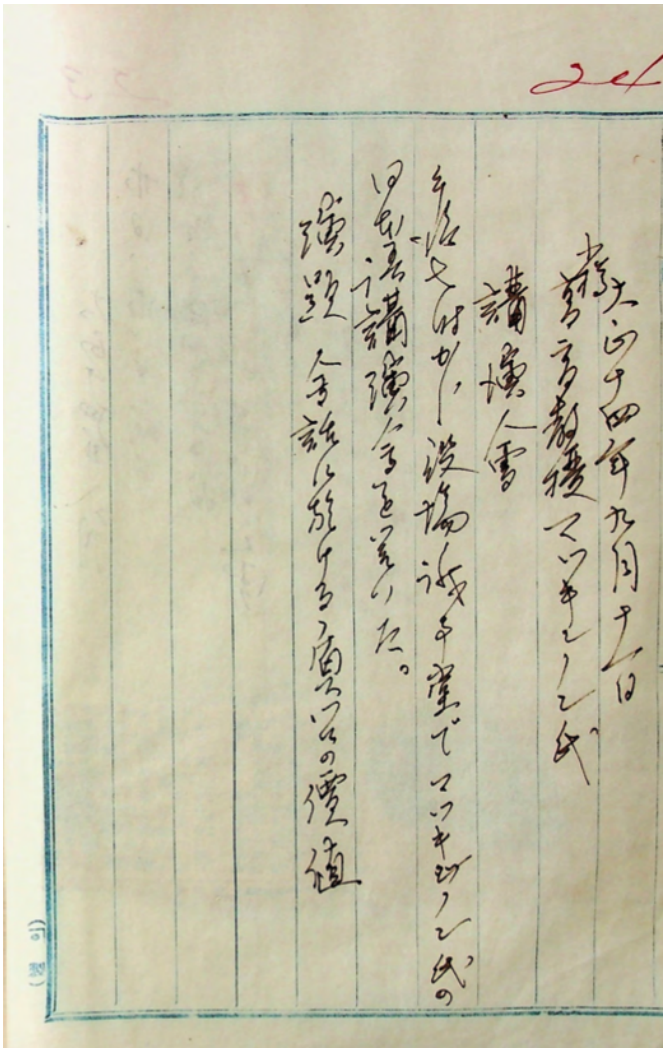
美術校生だと云ふ櫻庭彦治君の『習作』風景と『女の肖』像※共に好く描いてゐる　然し他の野生の人達のような力で索きつける処が無いのは何うした事か　中居定夫君の『港の町』は『自画像』と共に在京の人にはドウモ林檎の味が足りない　然し強ひた誇張のないのが好い　◇　木田金次郎、池田雄次郎両君のものは何んとしても長老だけに円熟の境に入つてゐる　アノ両君が数年前物した滴るような豊潤な色構図　それ等は悉く凝って今や秋を象る古金襴の渋味と絢爛さを持っていを（ママ）　池田君の『燻製鰊』木田君の『果樹』眼底に残って去らない　橋本雄吉君作品亦好い　◇　水彩画佐藤弥三君作品が一番光っている　アノ渾然として柔かい感触悉く之れ円満な佐藤君の人格の顕われである　ゴツゴツした佐々木信吉君　器用な同三郎君共に人その物が画の上に躍動している　道沢雄之助君作木彫『子を抱ける母』とも云うものの味は記者には判らぬ　之即売となる　◇　小画家梁川君、橋本伝吉君、笹沼浩平君共に十歳未満か前後の人の作品としては悉く観衆を驚嘆さしていた　殊に梁川君の『夏の我家』橋本君の『僕の家の裏庭』等の構図色彩の巧妙さ　トテモ児童の作品とは見られない立派なものであった　◇　此展覧会出品の四十余点の内半分は即売　即売と云っても殆んど実費以下で頒った同人達の心は麗わしいものであった

※最初２つの『』の付け方が変だ　「習作『風景』と『女の肖像』」か

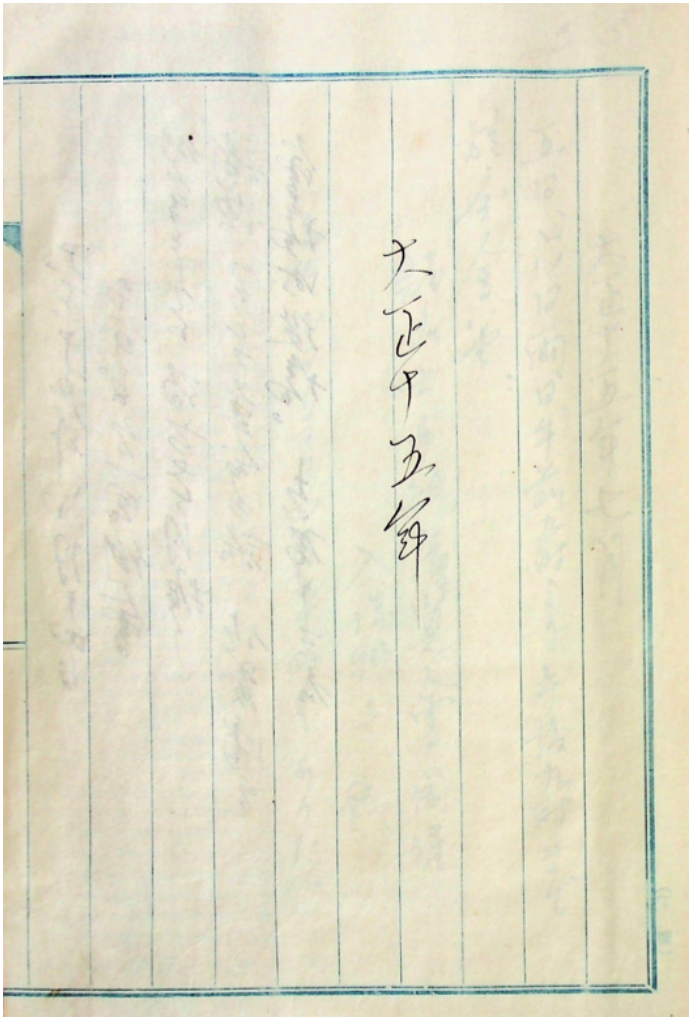
24

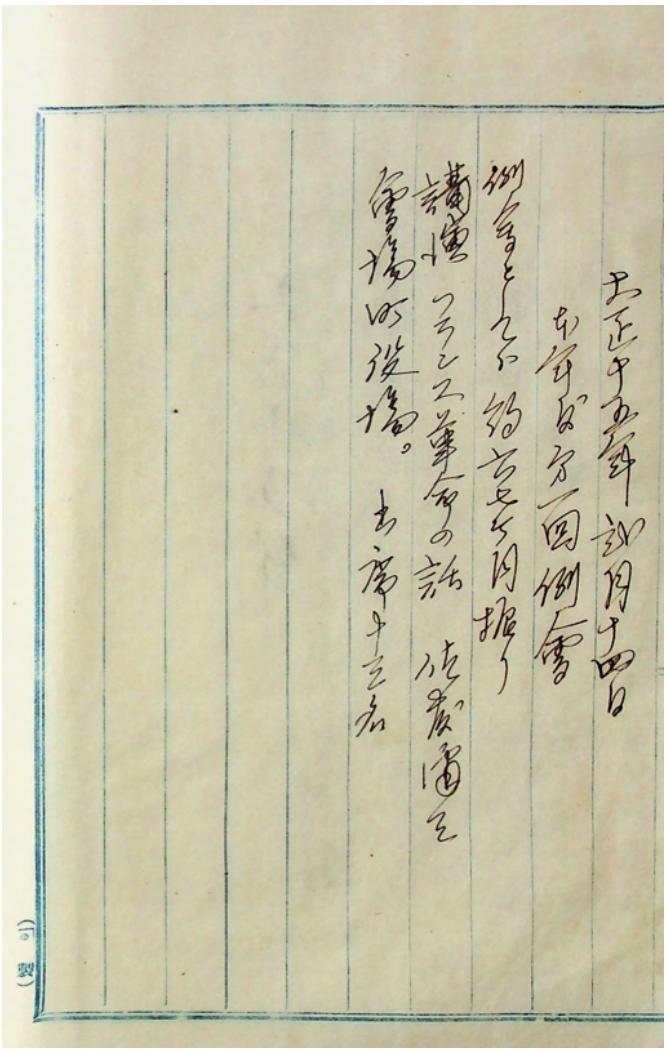
大正十四年九月十一日
小樽高商教授マッキレーン氏
講演會

午後七時から役場議事堂でマッキレーン氏の日本語講演會を開いた。
演題　會話に於ける質問の價値

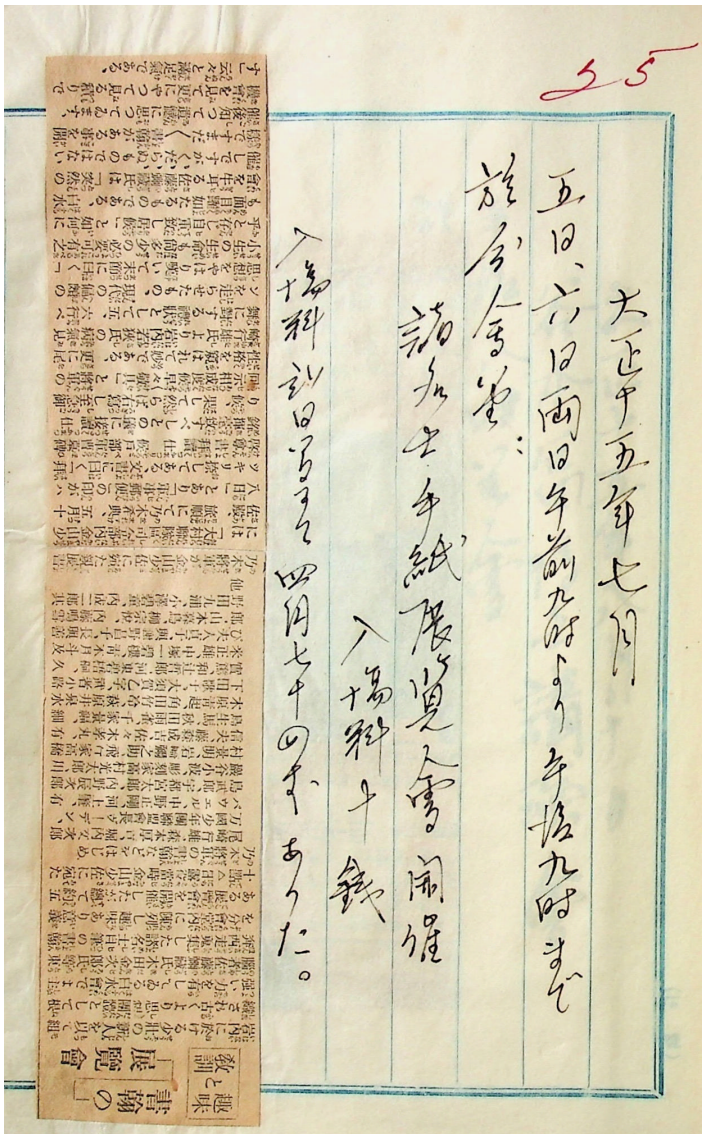


大正十五年





大正十五年弐月十四日
本年度第一回例會
例會としてハ約六七ケ月振り
講演　フランス革命の話　佐藤彌三
會場　町役場。出席十三名



25

大正十五年七月

五日、六日両日午前九時より午後九時まで
於分會堂
諸名士手紙展覧會開催
入場料十銭

入場料二日間にて四円七十四銭あった。

●新聞記事より（1）

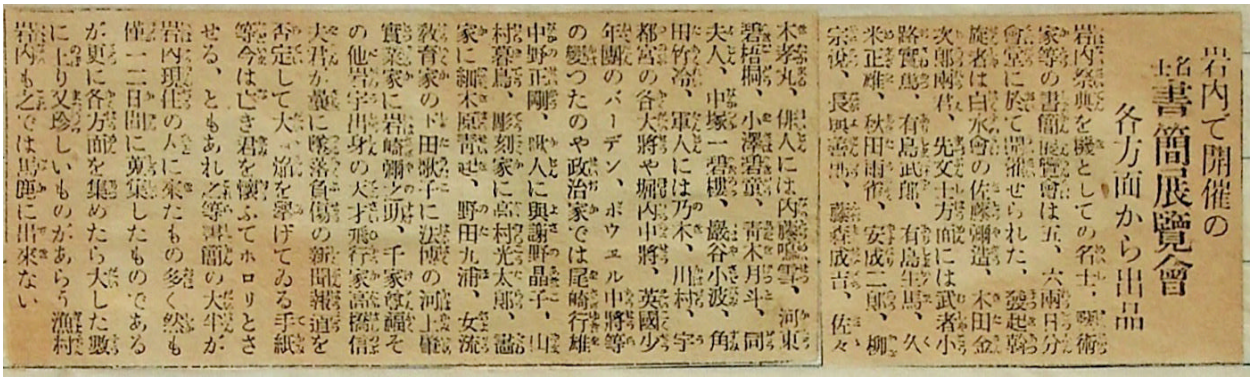
趣味と教訓

書翰の展覧会

岩内に於ける少壮の新人を以て組織され古くより思想団体として根強い力を有している白水会では主脳者佐藤弥

蔵（ママ）氏木田金次郎氏等東奔西走蒐集した諸名士自筆の書翰を分会堂内に陳列し　趣味あり意義ある展覧会を開催したが総て約五十点△日露役当時金山少佐に宛た乃木将軍の書翰などをはじめ
尾崎行雄、森本厚吉、堀内文次郎、万国少年団連盟会長ヴーデン、バウェル、中野正剛、河上肇、有島武郎、宇都宮太郎、内野辰次郎、巌谷小波、彫刻家高村光太郎、川村景明、岩崎弥之助、飛行家高橋信夫、藤森成吉、佐々木孝丸、有島生馬、秋田雨雀、千家景福、細木原青起、角田竹冷、萩※（ママ）原井泉水、下田歌子、大須賀乙字、武者小路実篤、和辻哲郎、河東碧梧桐、久米正雄、中塚一碧楼、青木月斗及び夫人貞子、与謝野昌※（ママ）子、長与善郎、山本※（ママ）暮鳥、柳宗悦、内藤鳴雪、野田九浦、小沢碧童、内成二郎其他
乃木将軍が金山少佐に宛た親展書には「大村連隊区司令部内金山少佐殿、旅順にて乃木希典、五月十八日」とあり「軍事郵便」の印がハッキリ捺してある、　文書に曰く「拝啓尊書拝読仕候戸部軍曹墓碑銘揮毫致すべしとの儀に接読仕り候、果して然らば右写し至急御回示相成度候早々敬具」と将軍の性格を窺われて妙である、更に尾崎行雄氏より岩内若狭氏の病気見舞に対する礼状として五、六行ペンを走らせたもの、現代の偏頗の思想をやはり嘆いて末節に曰く「小生の生命も尚多少の必要可有之乎と存じ自重致し居候」と如何にも面目躍如たるものである、　白水会を牛耳る佐藤弥蔵（ママ）氏は「突然の催しですがくだらぬものではない様です、　まだまだ書翰がある事を開催後知って遺憾に思っています、　機会を見て更にやって見る積りです」云々と満足気である

※正しくは、荻原井泉水、与謝野晶子、山村暮鳥



岩内で開催の
名士書簡展覽會
各方面から出品

岩内祭典を機としての名士、藝術家等の書簡展覽會は五、六兩日分會堂に於て開催せられた、發起斡旋者は白水會の佐藤彌造、木田金次郎兩君、先文士方面には武者小路實篤、有島武郎、有島生馬、久米正雄、秋田雨雀、安成二郎、柳宗悦、長與善郎、藤森成吉、佐々木孝丸、俳人には内藤鳴雪、河東碧梧桐、小澤碧童、青木月斗、同夫人、中塚一碧樓、巖谷小波、角田竹冷、軍人には乃木、川村、宇都宮の各大將や堀内中將、英國少年團のバーデン、ボウエル中將等の變つたのや政治家では尾崎行雄、中野正剛、歌人に與謝野晶子、山村暮鳥、彫刻家に高村光太郎、畫家に細木原青起、野田九浦、女流教育家の下田歌子に法博の河上肇、實業家に岩崎彌之助、千家尊福※、その他岩宇出身の天才飛行家高橋信夫君が曩※に墜落負傷の新聞報道を否定して大気焔を擧げている手紙等今は亡き君を懐うてホロリとさせる、ともあれ之等書簡の大半が岩内現住の人に來たもの多く、然も僅一二日間に蒐集したものであるが更に各方面を集めたら大した數に上り又珍しいものがあろう、漁村岩内も之では馬鹿に出來ない

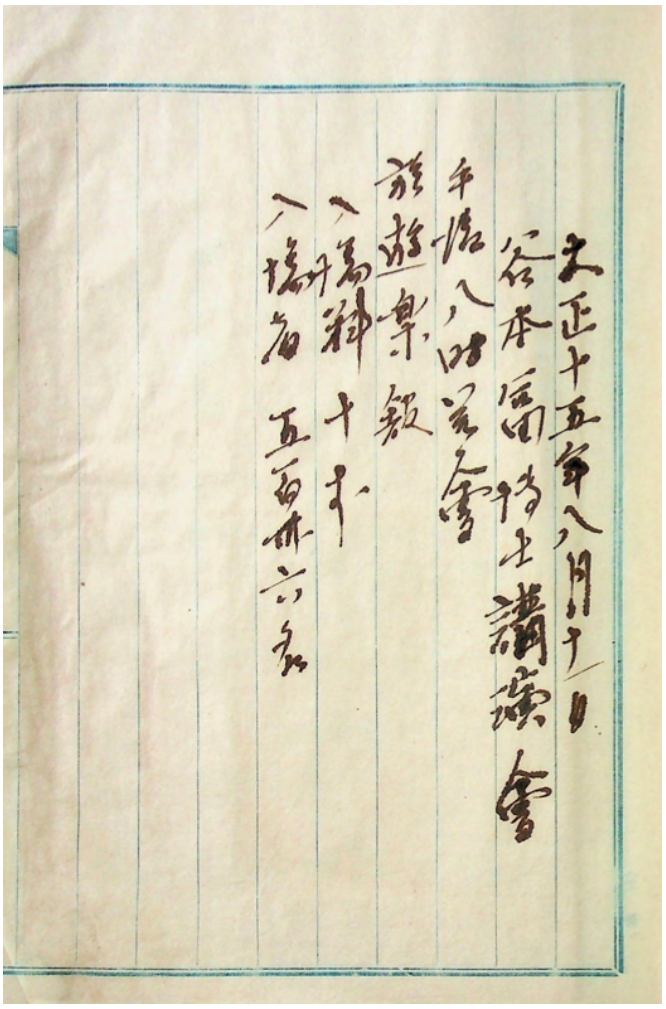
●新聞記事より（2）

岩内で開催の
名士書簡展覧会
各方面から出品

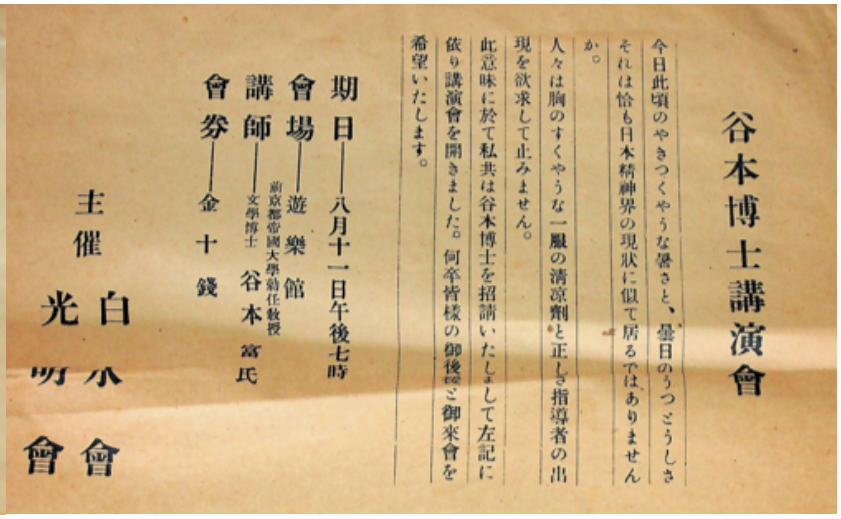
岩内祭典を機としての名士、芸術家等の書簡展覧会は五、六両日分会堂に於て開催せられた、発起斡旋者は白水会の佐藤弥造（ママ）、木田金次郎両君、先（まず）文士方面には武者小路実篤、有島武郎、有島生馬、久米正雄、秋田雨雀、安成二郎、柳宗悦、長与善郎、藤森成吉、佐々木孝丸、俳人には内藤鳴雪、河東碧梧桐、小沢碧童、青木月斗、同夫人、中塚一碧楼、巌谷小波、角田竹冷、軍人には乃木、川村、宇都宮の各大将や堀内中将、英国少年団のバーデン、ボウェル中将等の変ったのや政治家では尾崎行雄、中野正剛、歌人に与謝野晶子、山村暮鳥、彫刻家に高村光太郎、画家に細木原青起、野田九浦、女流教育家の下田歌子に法博の河上肇、実業家に岩崎弥之助、千家尊福※、その他岩宇出身の天才飛行家高橋信夫君が曩※に墜落負傷の新聞報道を否定して大気焔を挙げている手紙等今は亡き君を懐うてホロリとさせる、ともあれ之等書簡の大半が岩内現住の人に来たもの多く、然も僅一二日間に蒐集したものであるが更に各方面を集めたら大した数に上り又珍しいものがあろう、漁村岩内も之では馬鹿に出来ない

※千家尊福は（せんげたかとみ）出雲大社宮司、東京鉄道株式会社社長などを歴任しているなお、千家景福という人物は見当たらなかった

※曩（さき）に



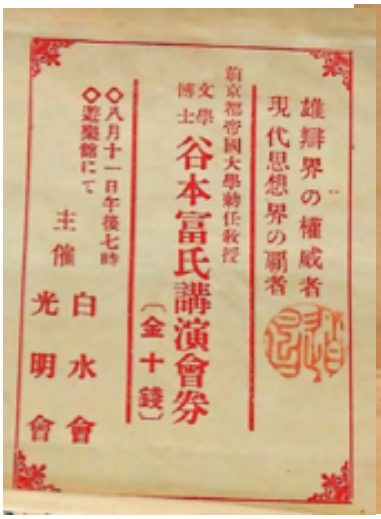
大正十五年八月十一日
谷本富博士講演會
午後八時開會
於　遊樂舘
入場料　十錢
入場者　五百三十六名


谷本博士講演會

今日此頃のやきつくやうな暑さと、曇日のうつとうしさ
それは恰も日本精神界の現狀に似て居るではありません
か。
人々は胸のすくやうな一服の清涼劑と正しき指導者の出
現を欲求して止みません。
此意味に於て私共は谷本博士を招請いたしまして左記に
依り講演會を開きました。何卒皆樣の御後援と御來會を
希望いたします。

期日——八月十一日午後七時
會場——遊樂館
講師——前京都帝國大學勅任教授 文學博士 谷本富氏
會券——金十錢

主催 白水會 光明會


雄辯界の權威者
現代思想界の覇者
前京都帝國大學勅任教授
文學博士
谷本富氏講演會券
（金十錢）
◇八月十一日午後七時
◇遊樂館にて
主催 白水會 光明會

●**チラシより**

谷本博士講演會

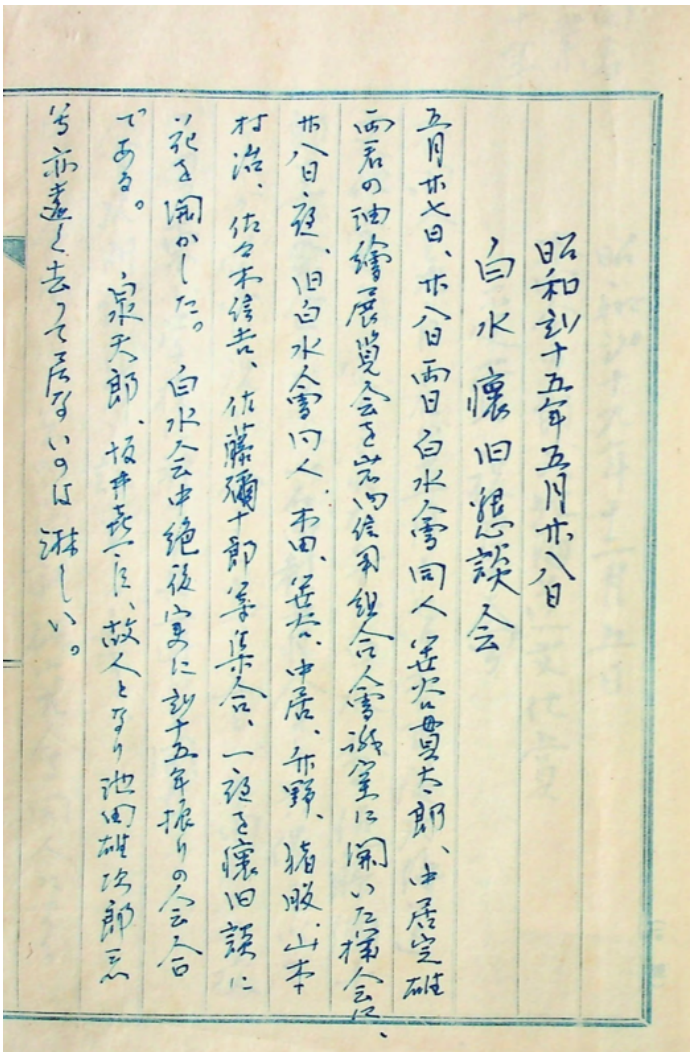
今日此頃のやきつくやうな暑さと、曇日のうつとうしさ
それは恰も日本精神界の現狀に似て居るではありませんか。
人々は胸のすくやうな一服の清涼劑と正しき指導者の出現を欲求して止みません。
此意味に於て私共は谷本博士を招請いたしまして左記に依り講演會を開きました。何卒皆樣の御後援と御來會を希望いたします。
期日——八月十一日午後七時
会場——遊樂館
講師——前京都帝國大學勅任教授　文学博士　谷本富※（ママ）氏
會券——金十銭
主催　白水會
光明會

●**講演会券より**

雄辯界の権威者
現代思想界の覇者
前京都帝國大学勅任教授
文學博士　谷本冨氏講演會券
（金十銭）
◇八月十一日午後七時
◇遊楽舘にて
主催　白水會
光明會

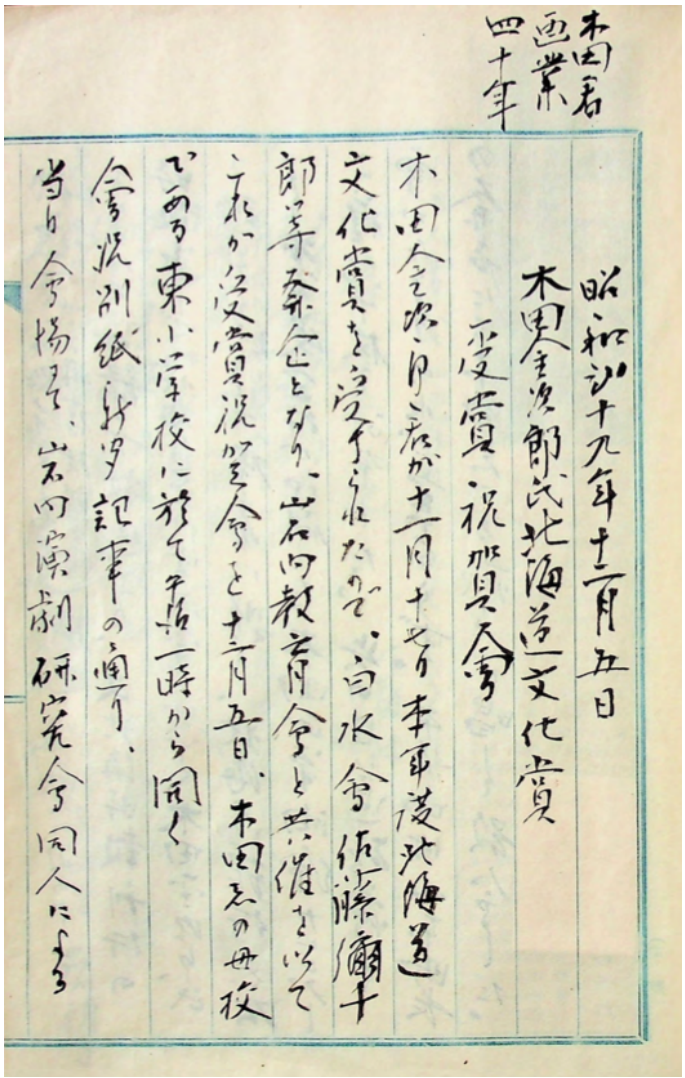
※「富」と「冨」が混在している

※以降、白水会の活動は中絶


昭和二十五年五月廿八日
白水懐旧懇談会
五月廿七日、廿八日両日白水會同人笹谷貫太郎、中居定雄両君の油繪展覧会を岩内信用組合會議室に開いた機会に、廿八日夜、旧白水會同人、木田、笹谷、中居、竹野、猪股、山本村治、佐々木信吉、佐藤彌十郎等集合、一夜を懐旧談に花を開かした。白水会中絶後実に弐十五年振りの会合である。泉天郎、坂井喜一郎、故人となり池田雄次郎君等亦遠く去って居ないのは淋しい。

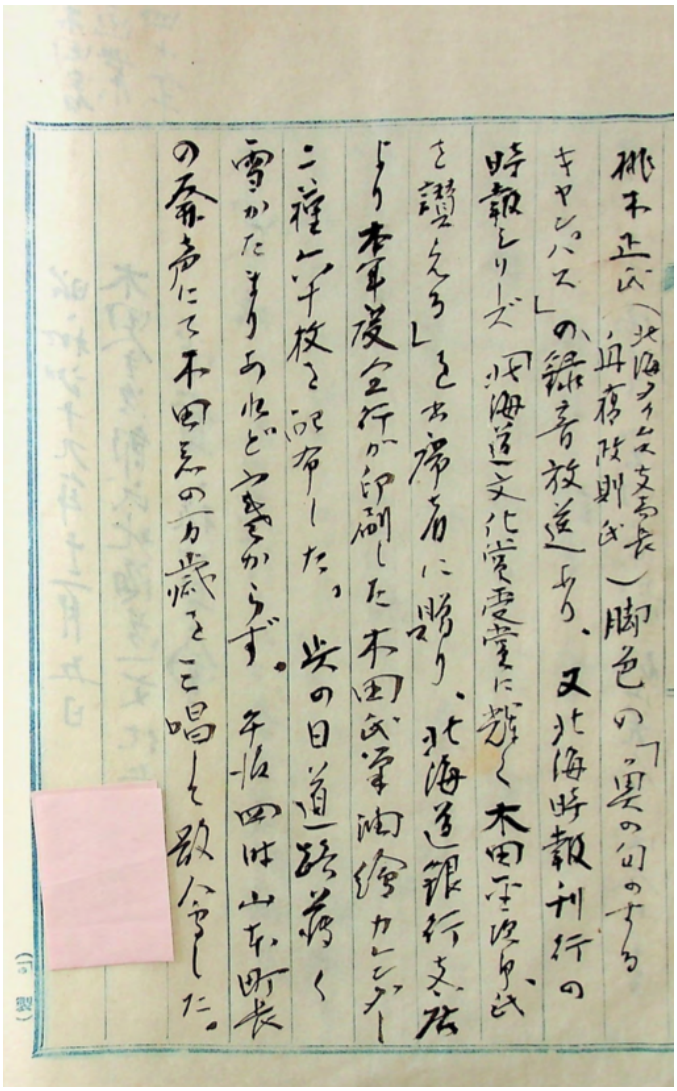
昭和二十五年五月二十八日
白水懐旧懇談会

五月二十七日、二十八日両日白水會同人笹谷貫太郎、中居定雄両君の油繪展覧会を岩内信用組合會議室に開いた機会に、二十八日夜、旧白水會同人、木田、笹谷、中居、竹野、猪股、山本村治、佐々木信吉、佐藤彌十郎等集合、一夜を懐旧談に花を開かした。白水会中絶後実に弐十五年振りの会合である。泉天郎、坂井喜一郎、故人となり池田雄次郎君等亦遠く去って居ないのは淋しい。

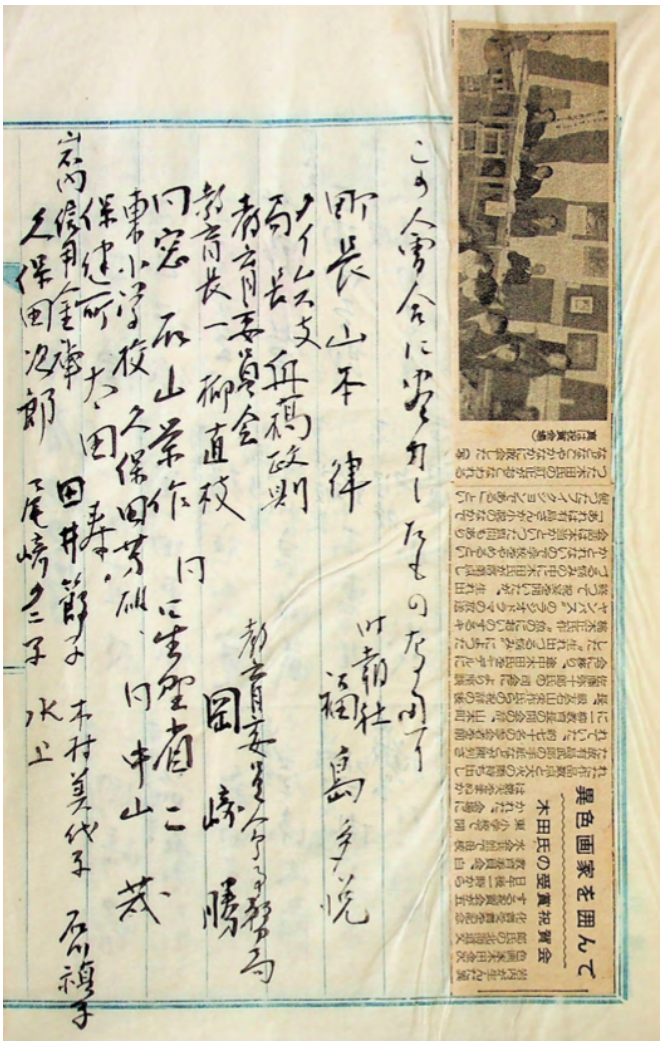


木田君画業四十年
昭和弐十九年十二月五日
木田金次郎氏北海道文化賞
受賞祝賀會

木田金次郎君が十一月十七日本年度北海道文化賞を受けられたので、白水會佐藤彌十郎等発企となり、岩内教育會と共催を以てこれが受賞祝賀會を十二月五日、木田君の母校である東小学校に於て午後一時から開く會況別紙新聞記事の通り、当日會場にて、岩内演劇研究會同人による桃木正氏（北海タイムス支局長舟橋政則氏）脚色の「魚の匂のするキャンパス」の録音放送あり、

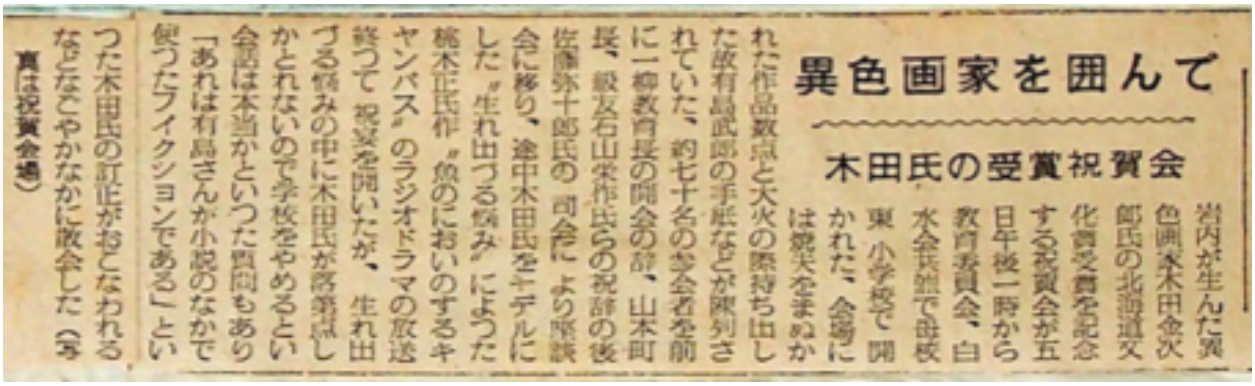


又北海時報刊行の時報シリーズ「北海道文化賞受賞に輝く木田金次郎氏を讃える」を出席者に贈り、北海道銀行支店より本年度全行が印刷した木田氏筆油繪カレンダー二種六十枚を配布した。此の日道路薄く雪かたまりあれど寒からず。午後四時山本町長の発声にて木田君の万歳を三唱して散會した。



この會合に參加したもの左の通り

町長　山本律　　時報社　福島多悦
タイムス支局長　舟橋政則
教育委員会教育長　一柳直枝　　教育委員會事務局　岡﨑勝
同窓　石山栄作　　同　星野省二
東小学校　久保田芳雄　　同　中山茂
保健所　太田寿
岩内信用金庫　久保田次郎　田井節子　木村美代子　石川禎子　尾﨑クニ子　水上



異色画家を囲んで

木田氏の受賞祝賀会

岩内が生んだ異色画家木田金次郎氏の北海道文化賞受賞を記念する祝賀会が五日午後一時から教育委員会、白水会共催で母校東小学校で開かれた、会場には焼失をまぬかれた作品数点と大火の際持ち出した故有島武郎の手紙などが陳列されていた、約七十名の参会者を前に一柳教育長の開会の辞、山本町長、級友石山栄作氏らの祝辞の後佐藤弥十郎氏の司会により座談会に移り、途中木田氏をモデルにした〝生れ出づる悩み〟によった桃木正氏作〝魚のにおいのするキャンバス〟のラジオドラマの放送終つて祝宴を開いたが、生れ出づる悩みの中に木田氏が落第点しかとれないので学校をやめるとい(う)※会話は本当かといった質問もあり「あれは有島さんが小説のなかで使ったフイクションである」といった木田氏の訂正がおこなわれるなどなごやかな(な)※かに散会した。(写真は祝賀会場)

●新聞記事から

異色画家を囲んで

木田氏の受賞祝賀会

岩内が生んだ異色画家木田金次郎氏の北海道文化賞受賞を記念する祝賀会が五日午後一時から教育委員会、白水会共催で母校東小学校で開かれた、会場には焼失をまぬかれた作品数点と大火の際持ち出した故有島武郎の手紙などが陳列されていた、約七十名の参会者を前に一柳教育長の開会の辞、山本町長、級友石山栄作氏らの祝辞の後佐藤弥十郎氏の司会により座談会に移り、途中木田氏をモデルにした〝生れ出づる悩み〟によった桃木正氏作〝魚のにおいのするキャンバス〟のラジオドラマの放送終つて祝宴を開いたが、生れ出づる悩みの中に木田氏が落第点しかとれないので学校をやめるとい(う)※会話は本当かといった質問もあり「あれは有島さんが小説のなかで使ったフイクションである」といった木田氏の訂正がおこなわれるなどなごやかな(な)※かに散会した。(写真は祝賀会場)

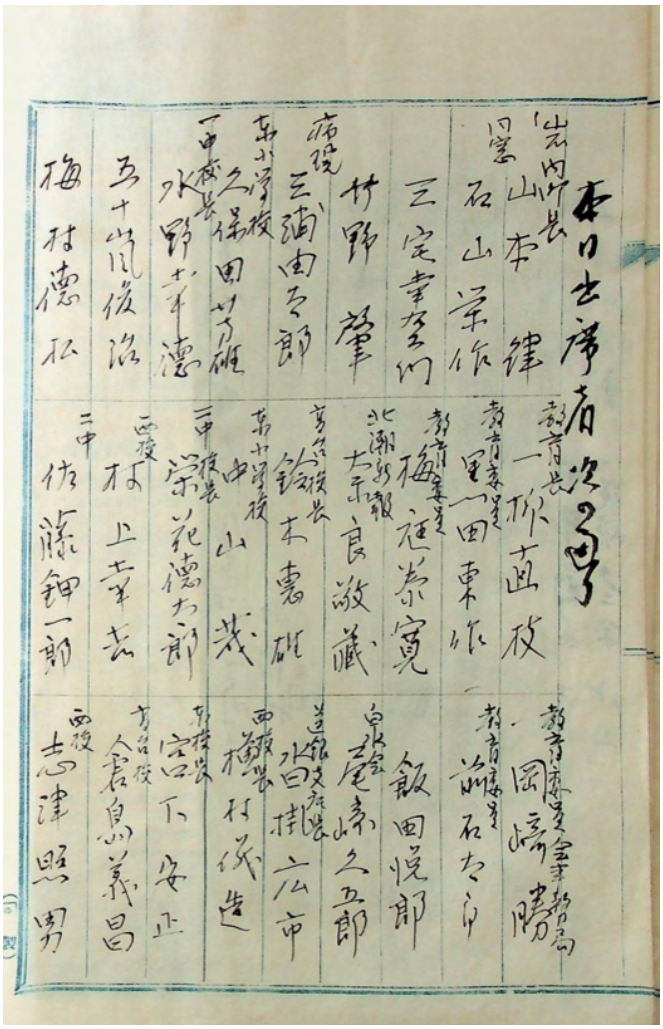
※2か所の括弧書きは記事で抜けている

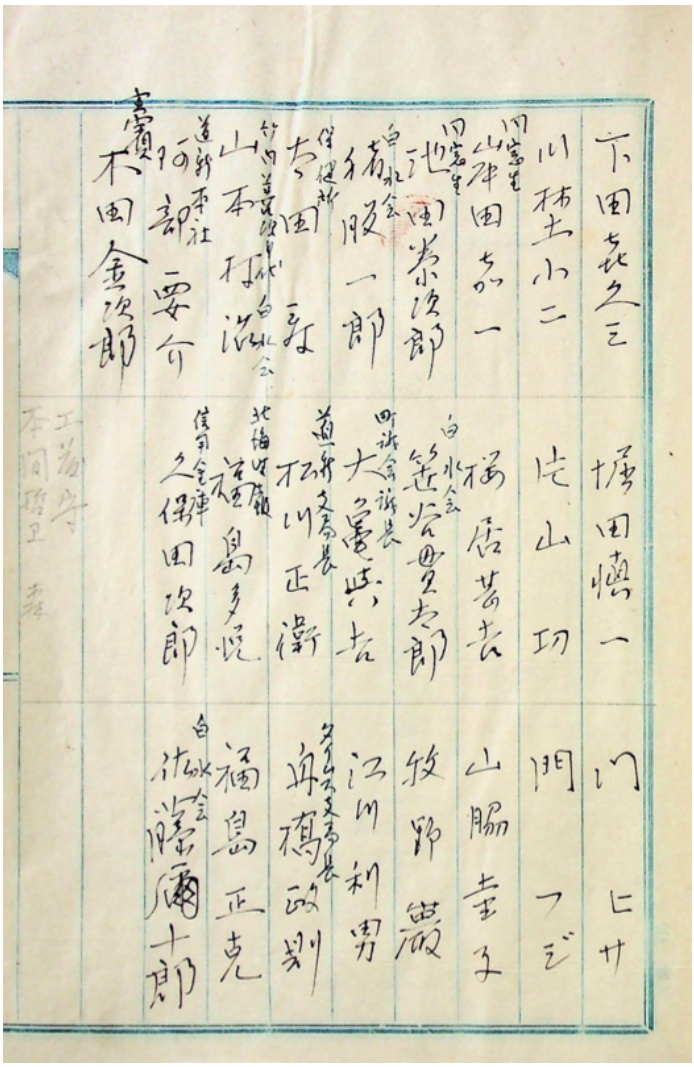
本日出席者次の通り

岩内町長　山本律
同窓　石山栄作
三宅幸右エ門
竹野肇
病院　三浦由太郎
東小学校　久保田芳雄
一中校長　水野幸徳
五十嵐俊治
梅村徳松

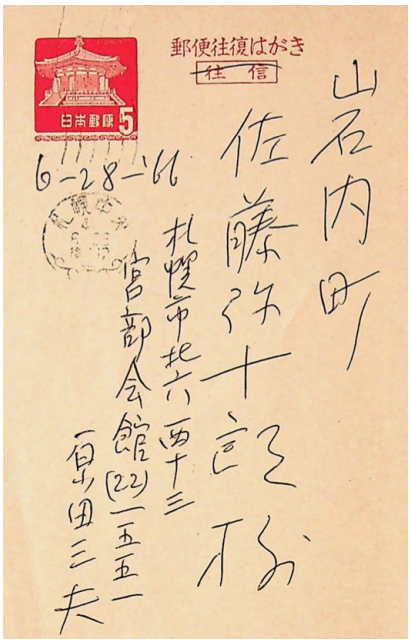
教育長　一柳直枝
教育委員　黒田東作
教育委員　梅庭泰寛
北潮新報　奈良敬蔵
高台校長　鈴木惠雄
東小学校　中山茂
二中校長　栄花徳太郎
西校　村上幸吉
二中　佐藤鉀一郎

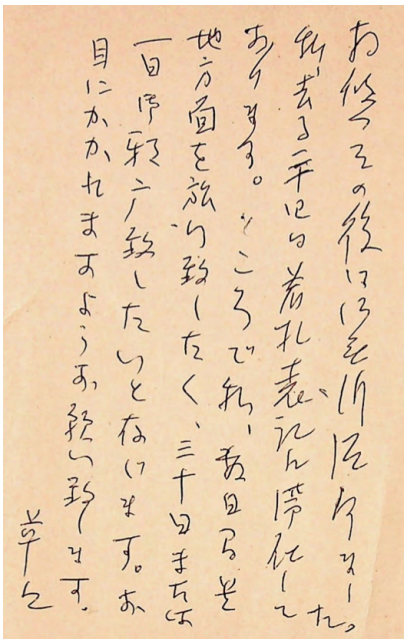
教育委員会事務局　岡崎勝
教育委員　前石太郎
飯田悦郎
白水会　尾崎久五郎
道銀支店長　沓掛広市
西校長　横村儀造
東校長　宮下安正
高台校　倉島義昌
西校　志津照男





下田喜久三　堀田慎一　門ヒサ
川埜小二　片山功　門フジ
同窓生　岸田嘉一　桜居甚吉　山脇幸子
同窓生　池田泰次郎　白水会　笹谷貫太郎　牧野巌
白水会　猪股一郎　町議会議長　大亀與吉　江川利男
保健所　太田寿　道新支局長　松川正衛　タイムス支局長　舟橋政則
竹内善次郎代白水会　山本村治　北海時報　福島多悦　福島正克
道新本社　阿部要介　信用金庫　久保田次郎　白水会　佐藤彌十郎
主賓　木田金次郎

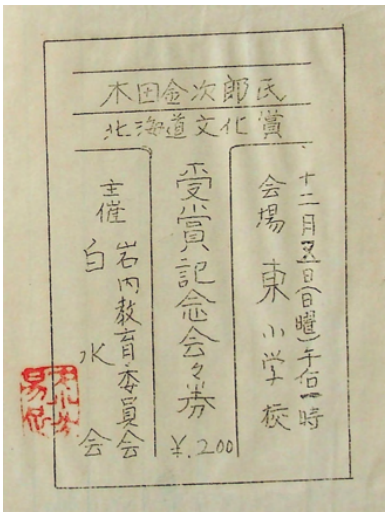




原田三夫氏より佐藤弥十郎に宛てた葉書
１９６６年６月28日付

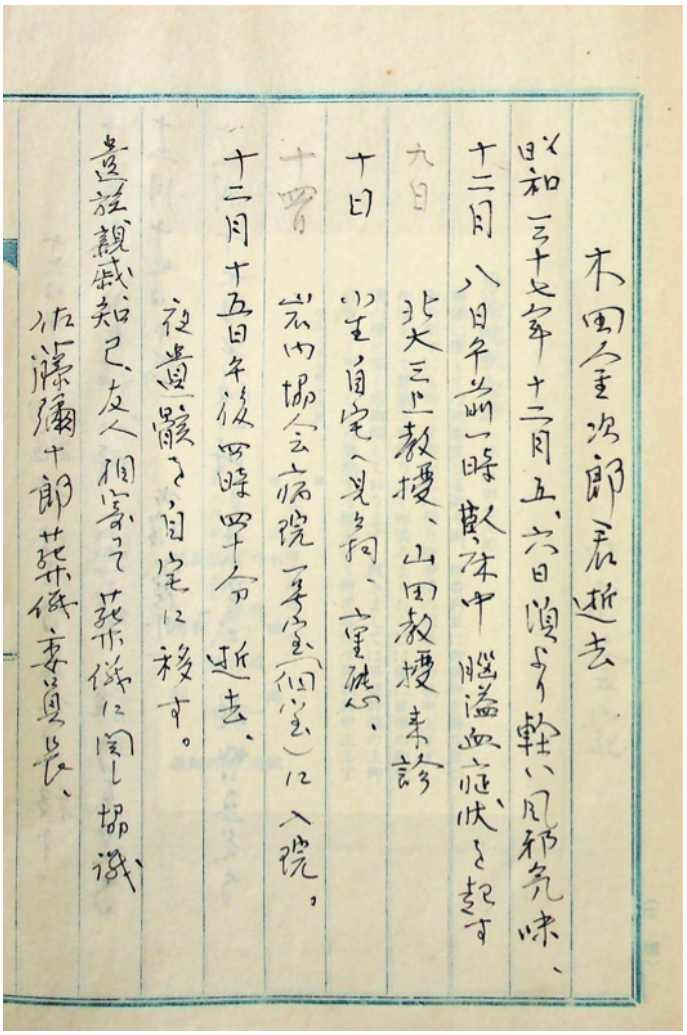
岩内町
佐藤弥十郎様
札幌市北六西十三
宮部会館(22)一五五一
原田三夫

前略その後は御無沙汰致しました。
私去る二十四日着札表記に滞在しております。ところで私、数日
間貴地方面を旅行致したく、三十日または一日御邪魔致したい
と存じます。お目にかかれますようお願い致します。
草々



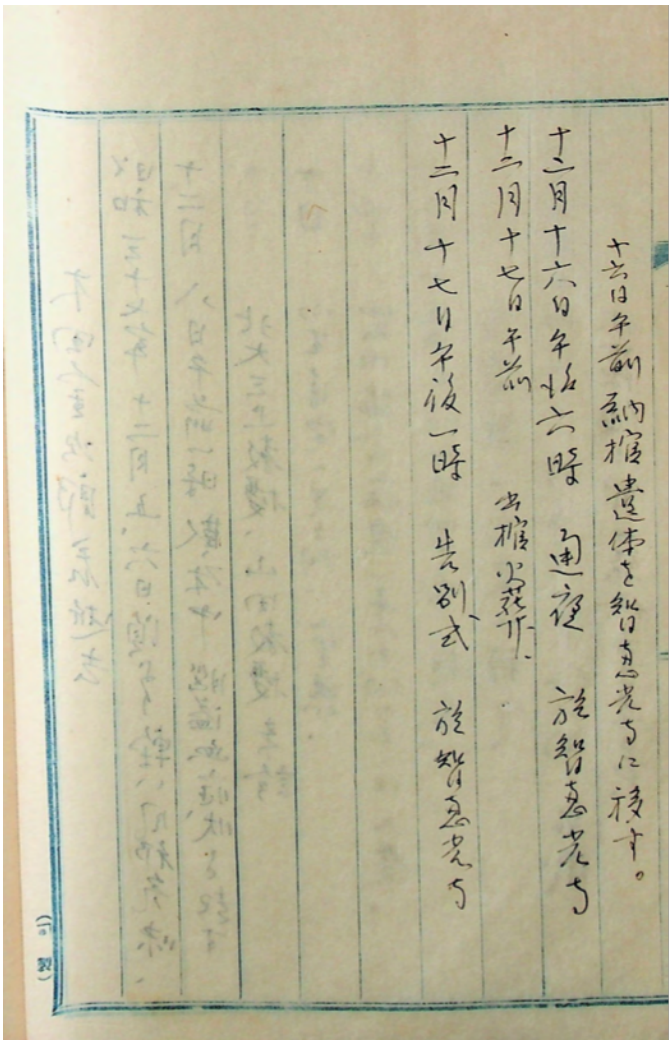
●受賞記念会チケットより

木田金次郎氏　北海道文化賞受賞
十二月五日（日曜）午后一時
会場　東小学校
受賞記念会々券　￥２００
主催　岩内教育委員会
白水会

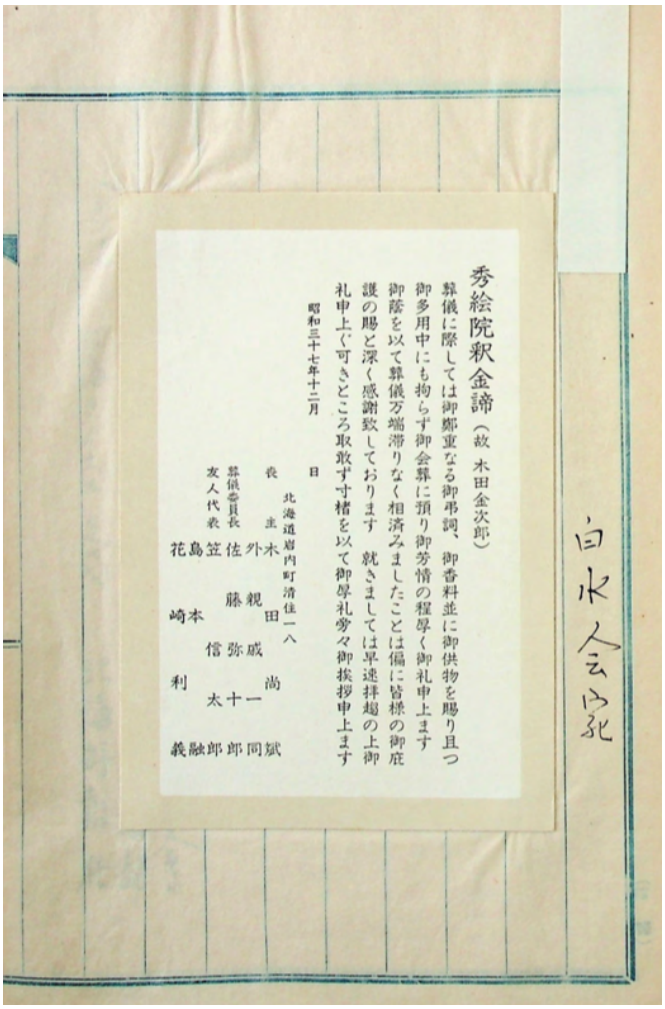


木田金次郎君逝去

昭和三十七年十二月五、六日頃より軽い風邪気味、
十二月八日午前一時臥床中脳溢血症状を起す
九日　北大三上教授、山田教授来診
十日　小生自宅へ見舞、重態、
十四日　岩内協会病院一号室（個室）に入院、
十二月十五日午後四時四十分　逝去、
夜遺骸を自宅に移す。
遺族、親戚、知己、友人相寄って葬儀に関し協議
佐藤彌十郎葬儀委員長、



十六日午前納棺　遺体を智恵光寺に移す。
十二月十六日午後六時　通夜　於智恵光寺
十二月十七日午前　出棺火葬
十二月十七日午後一時　告別式　於智恵光寺



●白水会宛

秀絵院釈金諦（故　木田金次郎）

葬儀に際しては御鄭重なる御弔詞、御香料並に御供物を賜り且つ御多用中にも拘らず御会葬に預り御芳情の程厚く御礼申上ます

御蔭を以て葬儀万端滞りなく相済みましたことは偏に皆様の御庇護の賜と深く感謝致しております

就きましては早速拝趨の上御礼申上ぐ可きところ取敢ず寸楮を以て御厚礼旁々御挨拶申上ます

昭和三十七年十二月　日

北海道岩内町清住一八
喪主　木田尚斌
外親戚一同
佐藤弥十郎
葬儀委員長
笠信太郎
友人代表
島本融
花崎利義

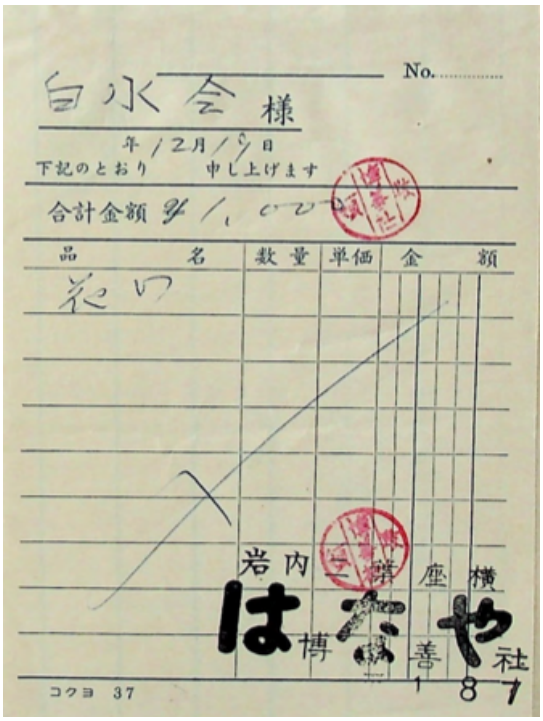
●花屋の請求書より

白水会　様　１２月１９日

合計金額　￥１，０００

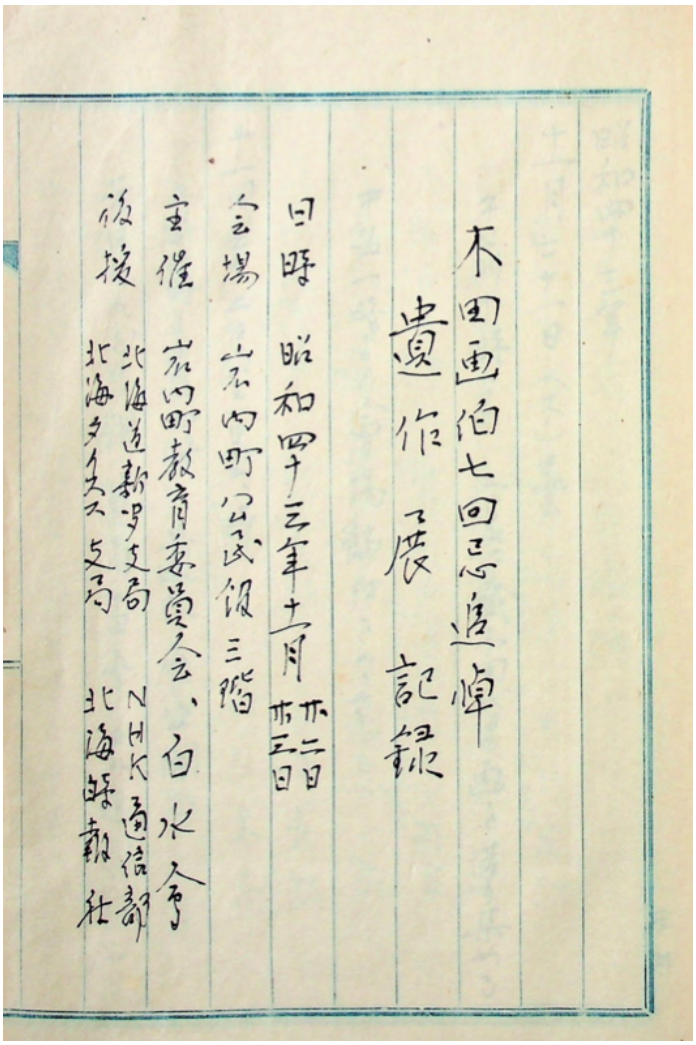
品名　花ワ

岩内二葉座横　はなや　博善社

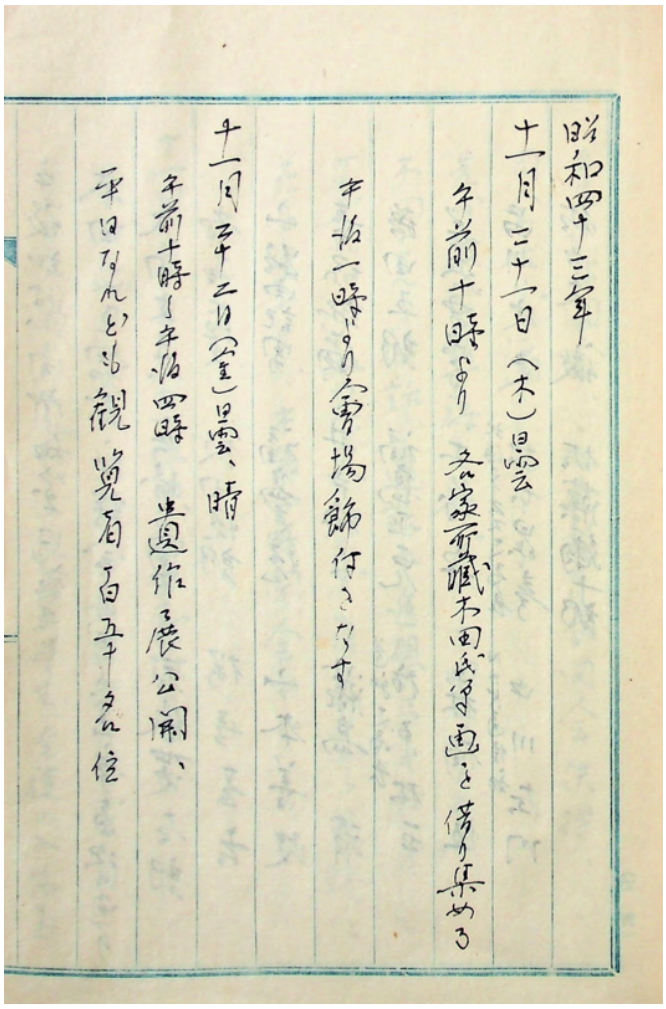


木田画伯七回忌追悼
遺作展※　記録

日時　昭和四十三年十一月二十二日、二十三日
会場　岩内町公民館三階
主催　岩内町教育委員会、白水會
後援　北海道新聞支局　NHK通信部　北海タイス（ママ）ス支局　北海時報社

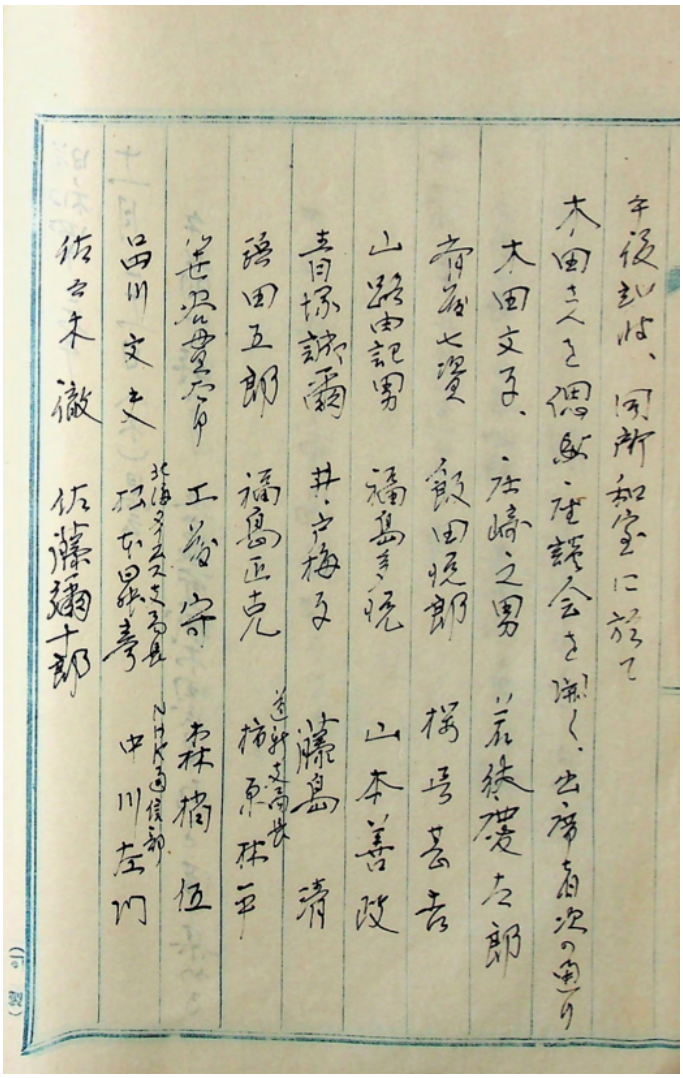


※木田金次郎画伯七回忌追悼遺作展が、白水会としての最後の活動となった。（岩内町郷土館展示パネルより）



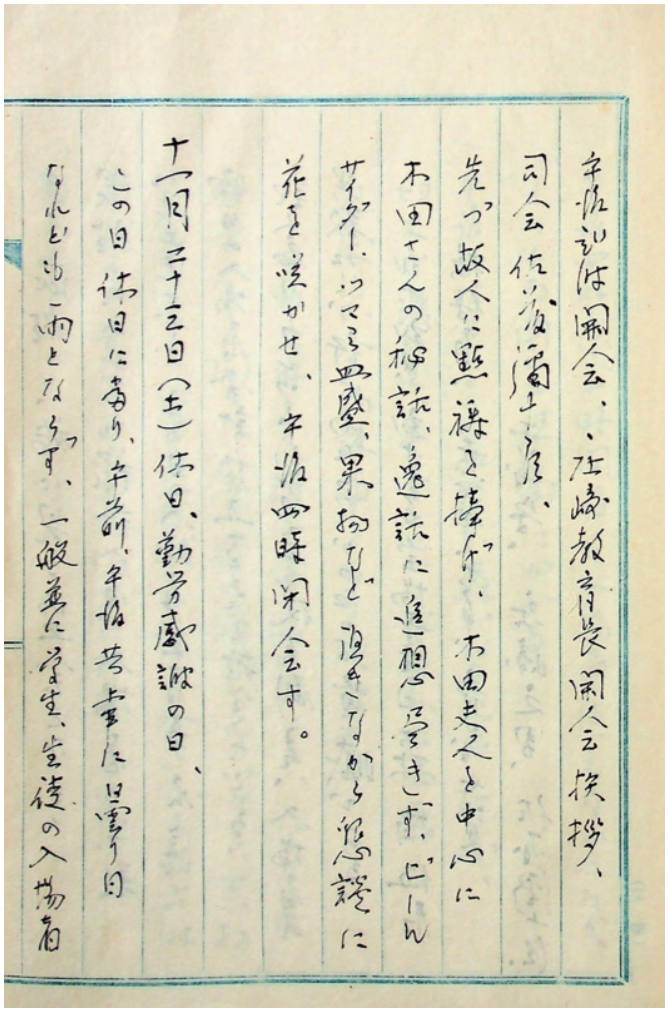
昭和四十三年

十一月二十一日（木）曇
午前十時より　各家所蔵木田氏原画を借り集める
午後一時より　會場飾付をなす
十一月二十二日（金）曇、晴
午前十時～午後四時　遺作展公開、
平日なれども観覧者百五十名位



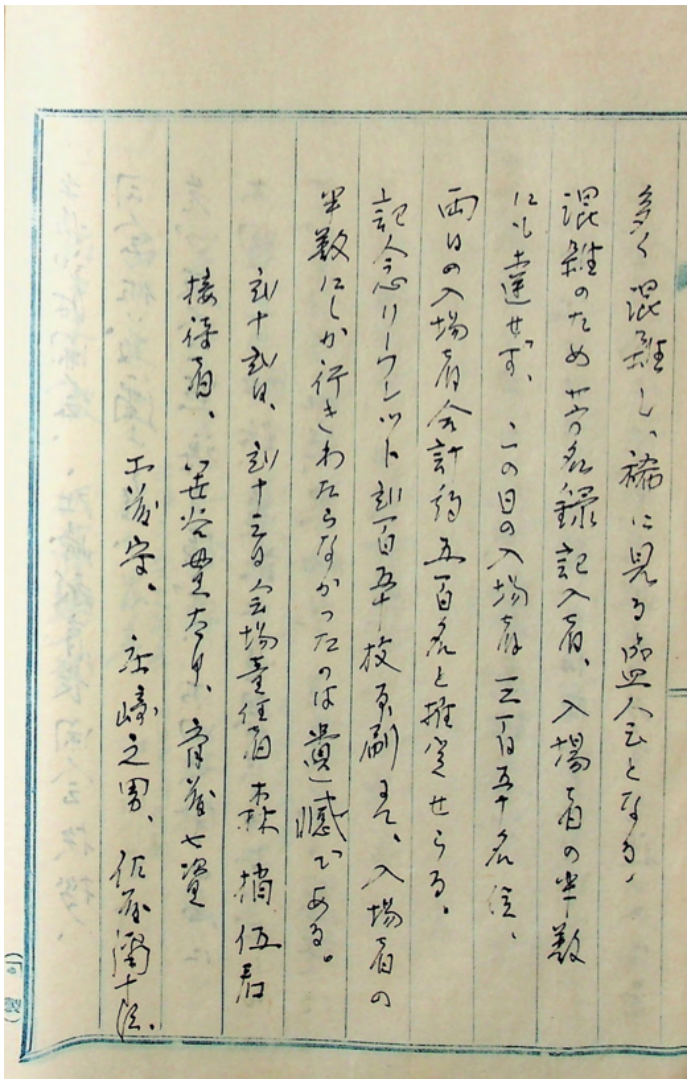
午後弐時、同所和室に於て
木田さんを偲ぶ座談会を開く、出席者次の通り

木田文子　庄﨑之男　若狭慶太郎
斉藤七資　飯田悦郎　桜居甚吉
山路由記男　福島多悦　山本善政
青塚誠爾　井戸梅子　藤島清
浜田五郎　福島正克　道新支局長柿原林平
笹谷貫太郎　工藤守　森梢伍
品川文夫　北海タイムス支局長松本昇彦　NHK通信部中川左門
佐々木徹　佐藤彌十郎



午後弐時開会、庄崎教育長開会挨拶、
司会佐藤彌十郎、
先づ故人に黙祷を捧げ、木田夫人を中心に木田さんの秘話、逸話に追想尽きず、ビール、サイダー、ツマミ皿盛、果物など頂きながら懇談に花を咲かせ、午後四時閉会す。

十一月二十三日（土）休日、勤労感謝の日
この日休日に當り、午前、午後共幸（さいわい）に曇り日なれども、雨とならず、一般並に学生、生徒の入場者多く　混雑し、稀に見る盛会となる、

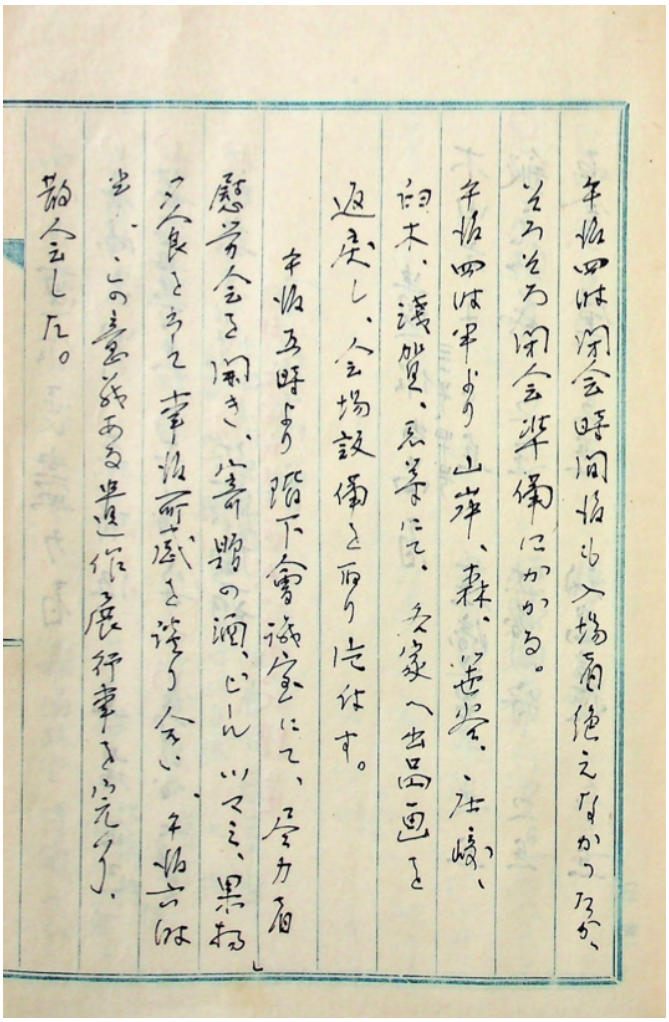


混雑のため芳名録記入者、入場者の半数にも達せず、この日の入場者三百五十名位、両日の入場者合計約五百名と推定せらる。

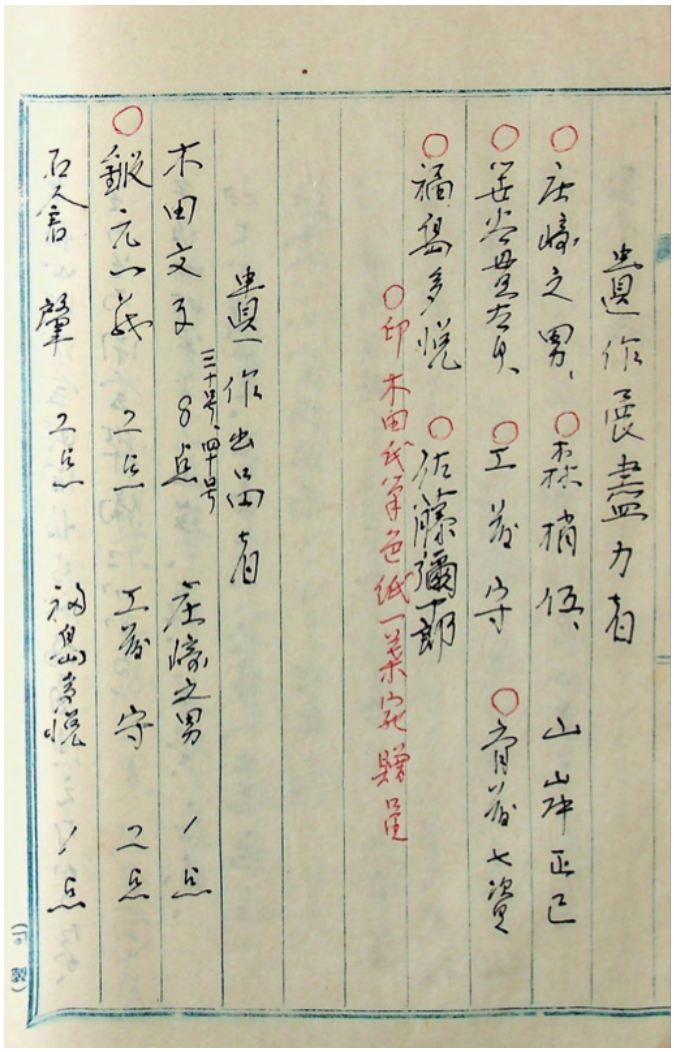
記念リーフレット弐百五十枚を刷って、入場者の半数にしか行きわたらなかったのは遺憾である。

弐十弐日、弐十三日　会場責任者　森梢伍君

接待者　笹谷貫太郎、斉藤七資、工藤守、庄﨑之男、佐藤彌十郎



午後四時閉会　時間後も入場者絶えなかったが、そろそろ閉会準備にかかる。
午後四時半より　山岸、森、笹谷、庄崎、臼木、浅賀、君等にて、各家へ出品画を返戻し、会場設備を取り片付す。
午後五時より階下會議室にて、尽力者慰労会を開き、寄贈の酒、ビール、ツマミ、果物、夕食を出して事後所感を談り合い、午後六時半、この意義ある遺作展行事を完了、散会した。

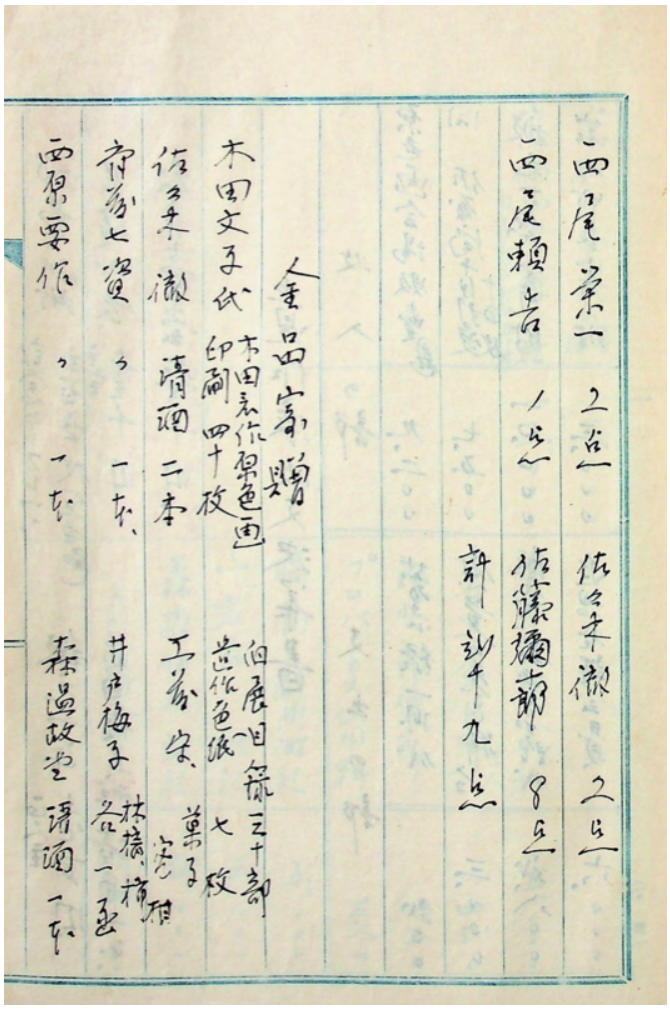


●**遺作展盡力者**

○庄﨑之男、　○森梢伍、　山岸正巳
○笹谷貫太郎、　○工藤守　○斉藤七資
○福島多悦　○佐藤彌十郎
○印　木田氏筆色紙一葉宛贈呈

●**遺作出品者**

木田文子　8点（三十号、四十号）
○鍛元一義　2点　庄﨑之男　1点
石倉肇　2点　工藤守　2点
福島多悦　1点

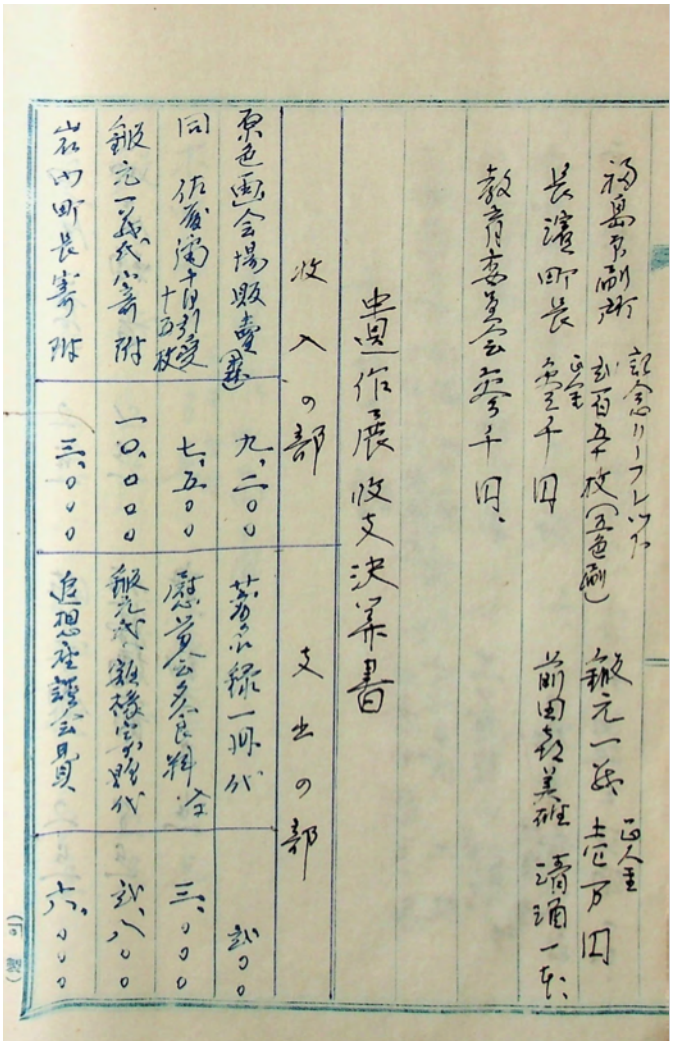


西尾栄一　２点　佐々木徹　２点
西尾頼吉　１点　佐藤彌十郎　８点
計　弐十九点

●金品寄贈

木田文子氏　木田君作原色画印刷四十枚　個展目録三十部　遺作色紙七枚
佐々木徹　清酒二本　工藤守　菓子　蜜柑
斉藤七資　〃一本　井戸梅子　林檎、柿　各一函
西原要作　〃一本　森温故堂　清酒一本

福島印刷所　記念リーフレット弐百五十枚（五色刷）　鍛元一義　正金壱万円
長濱町長　正金参千円　前田喜美雄　清酒一本
教育委員会　参千円



●遺作展収支決算書

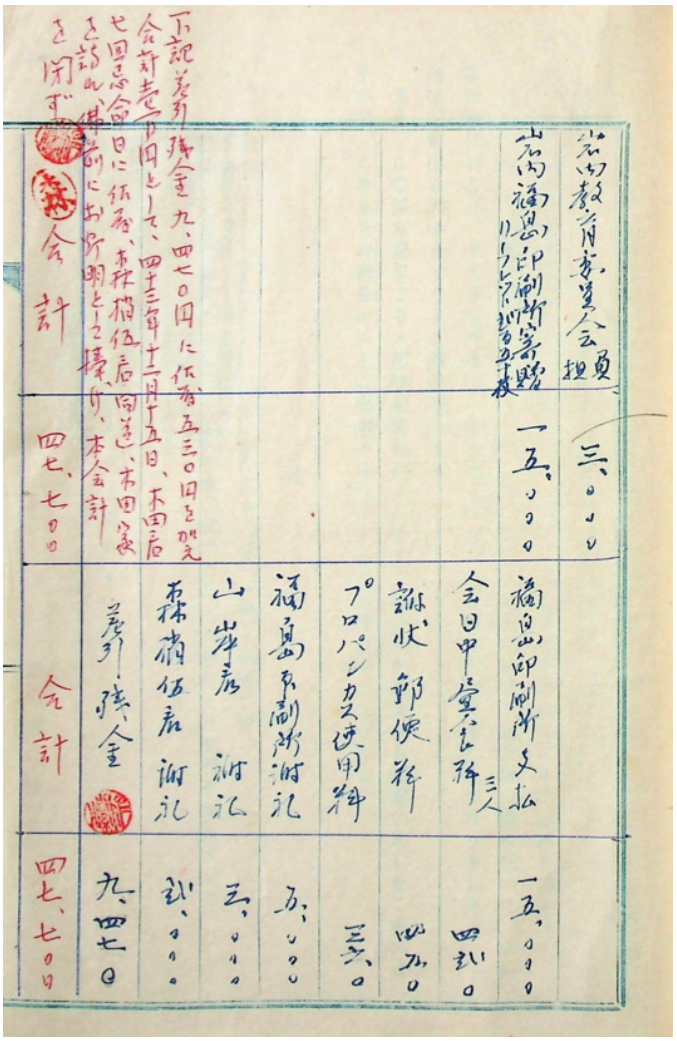
収入の部

原色画会場販売（森）	九，二〇〇
同佐藤彌十郎引受十五枚	七，五〇〇
鍛元一義氏寄附	一〇，〇〇〇
岩内町長寄附	三，〇〇〇

支出の部

芳名録一冊分	弐〇〇
慰労会夕食料　仝※	三，〇〇〇
鍛元氏へ額椽寄贈代	弐，八〇〇
追想座談会費	六，〇〇〇

※工藤與惣吉の開いた料亭「宇乾世」の「いりかせ」の屋号で、「入」の下に「工」。店主工藤守は同人誌『岩内ペン』の会員。

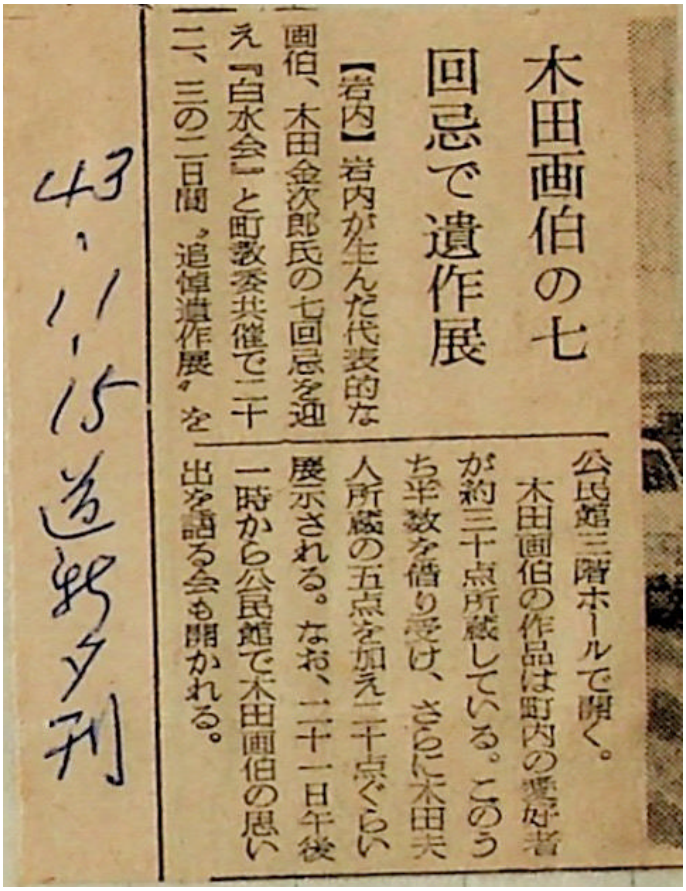


岩内教育委員会負担　三，〇〇〇
岩内福島印刷所寄贈リーフレット弐百五十枚　一五，〇〇〇

福島印刷所支払　一五，〇〇〇
会日中昼食料三人　四弐〇
謝状　郵便料　四五〇
ﾌﾟﾛﾊﾟﾝｶｽ(ママ)ｽ使用料　三六〇
福島印刷所謝礼　五，〇〇〇
山岸君謝礼　三，〇〇〇
森梢伍君謝礼　弐，〇〇〇
差引残金　九，四七〇
合　計　四七，七〇〇

合　計　四七，七〇〇

下記差引残金九，四七〇円に佐藤五三〇円を加え、合計壱万円として、四十三年十二月十五日、木田君七回忌命日に佐藤、森梢伍君同道、木田家を訪れ、佛前にお灯明として捧げ、本会計を閉ず



木田画伯の七回忌で遺作展

【岩内】岩内が生んだ代表的な画伯、木田金次郎氏の七回忌を迎え『白水会』と町教委共催で二十二、三の二日間〝追悼遺作展〟を公民館三階ホールで開く。木田画伯の作品は町内の愛好者が約三十点所蔵している。このうち半数を借り受け、さらに木田夫人所蔵の五点を加え二十点ぐらい展示される。なお、二十一日午後一時から公民館で木田画伯の思い出を語る会も開かれる。

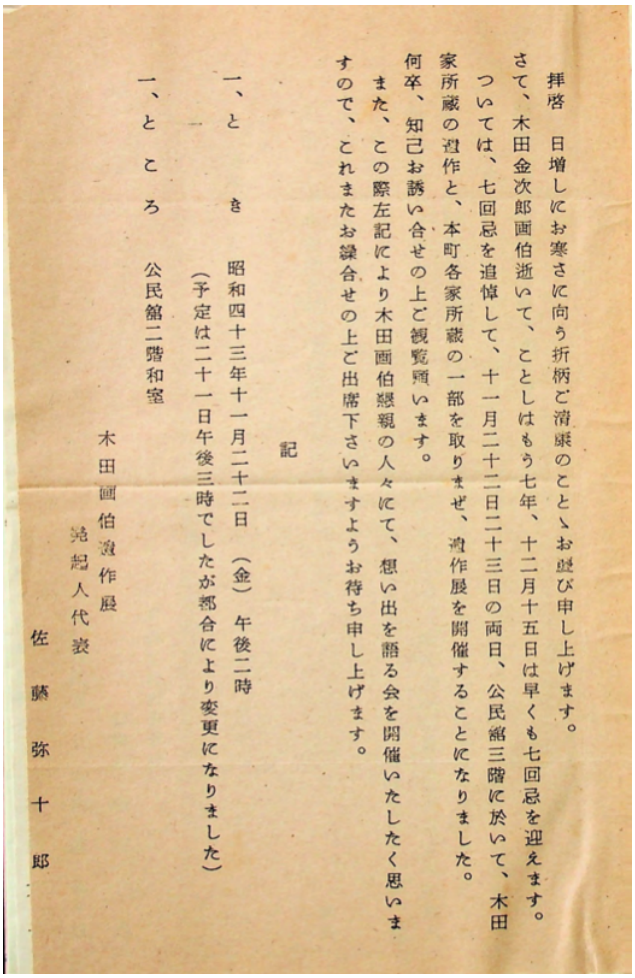
43.11.15 道新夕刊

●新聞記事より（43.11.15 道新夕刊）

木田画伯の七回忌で遺作展

【岩内】岩内が生んだ代表的な画伯、木田金次郎氏の七回忌を迎え『白水会』と町教委共催で二十二、三の二日間〝追悼遺作展〟を公民館三階ホールで開く。

木田画伯の作品は町内の愛好者が約三十点所蔵している。このうち半数を借り受け、さらに木田夫人所蔵の五点を加え二十点ぐらい展示される。なお、二十一日午後一時から公民館で木田画伯の思い出を語る会も開かれる。



拝啓　日増しにお寒さに向う折柄ご清康のこととお慶び申し上げます。
さて、木田金次郎画伯逝いて、ことしはもう七年、十二月十五日は早くも七回忌を迎えます。
ついては、七回忌を追悼して、十一月二十二日二十三日の両日、公民舘三階に於いて、木田家所蔵の遺作と、本町各家所蔵の一部を取りまぜ、遺作展を開催することになりました。
何卒、知己お誘い合せの上ご観覧頂います。
また、この際左記により木田画伯懇親の人々にて、想い出を語る会を開催いたしたく思いますので、これまたお繰合せの上ご出席下さいますようお待ち申し上げます。

記

一、とき　昭和四十三年十一月二十二日（金）午後二時
（予定は二十一日午後三時でしたが都合により変更になりました）
一、ところ　公民舘二階和室

木田画伯遺作展
発起人代表
佐藤弥十郎

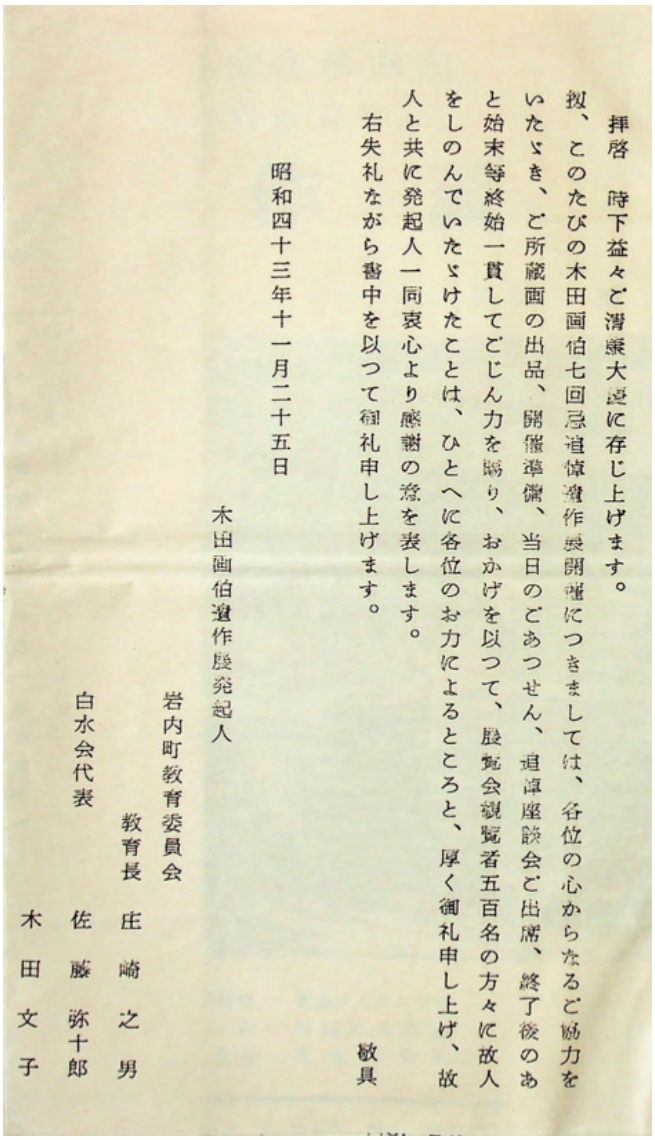
●お誘いの挨拶状

拝啓　日増しにお寒さに向う折柄ご清康のこととお慶び申し上げます。
さて、木田金次郎画伯逝いて、ことしはもう七年、十二月十五日は早くも七回忌を迎えます。
ついては、七回忌を追悼して、十一月二十二日二十三日の両日、公民舘三階に於いて、木田家所蔵の遺作と、本町各家所蔵の一部を取りまぜ、遺作展を開催することになりました。
何卒、知己お誘い合せの上ご観覧願います。
また、この際左記により木田画伯懇親の人々にて、想い出を語る会を開催いたしたく思いますので、これまたお繰合せの上ご出席下さいますようお待ち申し上げます。

記

一、とき　昭和四十三年十一月二十二日（金）午後二時
（予定は二十一日午後三時でしたが都合により変更になりました）
一、ところ　公民舘二階和室

木田画伯遺作展
発起人代表
佐藤弥十郎



拝啓　時下益々ご清康大慶に存じ上げます。
扨、このたびの木田画伯七回忌追悼遺作展開催につきましては、各位の心からなるご協力をいたゞき、ご所蔵画の出品、開催準備、当日のごあつせん、追悼座談会ご出席、終了後のあと始末等終始一貫してごじん力を賜り、おかげを以つて、展覧会観覧者五百名の方々に故人をしのんでいたゞけたことは、ひとへに各位のお力によるところと、厚く御礼申し上げ、故人と共に発起人一同衷心より感謝の意を表します。
右失礼ながら書中を以つて御礼申し上げます。

敬具

昭和四十三年十一月二十五日

木田画伯遺作展発起人
岩内町教育委員会
教育長　庄崎之男
白水会代表　佐藤弥十郎
木田文子

●お礼の挨拶状

拝啓　時下益々ご清康大慶に存じ上げます。
扨※、このたびの木田画伯七回忌追悼遺作展開催につきましては、各位の心からなるご協力をいただき、ご所蔵画の出品、開催準備、当日のごあつせん、追悼座談会ご出席、終了後のあと始末等終始一貫してごじん力を賜り、おかげを以つて、展覧会観覧者五百名の方々に故人をしのんでいただけたことは、ひとへに各位のお力によるところと、厚く御礼申し上げ、故人と共に発起人一同衷心より感謝の意を表します。
右失礼ながら書中を以って御礼申し上げます。

敬具

昭和四十三年十一月二十五日

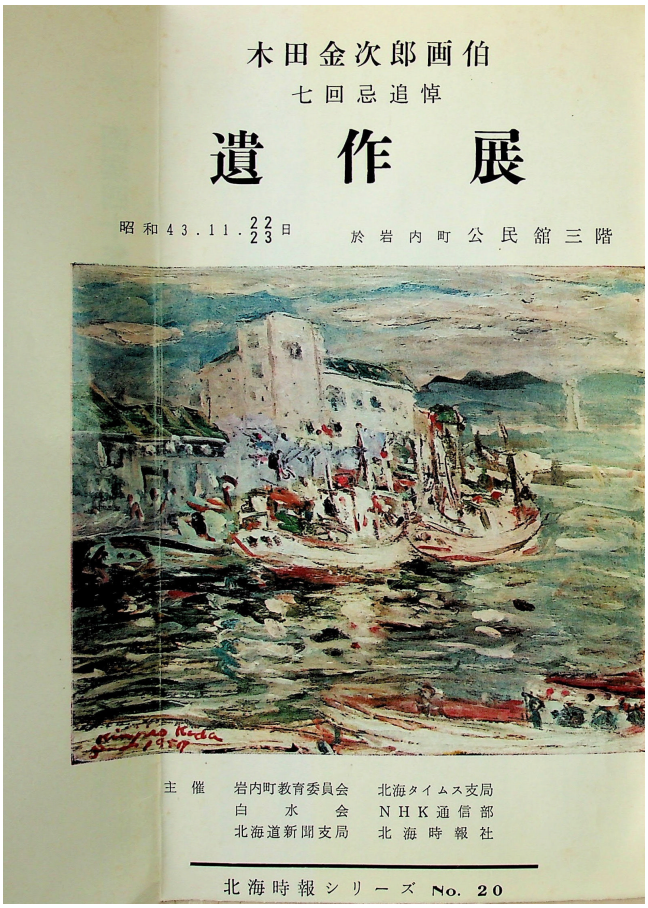
木田画伯遺作展発起人
岩内町教育委員会教育長　庄崎之男
白水会代表　佐藤弥十郎
木田文子

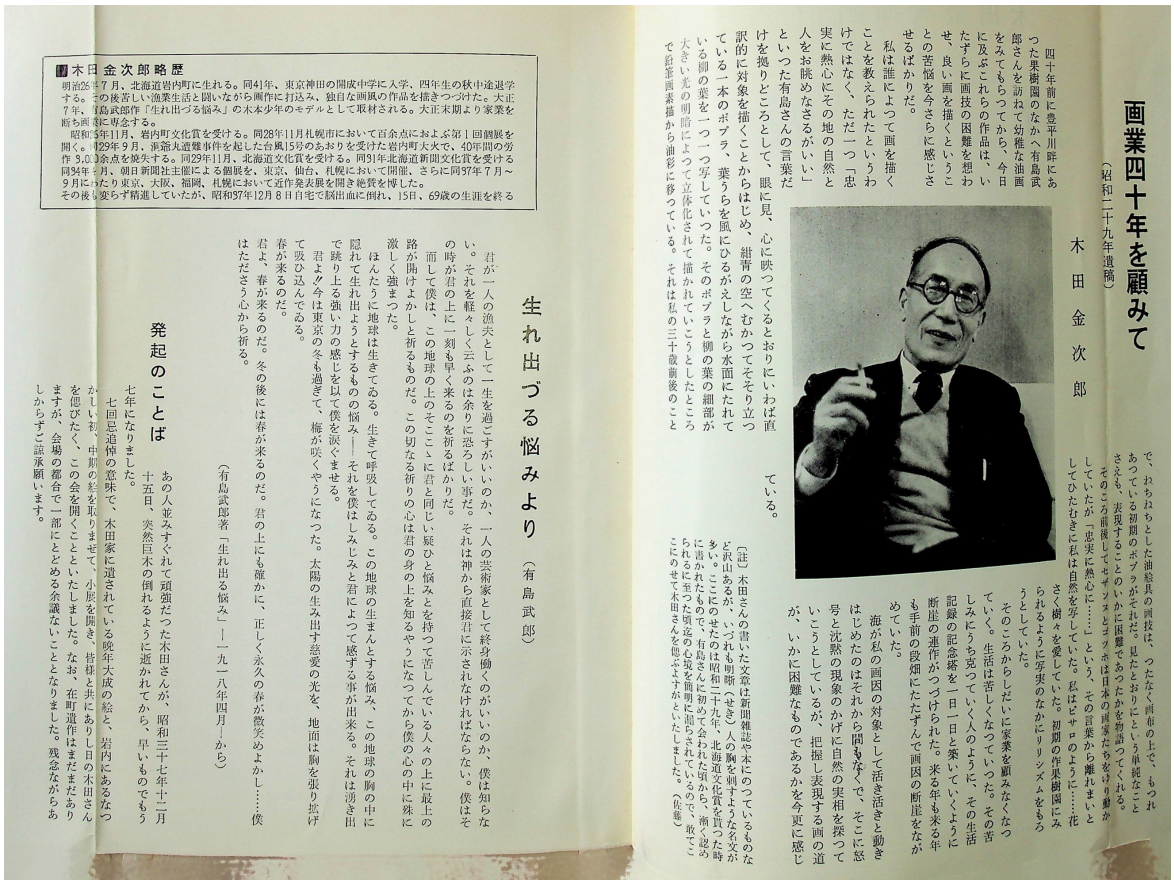
※扨（さて）

●記念リーフレットより

木田金次郎画伯七回忌追悼
遺作展

昭和 43. 11. 22-23 日
於岩内町公民舘三階
主催　岩内町教育委員会
　　白水会
　　北海道新聞支局
　　北海時報シリーズ NO. 20
　　北海タイムス支局
　　NHK 通信部
　　北海時報社





画業四十年を顧みて

（昭和二十九年遺稿）

木田金次郎

四十年前に豊平川畔にあつた果樹園のなかへ有島武郎さんを訪ねて幼稚な油画をみてもらつてから、今日に及ぶこれらの作品は、いたずらに画技の困難を想わせ、良い画を描くということの苦悩を今さらに感じさせるばかりだ。

私は誰によつて画を描くことを教えられたというわけではなく、ただ一つ「忠実に熱心にその地の自然と人をお眺めなさるがいい」といつた有島さんの言葉だけを拠りどころとして、眼に見、心に映つてくるとおりにいわば直訳的に対象を描くことからはじめ、紺青の空へむかつてそそり立つている一本のポプラ、葉うらを風にひるがえしながら水面にたれている柳の葉を一つ一つ写していつた。そのポプラと柳の葉の細部が大きい光の明暗によつて立体化されて描かれていこうとしたところで鉛筆画素描から油彩に移つている。それは私の三十歳前後のことで、ねちねちとした油絵具の画技は、つたなく画布の上で、もつれあつている初期のポプラがそれだ。見たとおりにという単純なことさえも、表現することのいかに困難であつたかを物語つてくれる。

そのころ前後してセザンヌとゴツホは日本の画家たちをゆり動かしていたが「忠実に熱心に……」という、その言葉から離れまいとしてひたむきに私は自然を写していた。私はピサロのように……花さく樹々を愛していた。初期の作果樹園にみられるように実のなかにリリシズムをもろうとしていた。

そのころからしだいに家業を顧みなくなつていく。生活は苦しくなつていつた。その苦しみにうち克つていく人のように、その生活記録の記念塔を一日一日と築いていくように断崖の連作がつづけられた。来る年も来る年も手前の段畑にたたずんで画因の断崖をながめていた。

海が私の画因の対象として活き活きと動きはじめたのはそれから間もなくで、そこに怒号と沈黙の現象のかげに自然の実相を探つていこうとしているが、把握し表現する画の道が、いかに困難なものであるかを今更に感じている。

（注）木田さんの書いた文章は新聞雑誌や本につているものなど沢山あるが、いづれも明瞭（せき）人の胸を刺すような名文が多い。これこそこの世たのは昭和二十九年、北海道文化賞を貰つた時に書いたもので、有島さんに初めて会われた頃から、漸く認められるに至つた心境を簡明に綴られているので、敢てここにのせて木田さんを偲ぶよすがとしました。（佐藤）

木田金次郎略歴

明治26年7月、北海道岩内町に生れる。同41年、東京神田の開成中学に入学、四年生の秋中途退学する。その後苦しい漁業生活と闘いながら画作に打込み、独自な画風の作品を描きつづけた。大正7年、有島武郎作「生れ出づる悩み」の木本少年のモデルとして取材される。大正末期より家業を断ち画業に専念する。

昭和5年11月、岩内町文化賞を受ける。同28年11月札幌市において百余点におよぶ第1回個展を開く。同29年9月、洞爺丸遭難事件を起した台風15号のあおりを受けた岩内町大火で、40年間の労作3,000余点を焼失する。同29年11月、北海道文化賞を受ける。同31年北海道新聞文化賞を受ける。同34年2月、朝日新聞社主催による個展を、東京、仙台、札幌において開催、さらに同37年7月～9月にわたり東京、大阪、福岡、札幌において近作発表展を開き絶賛を博した。

その後も変らず精進していたが、昭和37年12月8日自宅で脳出血に倒れ、15日、69歳の生涯を終る

生れ出づる悩みより

（有島武郎）

君が一人の漁夫として一生を過ごすがいいのか、一人の芸術家として終身働くのがいいのか、僕は知らない。それを軽々しく云ふのは余りに恐ろしい事だ。それは神から直接君に示されなければならない。僕はその時が君の上に一刻も早く来るのを祈るばかりだ。

而して僕は、この地球の上のそこここに君と同じい runひと悩みとを持つて苦しんでいる人々の上に最上の路が開けよかしと祈るものだ。この切なる祈りの心は君自身の上を知るやうになつてから僕の心の中に殊に激しく強まつた。

ほんたうに地球は生きてゐる。生きて呼吸してゐる。この地球の生まんとする悩み、この地球の胸の中に隠れて生れ出ようとするものの悩み――それを僕はしみじみと君によつて感ずる事が出来る。それは湧き出で跳り上る強い力の感じを以て僕を涙ぐませる。

君よ々々今は東京の冬も過ぎて、梅が咲くやうになつた。太陽の生み出す慈愛の光を、地面は胸を張り拡げて吸ひ込んでゐる。

春が来るのだ。

君よ、春が来るのだ。冬の後には春が来るのだ。君の上にも確かに、正しく永久の春が微笑めよかし……僕はたださう心から祈る。

（有島武郎著「生れ出る悩み」――一九一八年四月――から）

発起のことば

あの人並みすぐれて頑強だつた木田さんが、昭和三十七年十二月十五日、突然巨木の倒れるように逝かれてから、早いものでもう七年になりました。

七回忌追悼の意味で、木田家に遺されている晩年大成の絵と、岩内にあるなつかしい初、中期の絵を取りまぜて、小展を開き、皆様と共にありし日の木田さんを偲びたく、この会を開くことといたしました。なお、在町遺作はまだまだありますが、会場の都合で一部にとどめる次第ないことになりました。残念ながらあしからずご諒承願います。

画業四十年を顧みて（昭和二十九年遺稿）

木田金次郎

四十年前に豊平川畔にあつた果樹園のなかへ有島武郎さんを訪ねて幼稚な油画をみてもらつてから、今日に及ぶこれらの作品は、いたずらに画技の困難を想わせ、良い画を描くということの苦悩を今さらに感じさせるばかりだ。

私は誰によつて画を描くことを教えられたというわけではなく、ただ一つ「忠実に熱心にその地の自然と人をお眺めなさるがいい」といつた有島さんの言葉だけを拠りどころとして、眼に見、心に映つてくるとおりにいわば直訳的に対象を描くことからはじめ、紺青の空へむかつてそそり立つている一本のポプラ、葉うらを風にひるがえしながら水面にたれている柳の葉を一つ一つ写していつた。そのポプラと柳の葉の細部が大きい光の明暗によつて立体化されて描かれていこうとしたところで鉛筆画素描から油彩に移つている。それは私の三十歳前後のことで、ねちねちとした油絵具の画技は、つたなく画布の上で、もつれあつている初期のポプラがそれだ。見たとおりにという単純なことさえも、表現することのいかに困難であつたかを物語つてくれる。

そのころ前後してセザンヌとゴツホは日本の画家たちをゆり動かしていたが「忠実に熱心に……」という、その言葉から離れまいとしてひたむきに私は自然を写していた。私はピサロのように……花さく樹々を愛し

ていた。初期の作果樹園にみられるように写実の中にリリシズムをもろうとしていた。
そのころからしだいに家業を顧みなくなっていく。生活は苦しくなっていった。その苦しみにうち克っていく人のように、その生活記録の記念塔を一日一日と築いていくように断崖の連作がつづけられた。来る年も来る年も手前の段畑にたたずんで画因の断崖をながめていた。
海が私の画因の対象として活き活きと動きはじめたのはそれから間もなくで、そこに怒号と沈黙の現象のかげに自然の実相を探っていこうとしているが、把握し表現する画の道が、いかに困難なものであるかを今更に感じている。
〔註〕木田さんの書いた文章は新聞雑誌や本にのっているものなど沢山あるが、いづれも明晰（せき）人の胸を刺すような名文が多い。ここにのせたのは昭和二十九年、北海道文化賞を貰った時に書かれたもので、有島さんに初めて会われた頃から、漸く認められるに至った頃迄の心境を簡明に漏らされているので、敢てここにのせて木田さんを偲ぶよすがといたしました。（佐藤）

■木田金次郎略歴

明治26年7月、北海道岩内町に生れる。同41年、東京神田の開成中学に入学、四年生の秋中途退学する。その後苦しい漁業生活と闘いながら画作に打込み、独自な画風の作品を描きつづけた。大正7年、有島武郎作「生れ出づる悩み」の木本少年のモデルとして取材される。大正末期より家業を断ち画業に専念する。
昭和26年11月、岩内町文化賞を受ける。同28年11月札幌市において百余点に及ぶ第1回個展を開く。同29年9月、洞爺丸遭難事件を起した台風15号のあおりを受けた岩内町大火で、40年間の労作3,000余点を焼失する。同29年11月、北海道文化賞を受ける。同31年北海道新聞文化賞を受ける。同34年4月朝日新聞社主催による個展を、東京、仙台、札幌において開催、さらに同37年7月～9月にわたり東京、大阪、福岡、札幌において近作発表展を開き絶賛を博した。
その後も変らず精進していたが、昭和37年12月8日自宅で脳出血に倒れ、15日、69歳の生涯を終る

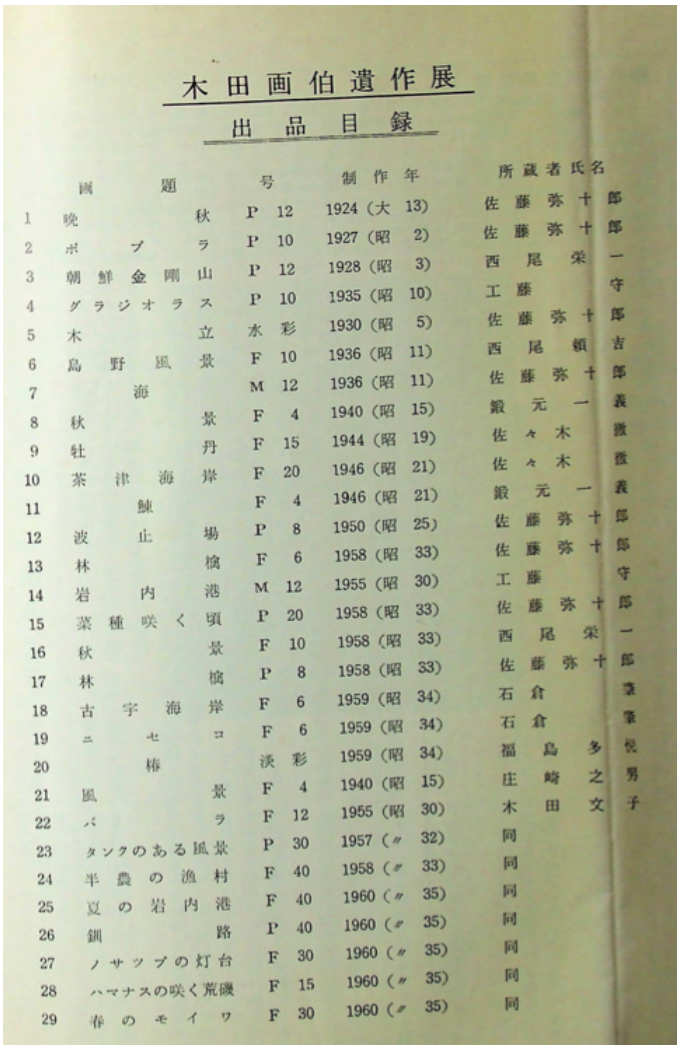
生れ出づる悩みより（有島武郎）

君が一人の漁夫として一生を過ごすがいいのか、一人の芸術家として終身働くのがいいのか、僕は知らない。それを軽々しく云ふのは余りに恐ろしい事だ。それは神から直接君に示されなければならない。僕はその時が君の上に一刻も早く来るのを祈るばかりだ。
而して僕は、この地球の上のそこここに君と同じい疑ひと悩みとを持つて苦しんでいる人々の上に最上の路が開けよかしと祈るものだ。この切なる祈りの心は君の身の上を知るやうになつてから僕の心の中に殊に激しく強まつた。
ほんたうに地球は生きてゐる。生きて呼吸してゐる。この地球の生まんとする悩み、この地球の胸の中に隠れて生れ出ようとするものの悩み―それを僕はしみじみと君によつて感ずる事が出来る。それは湧き出で跳り上る強い

力の感じを以て僕を涙ぐませる。
君よ‼今は東京の冬も過ぎて、梅が咲くやうになつた。太陽の生み出す慈愛の光を、地面は胸を張り拡げて吸ひ込んでゐる。
春が来るのだ。
君よ、春が来るのだ。冬の後には春が来るのだ。君の上にも確かに、正しく永久の春が微笑めよかし……僕はたださう心から祈る。
（有島武郎著「生れ出（ママ）る悩み」―一九一八年四月―から）

●発起のことば

あの人並みすぐれて頑強だった木田さんが、昭和三十七年十二月十五日、突然巨木の倒れるように逝かれてから、早いものでもう七年になりました。
七回忌追悼の意味で、木田家に遺されている晩年大成の絵と、岩内にあるなつかしい初、中期の絵を取りまぜて、小展を開き、皆様と共にありし日の木田さんを偲びたく、この会を開くこととといたしました。なお、在町遺作はまだまだありますが、会場の都合で一部にとどめる余議（ママ）ないこととなりました。残念ながらあしからずご諒承願います。



木田画伯遺作展

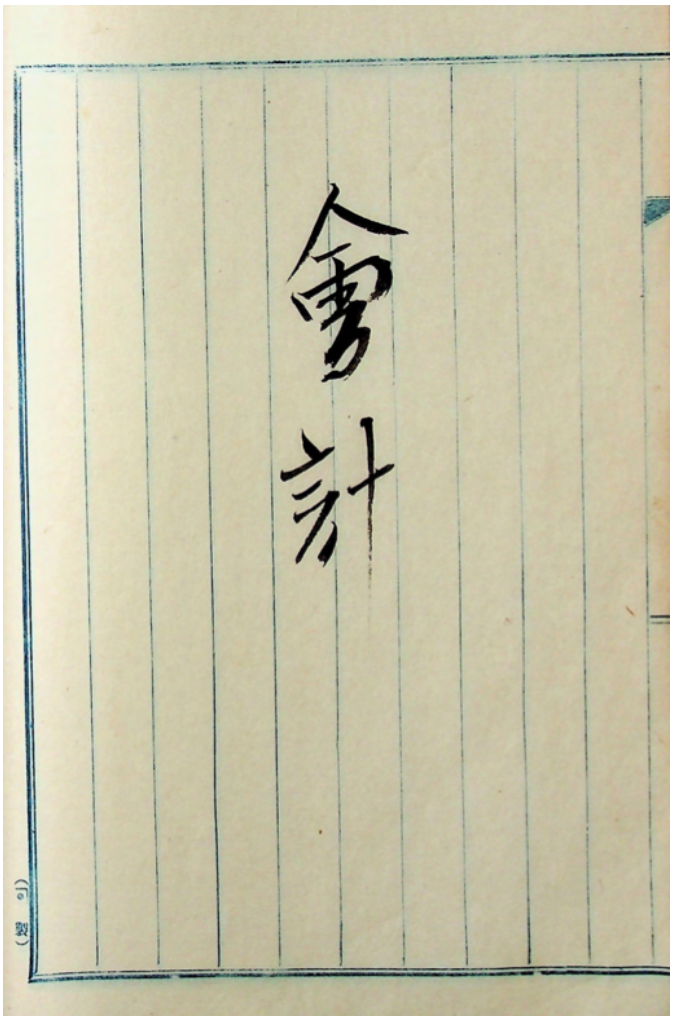
出品目録

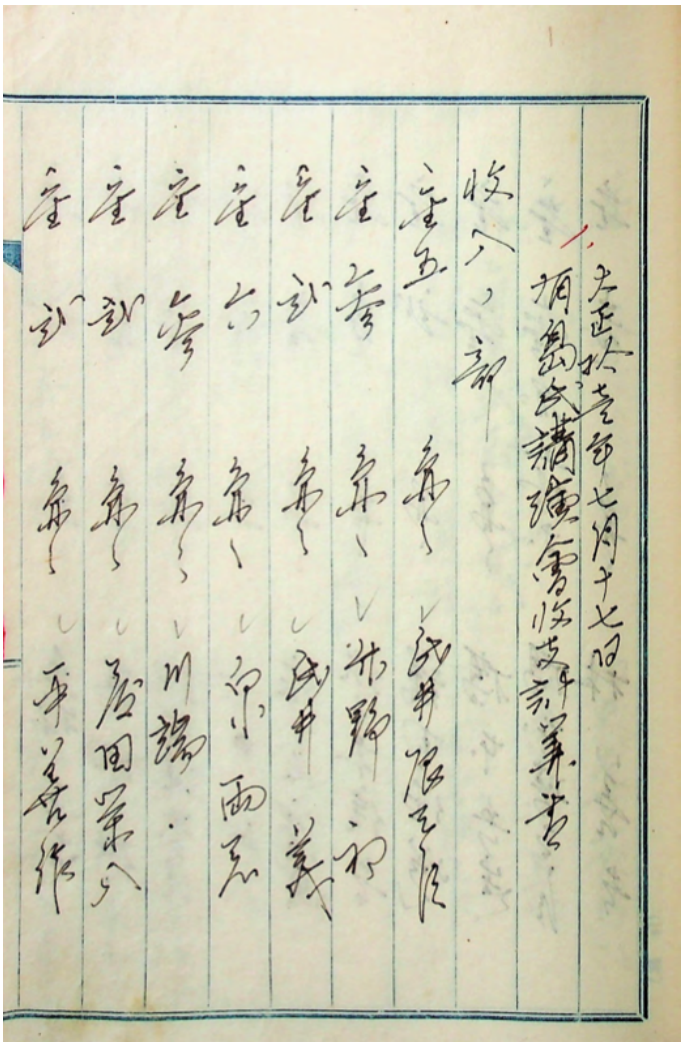
	画題	号	制作年	所蔵者氏名
1	晩秋	P 12	1924（大 13）	佐藤弥十郎
2	ポプラ	P 10	1927（昭 2）	佐藤弥十郎
3	朝鮮金剛山	P 12	1928（昭 3）	西尾栄一
4	グラジオラス	P 10	1935（昭 10）	工藤守
5	木立	水彩	1930（昭 5）	佐藤弥十郎
6	島野風景	F 10	1936（昭 11）	西尾頼吉
7	海	M 12	1936（昭 11）	佐藤弥十郎
8	秋景	F 4	1940（昭 15）	鍛元一義
9	牡丹	F 15	1944（昭 19）	佐々木徹
10	茶津海岸	F 20	1946（昭 21）	鍛元一義
11	鰊	F 4	1946（昭 21）	佐藤弥十郎
12	波止場	P 8	1950（昭 25）	
13	林檎	F 6	1958（昭 33）	
14	岩内港	M 12	1955（昭 30）	
15	菜種咲く頃	P 20	1958（昭 33）	
16	秋景	F 10	1958（昭 33）	
17	林檎	P 8	1958（昭 33）	
18	古宇海岸	F 6	1959（昭 34）	
19	ニセコ	F 6	1959（昭 34）	
20	椿	淡彩	1959（昭 34）	
21	風景	F 4	1940（昭 15）	
22	パラ	F 12	1955（昭 30）	
23	タンクのある風景	P 30	1957（〃 32）	
24	半農の漁村	F 40	1958（〃 33）	
25	夏の岩内港	F 40	1960（〃 35）	
26	釧路	P 40	1960（〃 35）	
27	ノサップの灯台	F 30	1960（〃 35）	
28	ハマナスの咲く荒磯	F 15	1960（〃 35）	
29	春のモイワ	F 30	1960（〃 35）	

●木田画伯遺作展　出品目録

画題	号	制作年	所蔵者氏名
1 晩秋	P12	1924(大 13)	佐藤弥十郎
2 ポプラ	P10	1927(昭 2)	佐藤弥十郎
3 朝鮮金剛山	P12	1928(昭 3)	西尾栄一
4 グラジオラス	P10	1935(昭 10)	工藤守
5 木立	水彩	1930(昭 5)	佐藤弥十郎
6 島野風景	F10	1936(昭 11)	西尾頼吉
7 海	M12	1936(昭 11)	佐藤弥十郎
8 秋景	F4	1940(昭 15)	鍛元一義
9 牡丹	F15	1944(昭 19)	佐々木徹
10 茶津海岸	F20	1946(昭 21)	鍛元一義
11 鰊	F4	1946(昭 21)	佐藤弥十郎
12 波止場	P8	1950(昭 25)	

13	林檎	F6	1958(昭 33)	佐藤弥十郎	
14	岩内港	M12	1955(昭 30)	工藤守	
15	菜種咲く頃	P20	1958(昭 33)	佐藤弥十郎	
16	秋景	F10	1958(昭 33)	西尾栄一	
17	林檎	P8	1958(昭 33)	佐藤弥十郎	
18	古宇海岸	F6	1959(昭 34)	石倉肇	
19	ニセコ	F6	1959(昭 34)	石倉肇	
20	椿	淡彩	1959(昭 34)	福島多悦	
21	風景	F4	1940(昭 15)	庄﨑之男	
22	バラ	F12	1955(昭 30)	木田文子	
23	タンクのある風景	P30	1957(〃 32)	同	
24	半農の漁村	F40	1958(〃 33)	同	
25	夏の岩内港	F40	1960(〃 35)	同	
26	釧路	P40	1960(〃 35)	同	
27	ノサツプの灯台	F30	1960(〃 35)	同	
28	ハマナスの咲く荒磯	F15	1960(〃 35)	同	
29	春のモイワ	F30	1960(〃 35)	同	

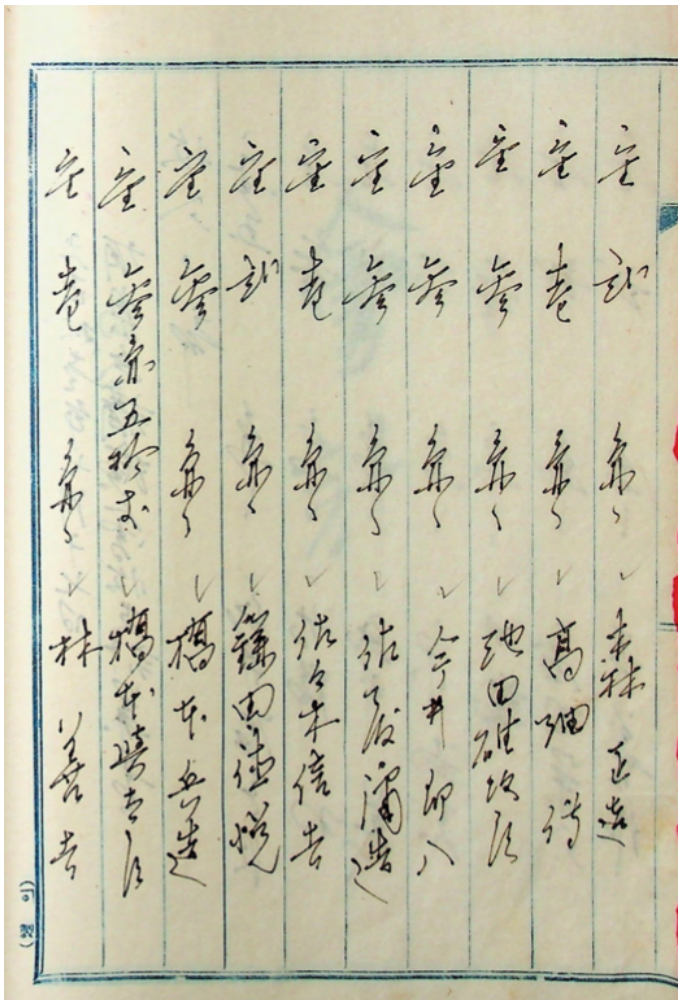

會計



１　大正拾壱年七月十七日
有島氏講演會収支計算書

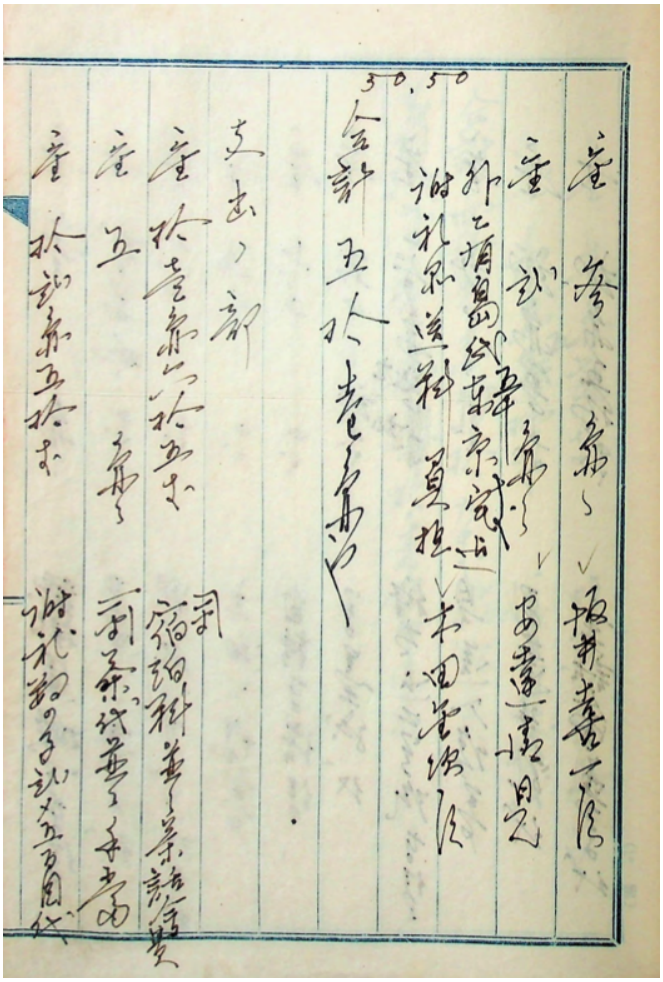
収入ノ部

金　五圓也　武井辰三郎
金　参圓也　竹野初
金　弐圓也　武井義
金　六圓也　泉　両君
金　参圓也　川端
金　弐圓也　藤田栄八
金　弐圓也　平善作



金　弐円也　　森正造

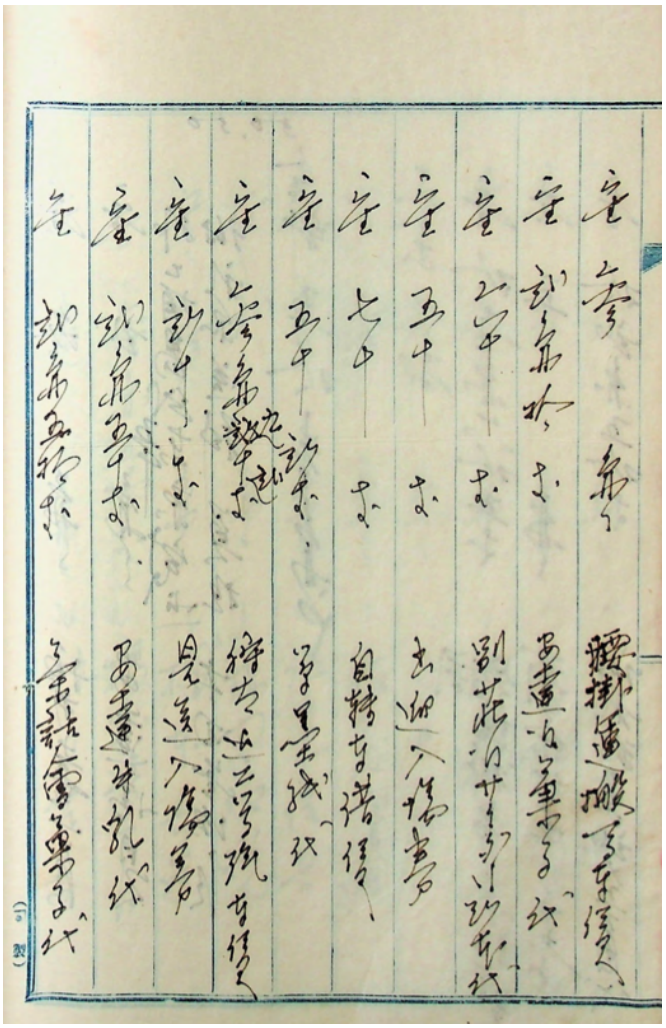
金　壱圓也　高畑伝
金　参圓也　池田雄次郎
金　参圓也　今井卯八
金　参圓也　佐藤彌造
金　壱圓也　佐々木信吉
金　弐圓也　鎌田徳悦
金　参圓也　橋本兵造
金　参圓五拾銭也　橋本與太郎
金　壱圓也　林善吉



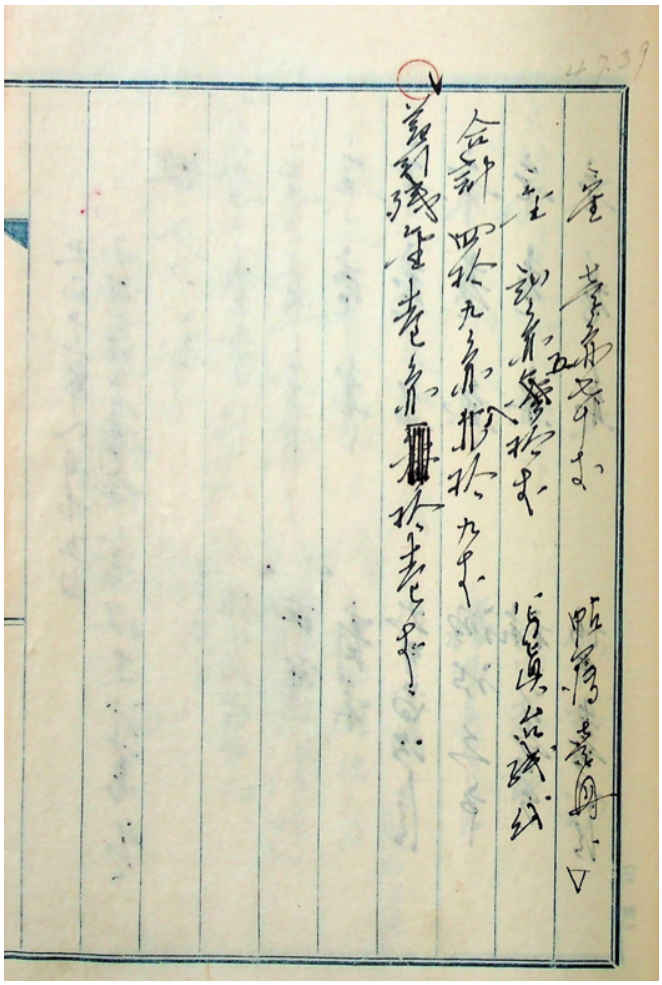
金　参圓也　　坂井喜一郎
金　弐圓也　　安達清見
50．50
外に有島氏東京宅迄
謝礼品送料　負担　木田金次郎
五拾銭
合計　五拾壱圓也

支出ノ部

金　拾壱圓六拾五銭　丁平　宿泊料並に茶話會費
金　五圓也　丁平　茶代並に手
金　拾弐圓五拾銭　謝礼数の子弐〆五百目代



金　参圓也　腰掛運搬用車賃
金　弐圓拾銭　安達行菓子代
金　六十銭　別荘行サイダー弐本代
金　五十銭　出迎入場券
金　七十銭　自轉車借賃
金　五十弐銭　筆墨紙代
金　参圓九十弐銭　狩太迄二等汽車賃
金　弐十銭　見送入場券
金　弐圓五十銭　安達牛乳代
金　弐圓五拾銭　茶話會菓子代



金　壱圓七十銭　　帳簿壱冊
金　弐圓五拾銭　　写真台紙代
合計　四拾九圓八拾九銭
※差引残金　壱圓拾壱銭

※欄外に、47.39の書き込みがあり、次の2.50を足すと合計金額になる

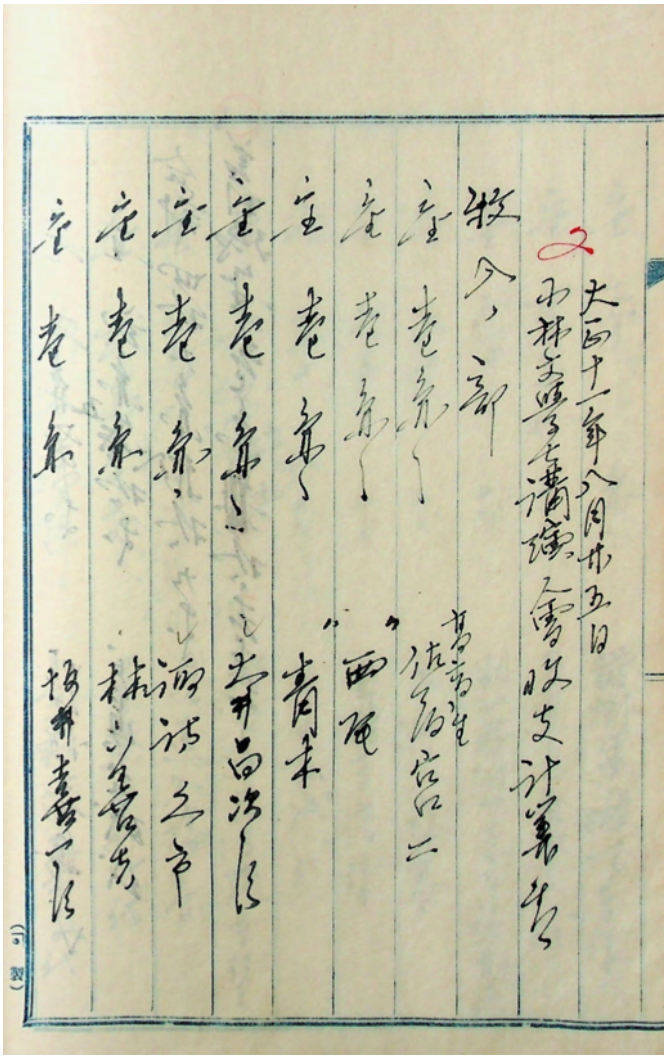
2

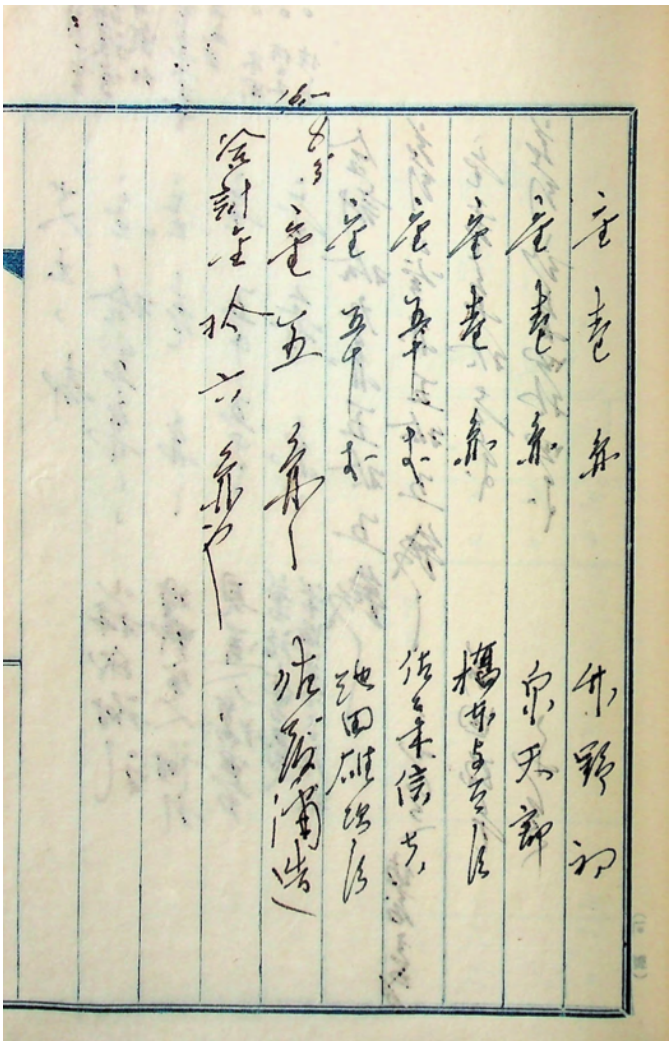
大正十一年八月二十五日

小林文學士講演會收支計算書

収入ノ部

金　壱圓也　高商生　佐藤宮二
金　壱圓也　〃　西尾
金　壱圓也　〃　青木
金　壱圓也　大井昌次郎
金　壱圓也　諏訪久市
金　壱圓　林善吉
金　壱圓　坂井喜一郎

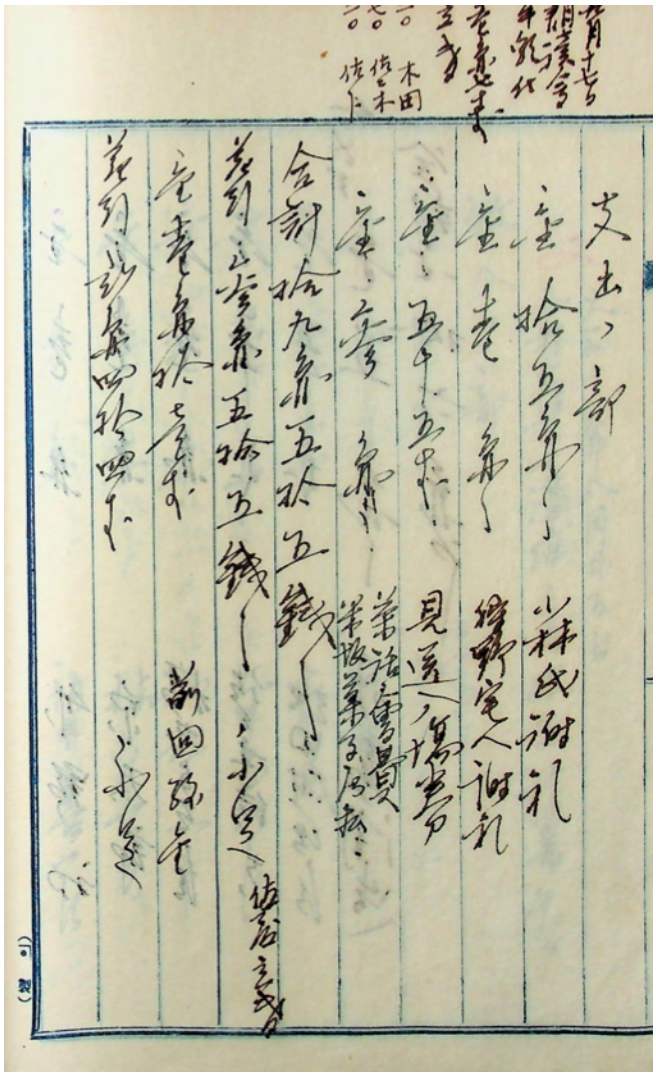




金 壱圓　竹野初
金 壱圓　泉天郎
金 壱圓　楠本与太郎
金 五十銭　佐々木信吉
金 五十銭　池田雄次郎
金 五圓也　佐藤彌造

合計　金　拾六圓也

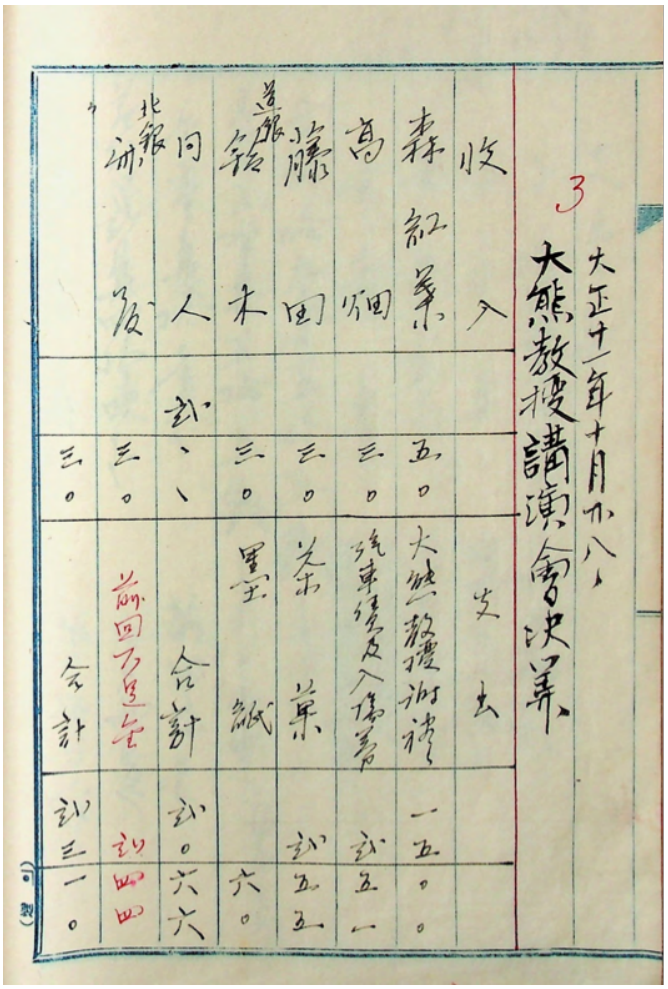
※欄外に、16.-8 分



支出ノ部

金　拾五圓也　　小林氏謝礼
金　壱圓也　　狩野宅へ謝礼
金　五十五銭　　見送入場券
金　参圓也　　茶話會費、米坂菓子店払
合計　拾九圓五拾五銭也
差引　参圓五拾五銭也不足　佐藤立替
金　壱圓拾壱銭　前回残金
差引　弐圓四拾四銭　不足

※欄外に書き込み
九月十七日朗讀會
牛乳代壱圓七十銭
立替
二〇木田
七〇佐々木
二〇佐ト
（上部が文字切れている）



3　大正十一年十月二十八日

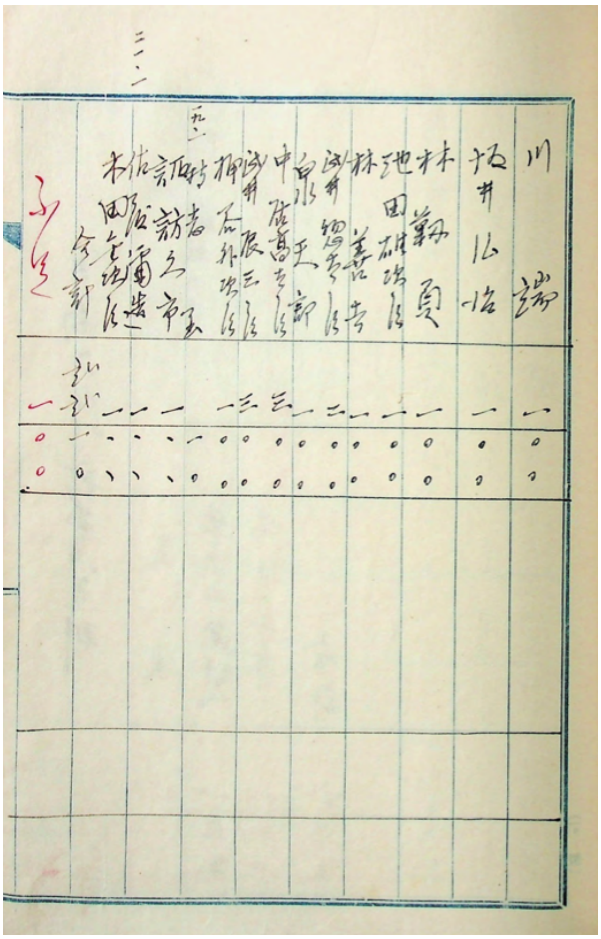
大熊教授講演會決算

収入

森紅葉	五〇	
髙畑	三〇	
藤田	三〇	
道銀 鈴木	三〇	
〃 同人	弐〇〇	
北銀 竹藤	三〇	
〃 （空白）	三〇	

支出

大熊教授謝禮		一五〇〇
汽車賃及入場券		弐五一
茶菓		弐五五
墨紙		六〇
合計		弐〇六六
前回不足金		弐四四
合計		弐三一〇

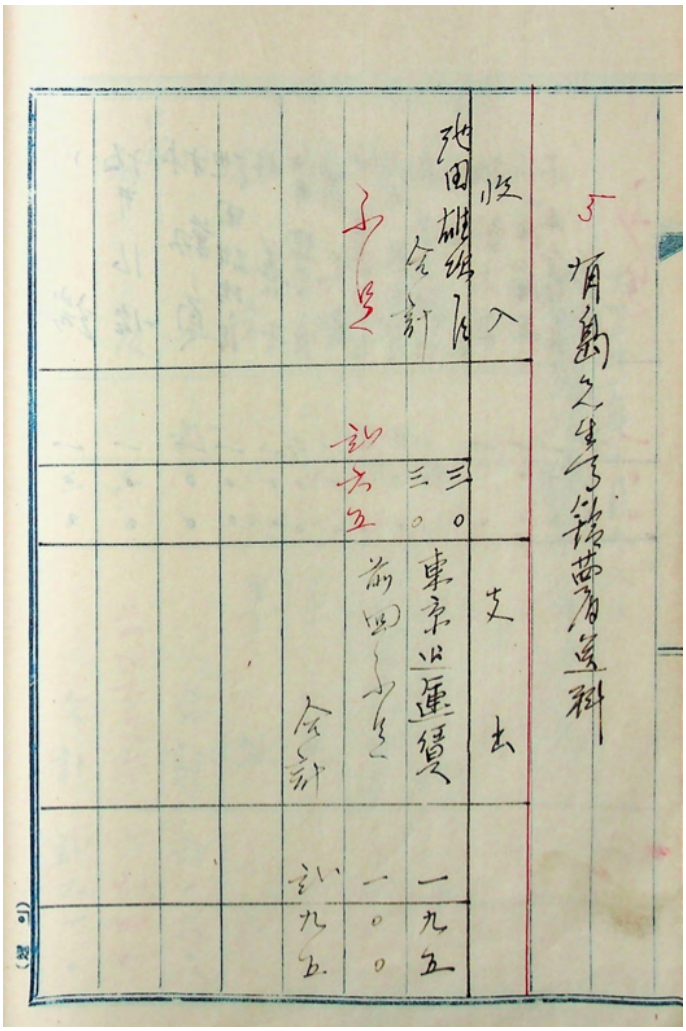


川端	一〇〇
坂井弘治	一〇〇
林靭負	一〇〇
池田雄次郎	一〇〇
林善吉	一〇〇
武井惣太郎	二〇〇
泉天郎	一〇〇
中居高太郎	三〇〇
武井辰三郎	三〇〇
桶谷外次郎	一〇〇
特志函	一〇
諏訪久市	一〇〇
佐藤彌造	一〇〇
木田金次郎	一〇〇
合計	弐弐一〇
不足	一〇〇

※支出及び残高は空白

※欄外に、十九・一

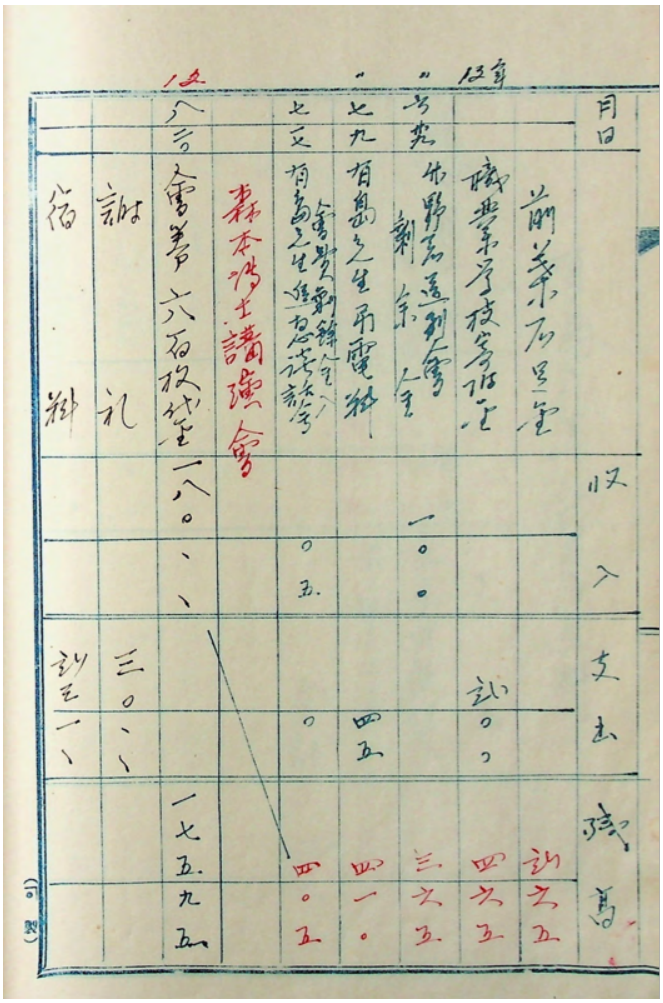
※欄外に、二一・一



５　有島先生　馬鈴薯送料

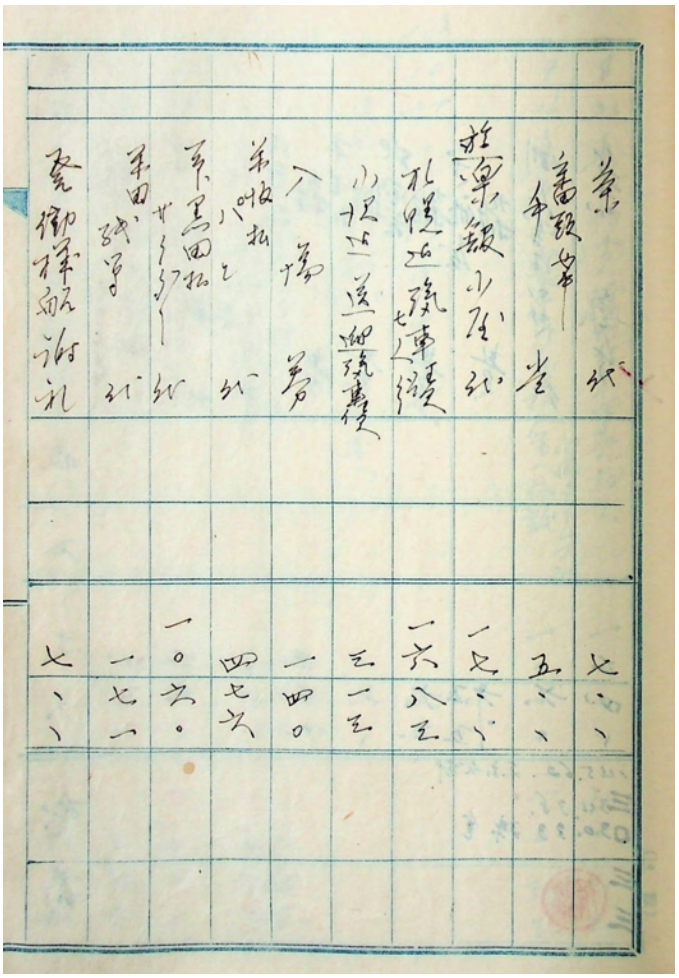
収入
池田雄次郎　三〇
合計　三〇
不足　弐六五

支出
東京迄運賃　一九五
前回不足　一〇〇
合計　弐九五

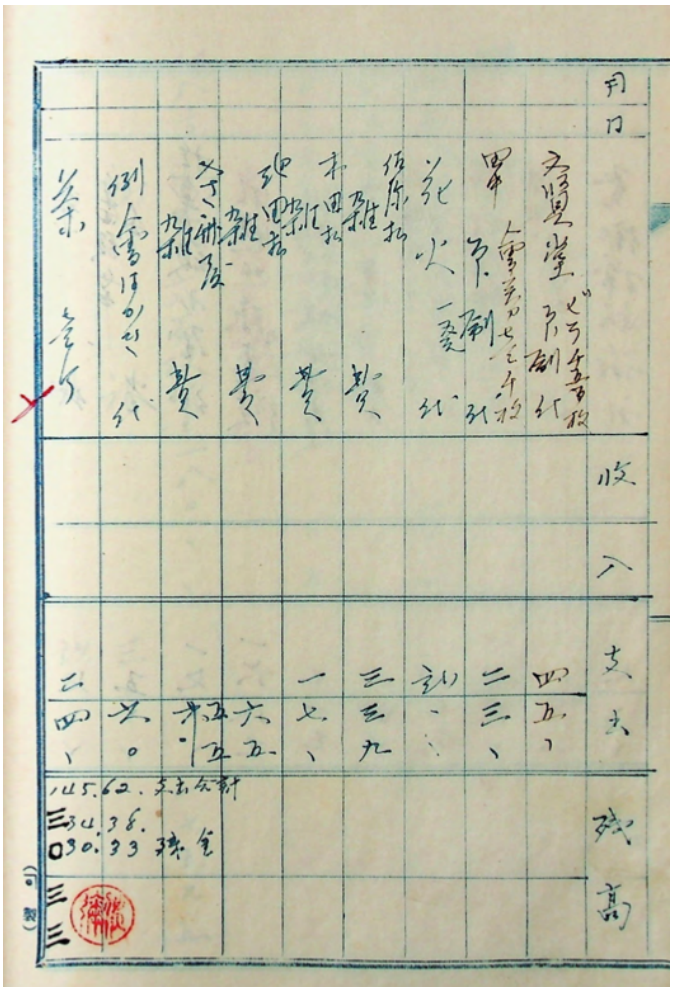


月日		収入	支出	残高
12年				
〃	六 二十九			
〃	七 九			
	七 十七			
12	八 二〇			

		収入	支出	残高
前葉不足金				弐六五
職業学校寄附金				四六五
竹野君送別會剰余金		一〇〇		三六五
有島先生弔電料			四五	四一〇
有島先生追想談話會				
会費剰餘金入		〇五		四〇五
森本博士講演會			〇	
會券六百枚代金		一八〇〇〇		一七五九五
謝礼			三〇〇〇	
宿料			弐三一〇	

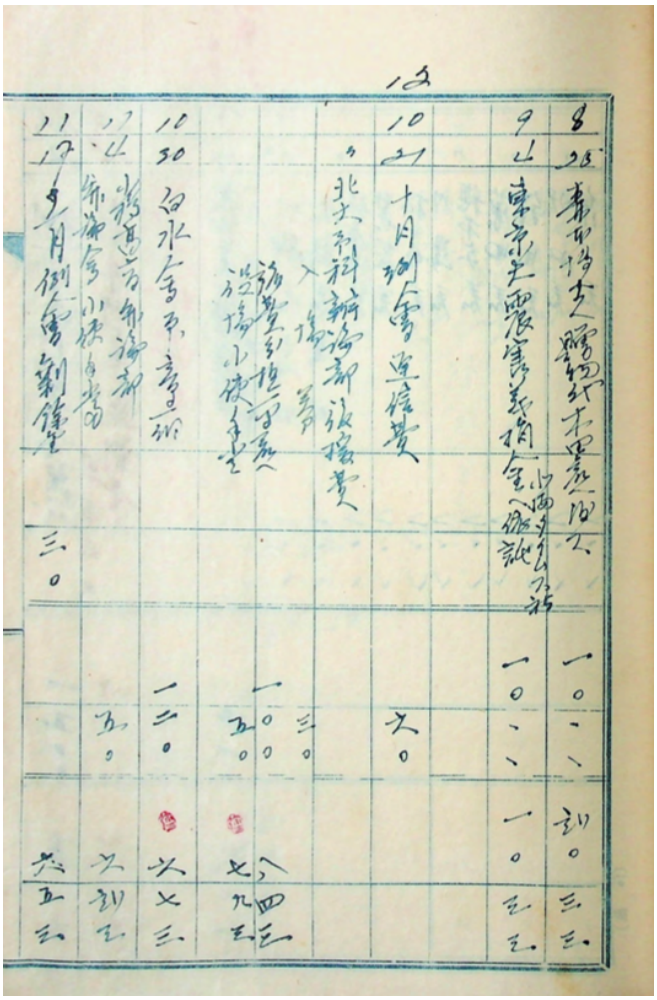


茶代　七〇〇
番頭女中手當　五〇〇
遊楽館小屋代　一七〇〇
札幌迄汽車賃七人分　一六八三
小沢迄送迎汽車賃　三十三
入場券　一四〇
米坂払　パン代　四七六
黒田払　サイダー代　一〇六〇
米田　紙筆代　一七一
発働機船謝礼　七〇〇

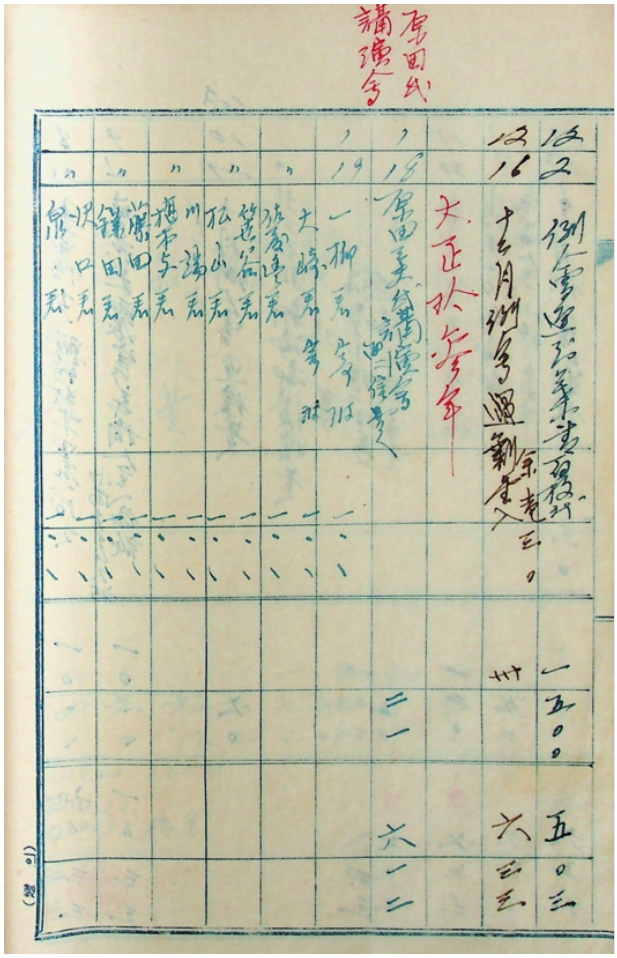


文賢堂　ビラ千五百枚印刷代　四五〇
田中　會券壱千枚印刷代　二三〇
花火　一発代　弐〇・※
佐藤払　雑費　三三九
木田払　雑費　一七〇
池田払　雑費　六五
〇※斎藤文具店　雑費　五五　145.62　支出合計
例會はがき代　六〇　34.38
茶　壱斤　二四〇　30.33　残金
〆　三〇三三

※「・」は原本にはないが、桁を揃えるために補った（以下同じ）
※〇は「やまさ」（屋号）



8	23	森本博士へ贈物代	一〇〇〇		
9	4	木田君へ渡ス		弐〇三三	
12	10	東京大震害義捐金			
	21	北海タイムス社へ依託	一〇〇〇	一〇三三	
	〃	十月例會通信費	六〇		
		北大予科辯論部講演費			
		入場券	三〇	八四三	
		諸費分担平君へ	一〇〇		
		役場小使手當	五〇	七九三	
10	30	白水會　印章　一個	一二〇	六七三	
11	4	小樽高商弁論部			
		弁論會小使手當	五〇	六二三	
11	17	十一月例會剰餘金	三〇	六五三	

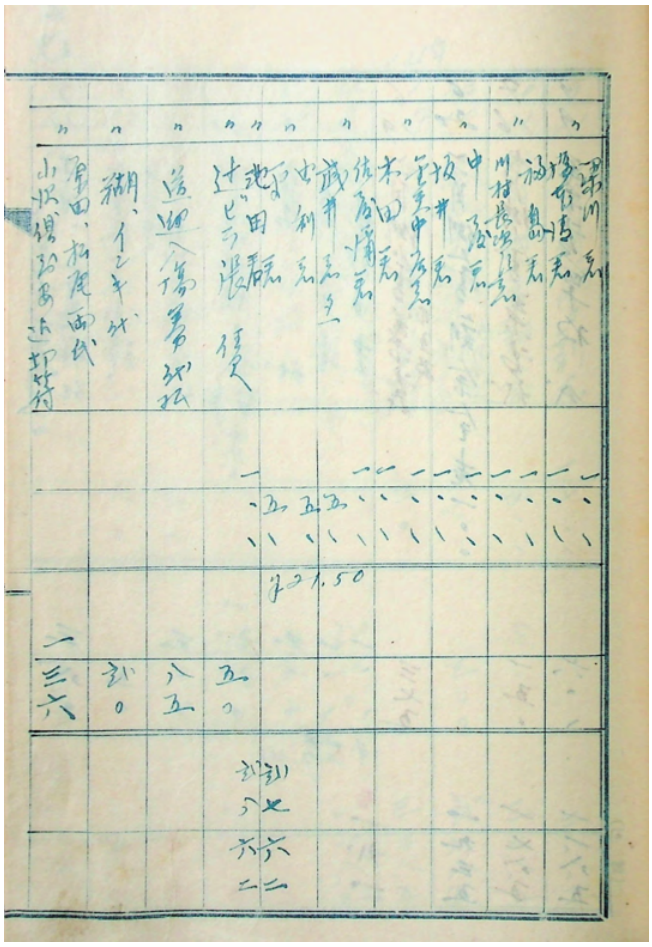


大正拾参年
原田氏　1　18
講演會　1　19

12　2　例會通知葉書百枚代　一五〇〇
12　16　十二月例會剩余金入　壱三〇　五〇三
　　六三三
　　六一二

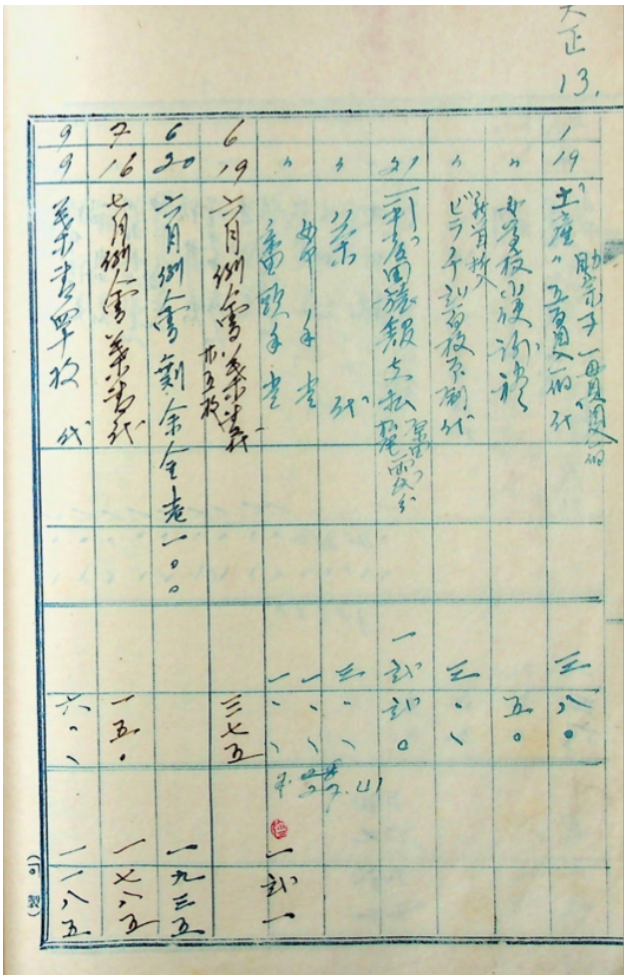
一柳君寄附　一〇〇
大崎君寄附　一〇〇
佐藤學君　一〇〇
笹谷君　一〇〇
松山君　一〇〇
川端君　一〇〇
楠本与君　一〇〇
藤田君　一〇〇
鎌田君　一〇〇
沢口君　一〇〇
泉君　一〇〇

原田三夫氏講演會通信費　二一



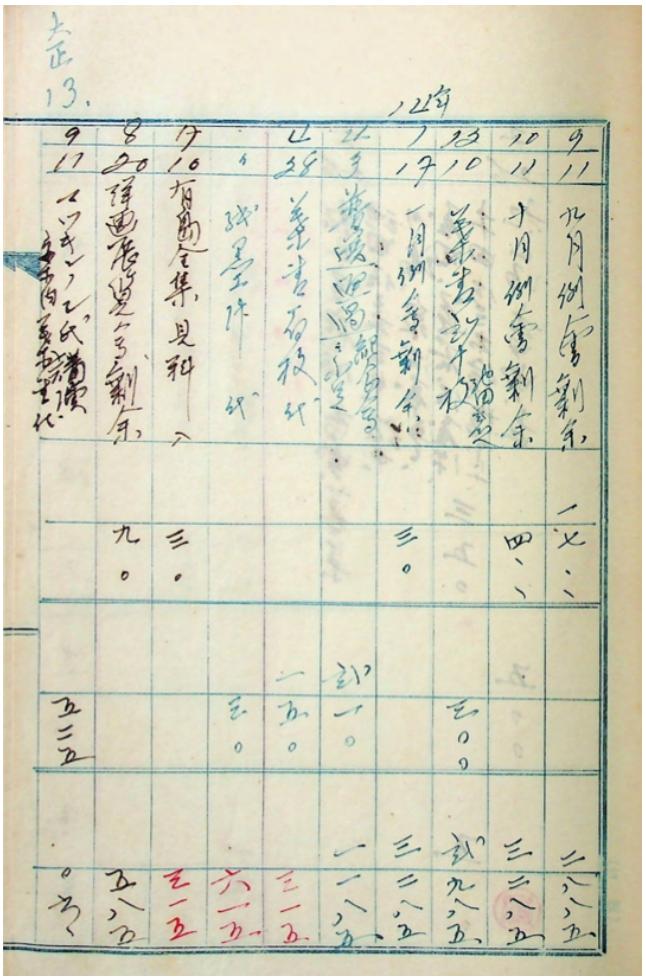
深川君　一〇〇
橋本清君　一〇〇
福島君　一〇〇
川村長次郎君　一〇〇
中藤君　一〇〇
坂井君　一〇〇
金天中居君　一〇〇
木田君　一〇〇
佐藤彌君　一〇〇
武井君　五〇
由利君　五〇
平君　五〇　¥21.50　弐七六二
池田君　一〇〇　弐八六二

辻ビラ張賃　五〇
送迎入場券代払　八五
糊、インキ代　弐〇
原田、松尾両氏
小沢、倶知安迄切符　一三六

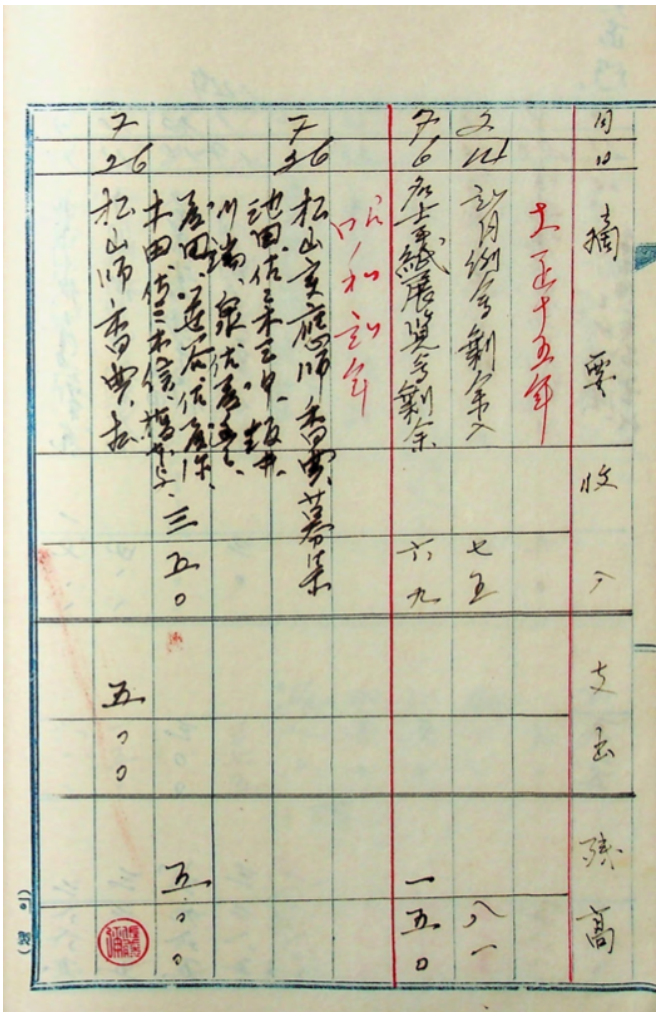


大正13　1　19　土産

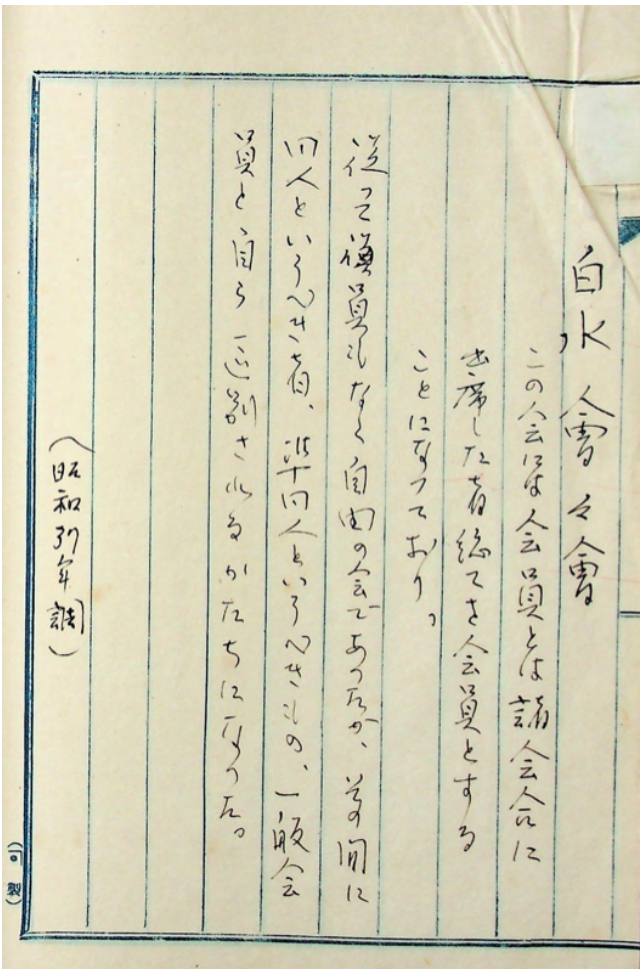
19　助宗子一貫目入一個　三八〇
〃　五百目入一個代　五〇
女学校小使御禮　三〇〇
21　〃　〃　新聞折入ビラ千弐百枚印刷代
丁平藤田旅館支払
原田、松尾両氏分　一弐弐〇
〃　〃　茶代　三〇〇
女中手當　一〇〇
番頭手當　一〇〇¥27.41　一弐一
六月例會葉書代二十五枚　三七五
六月例會剰餘金壱一〇〇　一九三五
七月例會葉書代　一五〇　一七八五
葉書四十枚代　六〇〇　一一八五



9	11	九月例會剩余	一七〇〇	二八八五
10	11	十月例會剩余	四〇〇	三二八五
12	10	葉書弐十枚池田君へ		弐九八五
14年 1	17	一月例會剩余	三〇・	三二八五
4	3	普選通過紀念會不足		弐一〇・
4	28	葉書百枚代		一五〇・
	〃	残墨汁代　紙		三〇・
7	10	有島全集見料入	三〇・	
8	20	洋画展覧會剩余	九〇・	
9	11	マッキレーン氏講演		
		案内葉書代		五二五

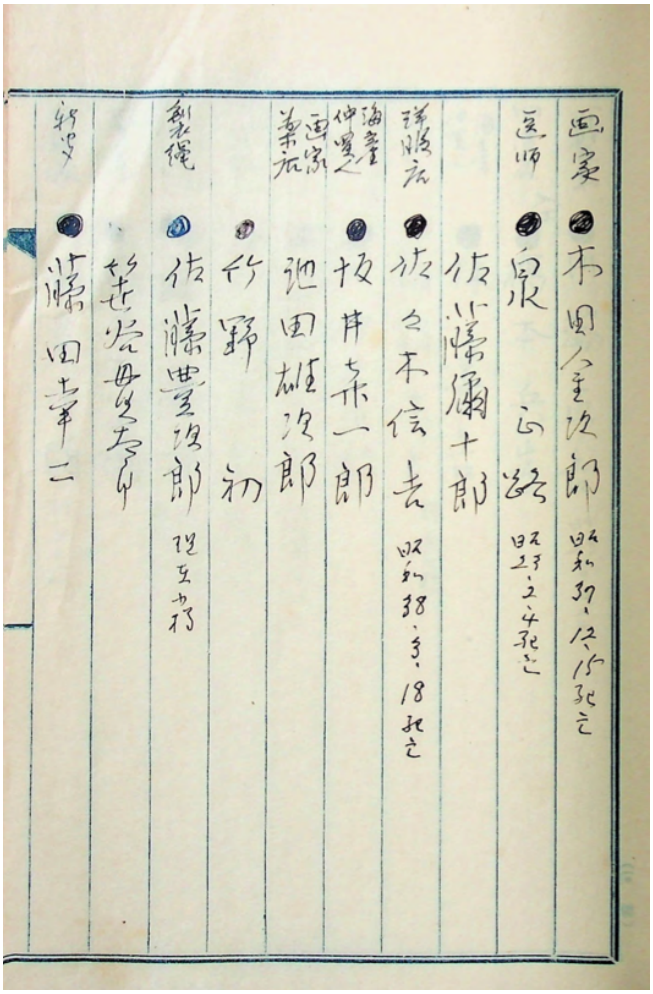


月	日	摘要	収入	支出	残高
2	14	弐月例會剰余入	七五		八一
7	6	名士手紙展覧會剰余	六九		一五〇
		昭和弐年			
7	26	松山実應師香典募集			五〇〇
		池田、佐々木三郎、坂井			
		川端、泉、佐藤學			
		藤田、笹谷、佐藤弥、			
		木田、佐々木信、楠本与			
			三五〇		
7	26	松山師香典払		五〇〇	


白水會
この会は会員とは諸会合に
出席した者総てを会員とする
ことになっており、
従って役員もなく自由の会であったが、その間に
同人というべき者、準同人というべきもの、一般会
員と自ら區別されるかたちになった。
（昭和37年調）

白水會々會※
この会には会員とは諸会合に出席した者総てを会員とすることになっており、従って役員もなく自由の会であったが、その間に同人というべき者、準同人というべきもの、一般会員と自ら區別されるかたちになった。
（昭和37年調）

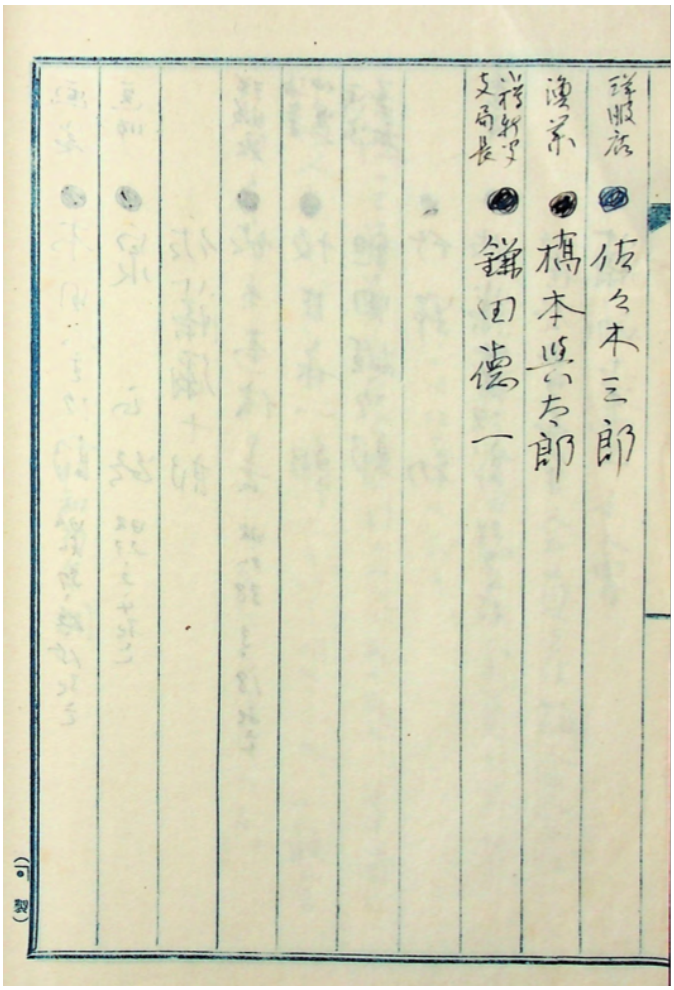
※最後の文字「會」は「員」の間違いと思われる

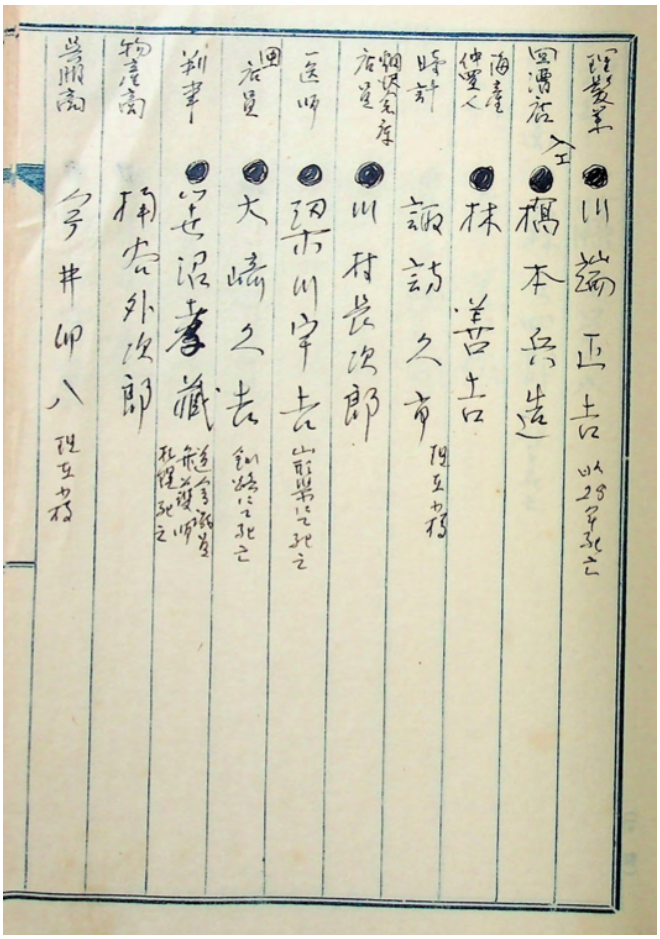


画家
医師
洋服店
海産仲買人
画家薬店
製縄
新聞

●木田金次郎　昭和37.12.15死亡
●泉正路　昭和23.2.4死亡
佐藤彌十郎
●佐々木信吉　昭和38.3.18死亡
●坂井喜一郎
池田雄次郎
●竹野初
●佐藤豊次郎　現在小樽
笹谷貫太郎
●藤田幸二

洋服店　●佐々木三郎
漁業　●橋本與太郎
小樽新聞支局長　●鎌田徳一



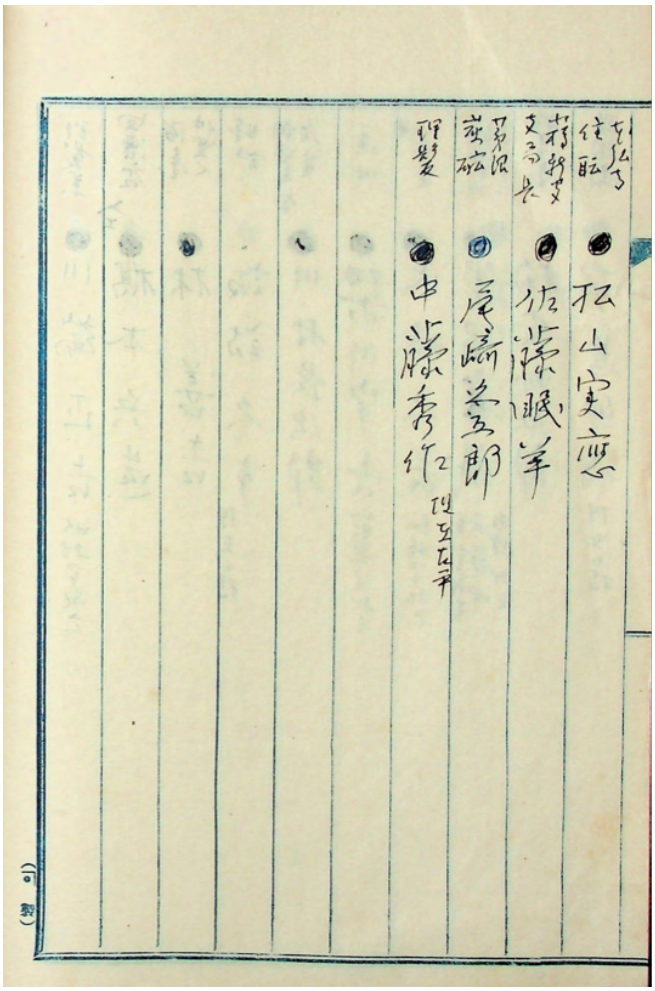


理髪業
回漕店　仝※
海産仲買人
時計
畑沢倉庫店員
医師
口中※店員
判事
物産商
呉服商

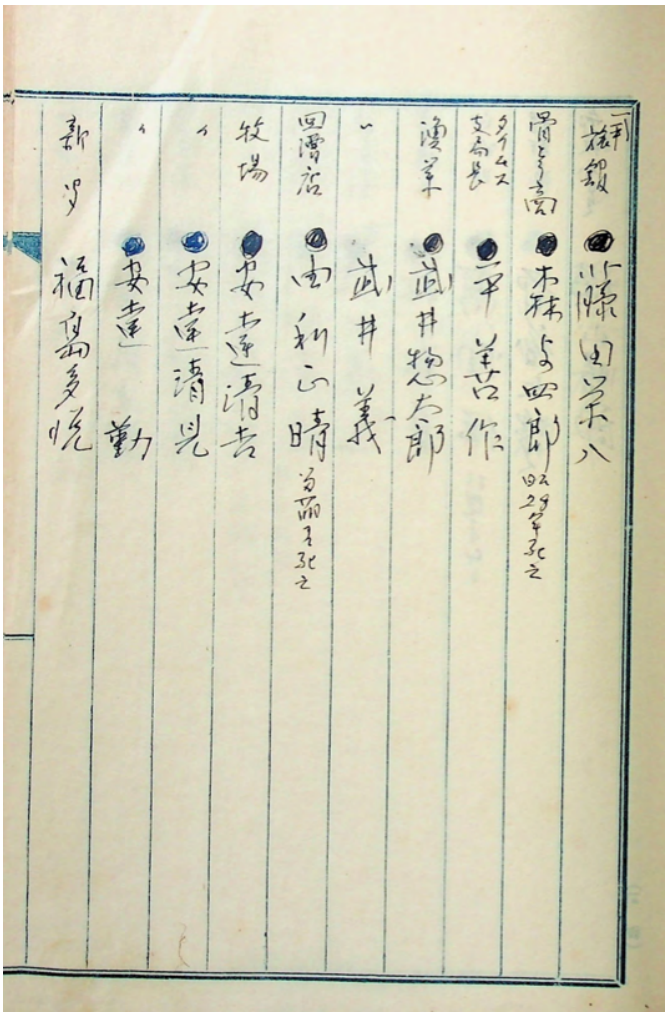
●川端正吉　昭和28年死亡
●橋本兵造
●林善吉
　諏訪久市　現在小樽
●川村長次郎
●梁川宇吉　山形県にて死亡
●大崎久吉　釧路にて死亡
●笹沼孝蔵　道會議員　弁護師　札幌死亡
　桶谷外次郎
　今井卯八　現在小樽

※橋本回漕店の屋号「イリカセ」で、「入」の下に「工」
P103の「イリカセ」とは関係がない

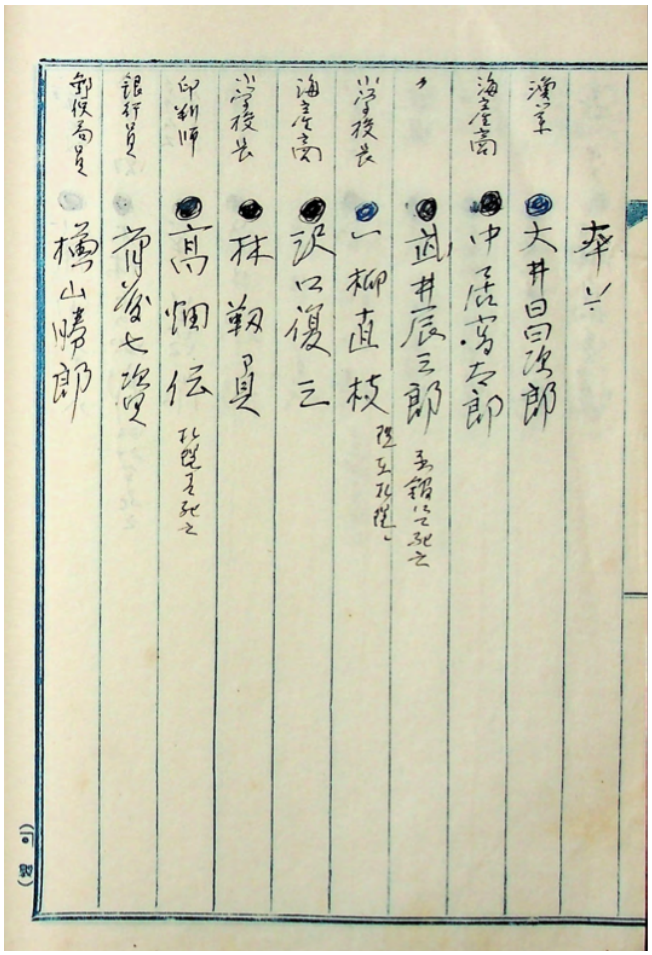
※屋号カク十カ西尾商店



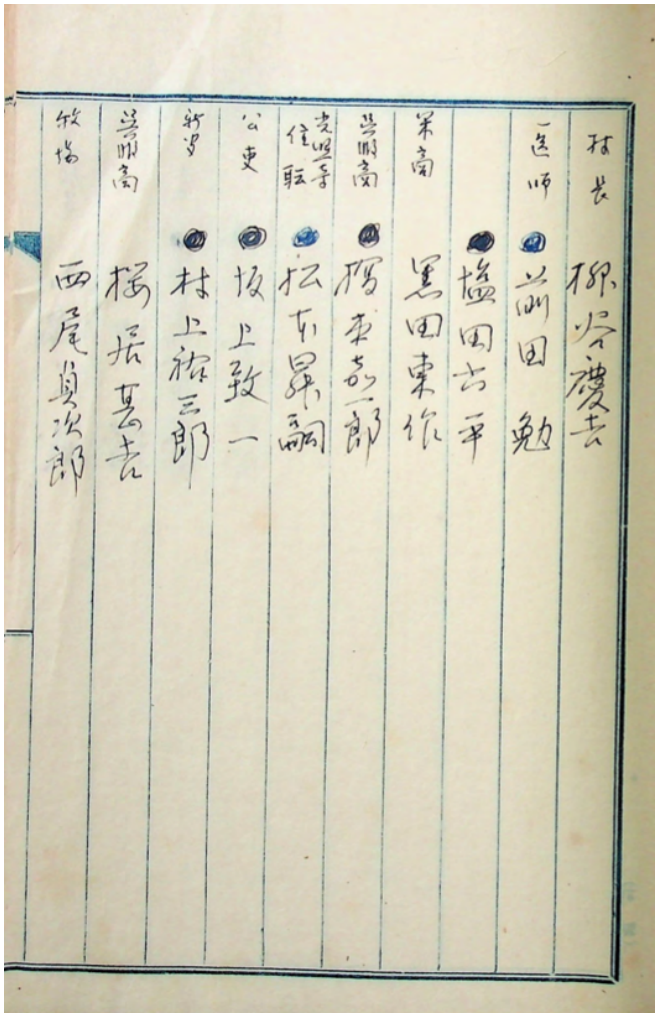
本弘寺住職　●松山実應
小樽新聞支局長　●佐藤眠羊
茅沼炭砿　●尾崎久五郎
理髪　●中藤秀作　現在古平



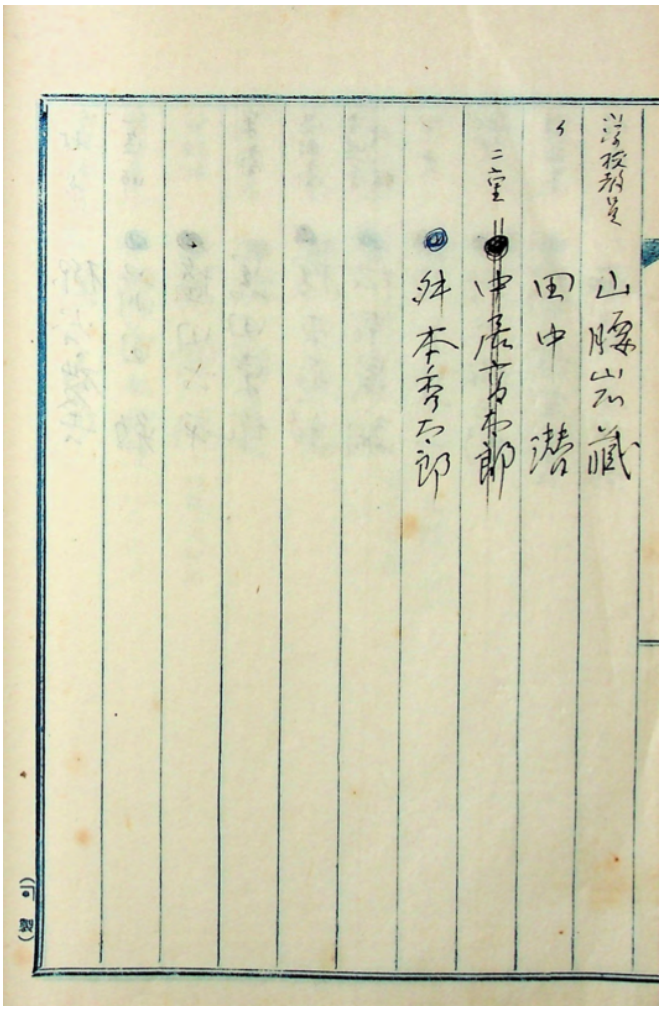
丁平旅館　●藤田栄八
骨とう商　●森与四郎　昭和28年死亡
タイムス支局長　●平善作
漁業　●武井惣太郎
〃　武井義
回漕店　●由利正晴　留萌にて死亡
牧場　●安達清吉
〃　●安達清見
〃　●安達勤
新聞　福島多悦



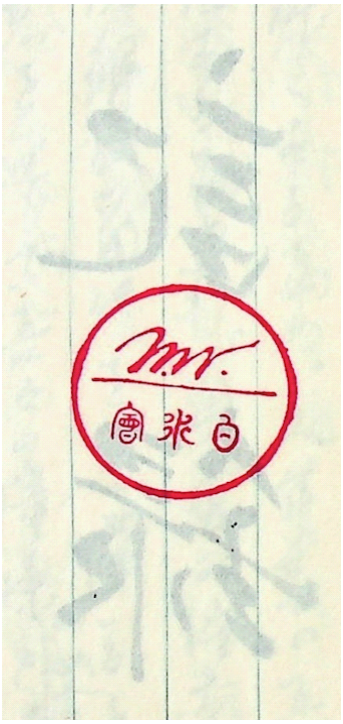
漁業　●大井昌次郎
海産商　●中居髙太郎　函館にて死亡
〃　●武井辰三郎　現在札幌
小学校長　●一柳直枝
海産商　●沢口復三
小学校長　●林靭負
印判師　●髙畑伝　札幌にて死亡
銀行員　斉藤七資
郵便局員　横山勝郎



村長　柳谷慶吉
医師　●前田勉
　　●塩田六平
米商　黒田東作
呉服商　●橋本嘉一郎
光照寺住職　●松本昇嗣
公吏　●坂上致一
新聞　●村上祐三郎
呉服商　桜居甚吉
牧場　西尾貞次郎



学校教員　山腰岩蔵
〃　田中潜
二重　中居高太郎
〃　舛本秀太郎



参考資料

岩内白水会年表／岩内町郷土館作成

年	岩内白水会関連事項	有島武郎関連事項
1918(大正7)		3/16『生れ出づる悩み』大阪毎日新聞にて連載開始
1919(大正8)		2/9、10『木田金次郎氏習作品展覧会』を東京・有島邸内で開催する
1921(大正10)	『稲穂峠の素人画家』小樽新聞にて連載（記者佐藤眠羊）	9月木田金次郎上京、有島邸に滞在する
1922(大正11)	7/16有島武郎岩内役場議事堂にて講演会を開催「惜しみなく愛は奪ふ」、藤田旅館へ投宿。深夜一時過ぎまで町内の青年たちと懇談する 7/17有島武郎、町内男女小学生の前で講演（岩内女子小学校にて）「一人の人のために」。有島武郎は「話しているうちに涙が出て止まらなかった」という 8/25小林象三氏（小樽商業高校教護・文学博士）講演会開催 10/16小樽高等商業学校生徒の岩内遠足見学団来訪を歓待する 10/28大熊信行氏（小樽高等商業教護）講演会開催 11/23有島武郎の元へ馬鈴薯を送る。有島武郎より返礼状が会へ送られる（12/4） ※「白水会」の名前は、有島の個人雑誌「泉」にちなんだもので、岩内町内の同雑誌の愛読者会、発会当時63名。町内書店で手に入らないため一括して配本された。創刊の原稿が有島から編集者足助素一に手渡されたのは8/24。印刷納品が9/15であり、その期間に会の名前として自然定着したものとみられる。発会宣言された記録はない	2月志賀直哉と共編『現代三十三人集』刊行、社会思想家としての活動が活発になる 7/14農場解放のために有島農場入りした有島武郎を木田金次郎が来訪 7/18 有島農場の無償解放宣言 10/1有島武郎個人雑誌『泉』創刊。巻末に「岩内には既に白水会といふ『泉』の購読者会が出来たそうです」と、編集者足助素一より記録されている 12月下旬、新劇座による『ドモ又の死』が上演される
1923(大正12)	7/8有島武郎の死が会へ報じられる 7/17木田金次郎宅にて有島追想談話会 8/19森本厚吉博士（帝大教授）・FWブラウン博士（帝大教授）・佐藤俊三氏（雑誌『文化生活』編集主任）による文化講演会を岩内遊楽館にて開催 10/20北大予科弁論部の巡回弁論会を役場議事堂にて開催 11/4小樽高等商業学校巡回講演会を開催	6/9軽井沢にて死去 8/1個人雑誌『泉』終刊「有島武郎記念号」発行 9/1関東大震災
1924(大正13)	1/19原田三夫氏（前帝大教授理学士）による科学講演会を女子職業学校にて開催 3/1小樽アポロソサイティ高田紅果氏、兵藤憲二氏によるレコードコンサートを岩内女子職業学校にて開催 5/9第15回衆議院議員総選挙に先立ち、有権者へ投票を促すビラ広告を作成し啓発活動を行う 7/12北大学生夏期巡回講演会（第二班）を役場議事堂にて開催 8/4中野正剛氏（憲政会代議士）による談話会を役場議事堂にて開催。有島事件につき否定的な批評をし、木田金次郎と論争となる。木田は氏の帰路列車中にまで同乗、論争を続け、黒松内駅まで行き最後には和解した 8/28「時局批判大演説会」を遊楽館にて開催。鈴木正吾氏遊説、子爵後藤新平の演説（レコード）。入場者約150名 11/7尾崎行雄氏（政治家・議会政治の父）による講演会を二葉座にて開催。翌日、小学校にて講演 11/9岩内洋画ならびに写真展を職業女学校講堂にて開催。絵画30点、写真18点	1月有島武郎母幸子より木田金次郎へ書簡が送られる（郷土館所蔵）

年	岩内白水会関連事項	有島武郎関連事項
1925(大正14)	3/9橋浦泰雄氏（画家、社会運動家）、田上義也氏（演奏家、建築家）による音楽会を遊楽館にて開催。岩内で初めてバイオリンが奏される 4/3普選通過記念会を役場議事堂にて開催。普通選挙法が議会を通過したことを記念し、小森道議会議員等の講演会を行う 4/28澤田代議士懇談会を開催 6/15叢文閣足助素一氏より、白水会へ有島全集十巻の寄贈を受ける 8/20,21岩内美術展覧会を女子職業学校にて開催 9/11マッキレーン氏（小樽高等商業学校教授）による講演会を役場議事堂にて開催	
1926(大正15)	7/5,6諸名士手紙展覧会を分会堂にて開催。白水会に縁故のあった国内の諸名士よりの書簡を展示する展覧会 8/11谷本富文学博士（前京都帝国大学勅任教授）による講演会を遊学館にて開催	
	※以降の記録（『白水会記録会計』）なし	
1930(昭和5)	8/6石井漠による新創作舞踊公演会を萬生座にて開催	
1950(昭和25)	5/28白水懐旧懇談会を岩内信金会議室にて開催。活動中絶後25年ぶりの会合	
1954(昭和29)	9/26岩内大火 12/5木田君画業四十年、木田金次郎氏北海道文化賞受賞祝賀会を東小学校にて開催	
1962(昭和37)	12/15木田金次郎氏、脳溢血により逝去	
1968(昭和43)	11/22,23木田画伯七回忌追悼遺作展を岩内町公民館にて開催	

※令和4年（2022）４月１０日作成

●参考資料:『余滴その二』（佐藤彌十郎著1971）、『有島武郎とその時代　有島武郎記念誌第一週』（有島武郎記念会1961)、『「生れ出づる悩み」を読む　有島武郎と木田金次郎のクロスロード』（有島武郎・木田金次郎プロジェクト編2018）

岩内町郷土館 令和4年度　第1回企画展

郷土館お宝・珍品展 part8

有島武郎と「白水会」の100年

写真前列右端に座るのは、29歳の画家木田金次郎。1922年（大正十一）7月、ニセコ有島農場にて解放宣言が発せられる前夜、木田の依頼を受け、作家有島武郎は岩内を訪れ講演しました。その年の10月に、有島を慕う岩内の文化人たちによって結成されたのが「白水会」です。今年は有島農場解放と白水会の誕生から100周年。大正期より岩内の文化的素養を培った、白水会の貴重な資料を展示します。

期間：令和4年
4月16日（土）～6月12日（日）

開館時間：9:00～17:00
休館日　：月曜日（祝日の場合その翌日）
入館料　：岩内町外の方 300円
　　岩内町内の方 100円

有島武郎のスケッチ画（写）。その他、郷土館所蔵の普段では見られないお宝・珍品を数多く展示します。

岩内町郷土館　岩内町字清住5-3　☎0135-62-8020　http://www.iwanaikyoudokan.com

白水会「記録と会計」の著者
佐藤彌十郎について

佐藤彌造（のち彌十郎）は一八九〇（明治二三）年一月二四日新潟県北蒲原郡築地村大字中村浜に生まれ、一八九六（明治二九）年六歳の時、祖父母・両親と共に岩内に移住。佐藤家は御用船を差配する旧家で、代々の当主は彌十郎を名乗った。岩内移住後、一家は長濱彦太郎（父の従兄・茅沼炭鉱で財をなす）の支援を受け、米穀雑貨商を軌道に乗せると、彌造は札幌中学校（現札幌南高校）を経て一九〇九（明治四二）年早稲田大学高等予科に入学。上京後すぐに開成中学二年生の木田金次郎（三歳年少）と出会い終生の友となった。

一九一三（大正二）年に早稲田大学商学部を卒業、一年間の軍務を経て家業に就く。既に帰郷していた木田金次郎などと交友を重ね、一九二二（大正一一）年有島武郎の岩内来訪を機に白水会を結成。有島の死後も広く内外の人士と交流し、多彩な文化活動を行った。泉天郎の下で十狼と号し、岩内の俳壇を代表する存在となったのもその一例である。一九二九（昭和四）年以降、在郷軍人会分会長、岩内商工会副会頭を務め、一九三三（昭和八）年には家業を廃し、町の行政に携わった後、岩内信用組合副会頭、道会議員などの要職を歴任した。一九三五（昭和一〇）年父逝去後、五代目彌十郎を襲名。

戦後一時公職追放となるが、岩内信用組合理事長を務める傍ら郷土史研究に専心。一九六六（昭和四一）年に『岩内町史』を公刊、一九七一（昭和四六）年には岩内町郷土館を創設し、初代館長を務めた。岩内町名誉町民。岩内町文化賞、北海道文化奨励賞受賞者。一九七四（昭和四九）年五月四日永眠。（加藤史朗）

写真：喜寿を迎えた頃の著者

参考文献
佐藤真一郎『十狼記』（昭和五五年・私家版）

テキスト版＊

白水会記録会計

著者：佐藤彌十郎
発行：岩内町郷土館
２０２２年７月17日
企画：岩内町郷土館・土香る会（有島記念館と歩む会）
編集：梅田滋
判読・校正：磯野美和、井上剛、枝元るみ、玉田茂喜、浜田和子（五十音順）
監修：加藤史朗